あの日の思い出

雷那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの日の思い出

【Ｎコード】
Ｎ０３９６Ｑ

【作者名】
雷那

【あらすじ】
この小説は少年くろあが「チャット」というものに出会ってからの日常様々な出会いそして少年の成長を描いていきます。
チャットでの友情・青春・恋愛が中心となっております。

始まりのチャット（前書き）

ここから僕の新しい日常が始まる

始まりのチャット

今日も僕はゲームをやっていて詰まってしまいパソコンで攻略サイトを調べていた。
あるひとつの某攻略サイトに入って載っている攻略方を見ていると横の隅のほうに「チャット」と書かれている文字を見つけた。僕はこの頃チャットという意味はもちろん知っていたが特に今現在までは興味がなかった。だけど、なぜか今日に限ってそのチャットをマウスでカチッと素早く押しそのページを開いていた。開いてみるとそこでは、なにやらかっこいいアイコンやかわいいアイコンをつけた人たちが自由気ままに楽しそうに話していた。それをみた僕は楽しそうに思い、気づけば名前のとこに文字を打とうとしていた。だが名前をつけようとした時に僕は名前をどうしようと考えた。

5分ぐらい考えた結果結局適当に「くろあ」という名前で入室することに決めた。だが、この「くろあ」というＨＮがこの先もずっと使っていくとはまだこの時思ってもいなかった。
そして早速入室してみた。

管理人　：　くろあさんが入室しました

入室したもののまず始めはなにをすればいいのか迷ってしまった。
とりあえず僕は挨拶は必要だろうと思い挨拶をしてみた。

くろあ　：こんにちは
むらぁ：こんｗ
リッド：ちわぁ～

挨拶をしてみると入室している皆からの返事が早速あった。なんだ

かこの時自分は不思議な気持ちになった。
むらぁ：くろあさん初めましてよろしくねw
リアラ：お初よろしく～
皆から初めましてというログがあったので僕も初めましてと書き込むことに
くろあ：初めまして。くろあです、よろしくお願いします。
リッド：お初～タメOKなのでよろしくw
むらぁ：私もタメOKだよ～
翠零：タメOKよろしくw
くろあ：はい、じゃあ僕もタメOKなのでよろしくです
一通りの挨拶を済ませてみるとこの時点でよくわからないことがあった。それはここの全員が使っている「w」の意味が一切僕にはわからなかった。僕は皆のログを見ていてずっとなんだろ～と考えていた。だが「w」の意味はのちのち自力でわかることになる 。だが今度は何を話せばいいのか困った。
リアラ：明日も学校だよ。。だるいね～・・・
リッド：しょうがないさ。学生は勉強することが仕事みたいなもんだしな。
翠零：そうそうw
皆は皆で楽しそうに会話していた。リアルでも結構消極的なほうの僕はチャットの方でもあまりうまく溶け込めなかった。だが、会話に入っていけない中ボーっとしているとある人から声をかけてもらえた。
むらぁ：くろあって何歳なの？

おぉまさか初心者の僕が話してもらえるとは・・・

くろあ：えっと１３の中１。

むらぁ：あ、そうなんだｗじゃあ一緒だねｗ私も１３の中１だよぉｗ

やっとなんかまともな会話だ。僕が嬉しくしているとなんとそこから会話が広がっていった。

リアラ：私も中１だよ～ｗ

リッド：俺は１４の中２

翠零：俺１５の中３ｗこの中じゃ一番年上だなｗ

くろあ：へぇ～皆歳近いんだね。

チャットって意外と歳近い人いるんだな。だったらなんか話しやすいな～。

くろあ：話変わるけど実はチャット今日初めてやるんだ。

リアラ：そうなんだ！じゃあ初チャットだねｗ

翠零：めでたいぜｗｗ

むらぁ：だったらわからないことあったら言ってね。なんでも教えるからさｗといってもチャットは話すことメインだから教えることあんまりないけどｗ

くろあ：うん、よろしくね。早速なんだけど皆がつけているアイコンって僕もつけることできるの？

そう、まだ僕はこの時アイコンはつけていなかったのだ。

むらぁ：うん、できるよｗ会話入力するところの下にアイコンって文字あるからそこ押して開いたら好きなアイコン選んで押したらい

いよw

むらぁの言ったとおり会話入力の下にアイコンの文字を見つけ開いてみた。そこにはたくさんのアイコンがあった。そして僕はその中から茶髪で赤い色の服を着ているアイコンを選んだ。

くろあ：こんな感じでいいかな？
むらぁ：お、いいねwやっぱりアイコンあったほうがいいよw
リッド：だなw

とりあえずアイコンが皆と被らない様に選んで正解だった。皆のアイコンはむらぁは紫髪をしたちょっと幼い顔で女の子アイコン、りあらは緑髪でちょっと気の強そうな顔で女の子のアイコン、リッドは赤髪で強そうな感じの男のアイコン、翠零は帽子をかぶったクールそうな男性のアイコン。ほんとアイコンあったほうがいいなぁと僕はしみじみ思った。

そしてアイコンをつけたところでふと時計のほうを見ているともう１０時だということに気づいた。
中学生の頃の僕は父さんの部屋でパソコンをやっていて特に中１の頃は色々あって３０分から１時間しかパソコンはつつけなかったんだ。というわけで僕は退室することにした。

くろあ：あ、早いけど今日はもう退室するね。
りあら：お疲れ～w
翠零：お疲れ様w
リッド：乙
むらぁ：おつ～、また明日も話そうね＾＾
くろあ：それじゃ

管理人：くろあさんが退室しました

チャットな日々

次の日から僕はチャットが凄く楽しみになっていた。そして夜また僕はパソコンをつけ急いでチャットに入室した。

管理人：くろあさんが入室しました
くろあ：こんばんわ～
むらぁ：こんｗ
りあら：くろあ昨日ぶりｗ
リッド：おいっす
藍：こんばんわ

今日は翠零はいなかった。その代わりにアイコン無しの初の人がいた。

くろあ：藍さん初めまして。くろあですタメＯＫなのでよろしく。
藍：はい、私もタメＯＫなのでよろしくねｗ

むらぁ：ねぇ皆ってなんか部活入ってる～？ちなみに私はバレーボール
りあら：吹奏楽だよｗ
リッド：俺は帰宅部ｗｗ
くろあ：僕は卓球部に入ってるよ
藍：私はバドミントンだよｗ
リッド：見事に皆違う部活だなｗ

たわいもない会話で今日もまた楽しく皆で毎日を過ごしていた。そしてチャットを始めて少しずつ慣れてきた１ヶ月後そのときには僕は父さんがいないときを見計らってパソコンをつけチャットをした

りしていて本当にはまっていた。この1ヵ月間で僕は「w」の意味を知ったり、様々な人たちと出会った。そしてまた今日もチャットへ入室した

管理人：くろあさんが入室しました。
くろあ：こんばんわw
リッド：おいっすw
むらぁ：あ、くろあだwこん＾＾
奈々：こんばんはw

ん、今日もまた新しい人が来てるな。

くろあ：お初です、奈々さん。タメOKなのでよろしくですw
奈々：初めましてw私もタメOKです、よろしくw

この時奈々のアイコンは黒髪で優しそうな顔の少女のアイコンを使っていた。この時奈々がこの先ずっと僕の重要で大切な一人になるとはこの時は全く思ってもいなかった。

奈々：皆はこのチャットいつごろから始めた？
くろあ：僕は12月後半だから1ヶ月ちょっと前かな。
リッド：俺は4ヶ月だなw
むらぁ：私は3ヶ月w
くろあ：奈々さんは？
奈々：この中ではくろあと一番近いな～w私は丁度今日で1ヶ月w
くろあ：へぇ～そうなんだ。でも奈々と今まで全然会わなかったね。
奈々：私ほんとたまにしか入室しなかったからwほとんど閲覧とかだったよ。。だから閲覧してたとき実はくろあやむらぁの事知ってたw
むらぁ：なるほどねw

この後もみんなでいつものように楽しく過ごした。だけどこの日からりあらに続いてむらぁとリッドのチャットに来ることが減ってきた。

そして今日も僕はチャットへと入室した

管理人：くろあさんが入室しました。
くろあ：こん
奈々：こんw
ムロウ：こんばんw
影：こんばんわ～
朱雀：こんばんわw
ハル：どうも＾＾

むらぁやリッド、りあらがいない代わりにたくさんの人たちが毎日チャットに来ていた
朱雀：皆って携帯とか持ってる？
奈々：私は持ってるよw
ムロウ：俺も持ってる
くろあ：僕は高校から携帯持ってる・・・・。。
ハル：私も高校から～
朱雀：俺も持ってるぜぃ
くろあ：いいなぁ～携帯持ってるなんて・・・・。僕も欲しいw
ハル：そうだそうだ！うらやましいぞぉ～w
奈々：wwそれよりムロウと朱雀持ってたんだwねぇねぇよかったらメールアドレス交換しようよ
朱雀：おぉいいよw
ムロウ：俺もいいぞw

くろあ：あ～いいな～僕も持ってさえいれば・・・・。。
ハル：ほんとだよwここはないもの同士で語り合おうよくろあw
奈々：まぁまぁふたりともwくろあもハルも携帯持ったらメアド交換しようよw
くろあ：高校までが長い・・・・。。

というわけで奈々たちはメールアドレスを交換していた。僕も奈々とメールしたかったんだけどなぁ。ていうかできれば皆ともメールしてみたいと僕はずっと思っていた。

月日は流れ４月僕は中学２年生となった。まぁ中学２年になったといっても何が変わったとかは特にはなかった。学校へ行って友達と話して部活をして夜はチャットという相変わらずの行動をしていた。だが少し変わったことがあった。それは今まで３０分から１時間という制限があったパソコンを使う時間が２時間に増えたのだ。ほんとこの時は父さんに感謝した。
忘れていたがこの某サイトはチャットが７個あった。それぞれ違うチャットで絵を描いたりアイコンが違っていたりしていた。僕がいつも使っているのはアイコンチャットだ。

そして４月半ば今日は父さんたちが飲み会で僕はいつも道り父さんの部屋でひっそりチャットをつけていた。ふとそれぞれのチャットを見てみるといつもと違うチャットになぜか奈々がひとりだけいた。僕はそれを見るとすぐさま入室していた。

管理人：くろあさんが入室しました
くろあ：一括w

奈々：いかつ～ｗ

一括といかつ～はなぜかこのチャットの挨拶となっていた。

くろあ：珍しいね奈々がこのチャットにいるの。しかもひとりで
奈々：うん、なぜか気分で来ちゃったｗここのチャットだけほとん
ど人来ないししょうがないｗくろあは入ってきてくれたんだねｗ
くろあ：あぁ奈々の名前があったからね。
奈々：えへへｗありがとうｗ
くろあ：いえいえどういたしましてｗまぁとりあえず適当になんか
話そうｗ
奈々：うんｗ

この後奈々と楽しく話していた。そして奈々は意外な話題をだして
きた

奈々：ねぇねぇよかったらくろあの本名教えてよ～ｗ
くろあ：え、うんいいよ。

本当に意外な話題をふってきた。でもなぜかこの時僕には嫌な感じ
はしなかった。むしろ僕の本名を奈々には知ってほしかった。
こうして僕と奈々は本名を教えあった。

奈々：へへ～なんか嬉しいなｗ
くろあ：僕もｗ

この後も奈々と1時間はずっと話していた。
くろあ：そろそろアイコンチャットのほうも人数増えてきたし移動
する～？
奈々：そうだね。じゃあ移動しようかｗ今日くろあとふたりだけで

話しができてよかったよwまたふたりで話そうね、くろあw
くろあ：僕もだよ。こちらこそそのときはよろしくねw

この日僕は奈々に凄く近づけた気がした。そう本当にこの日は今現在まで一番奈々に近づけた日だった。この日のことを僕はずっと覚えている。

くろあ：あぁ暇だな～。。
ムロウ：まぁそんな時もあるさ。
奈々：暇ってことは平和だって証拠だよw
くろあ：まぁそうなんだけどね。
零翠：そういう時もあるさ。

今日も相変わらずチャットで暇をしていた

くろあ：ていうか零翠久しぶりだねw
零翠：俺はここにはほんとたまに来るだけだからw
奈々：私もたまに零翠がいるのみたことあるw
ムロウ：俺は今日初だけどなw
くろあ：りあらやむらぁ、リッドは元気にしてるかな～？

前にも言ったがむらぁ達はここに来る率が本当に少なくなっていたがもうこの頃にはほとんどというレベルではなく全然来なくなっていた。正直たまに懐かしく思い寂しく何回もまた喋りたいという気

持ちは大きかった。

奈々：じゃあ呼んでみる？
くろあ：え！？
奈々：呼ぶっていってもむらぁだけどねwメアド交換してたんだw
零翠：おぉ呼ぼうw呼ぼうw
くろあ：うん、じゃあよろしく奈々w
奈々：了解wちょっと待っててねw

そして数分後に本当に彼女は来てくれた。
管理人：むらぁさんが入室しました
むらぁ：皆久しぶり！
くろあ：おぉwむらぁ久しぶり～ww
零翠：本当に来たw
ムロウ：久しぶりだな、むらぁw
むらぁ：奈々からくろあが寂しがってるって聞いたから来てあげたよw
くろあ：おぃおぃ、僕は別に寂しがってなんかいないよww
奈々：嘘ぉ～今さっきまで元気にしてるかな～とか言ってたくせにwしかもたまに最近来ないねとこ言うじゃんww
むらぁ：やっぱり寂しかったんじゃんw
くろあ：うるせーww
零翠：お前らって仲いいなw
むらぁ：う～んやっぱりこの中では結構付き合い長いしねwまぁ私最近来てなかったけど
くろあ：そうだなwここで初心者だったときよくむらぁに色々教えてもらったっけw
むらぁ：うんうんw懐かしいねw
ムロウ：そんな事があったのかw
奈々：今では良い思い出なんだねw

むらぁ：あの時は楽しかったよね～w

むらぁが来てから皆はいつもより楽しくしゃべっていた。もちろん僕もこんなに楽しいのは久しぶりだった。やっぱりこのチャットにはむらぁが必要だと僕はこの時思った。

むらぁ：さてと早いけどおちようかなw

くろあ：え、もうおちるのか？

むらぁ：うん、色々とリアルで忙しいからね。。

奈々：むらぁちゃんまたメールするよw

ムロウ：俺もメールするからな～w

零翠：またどこかで会いましょうw

むらぁ：うんwあ、くろあまた私がいないからって寂しがっちゃだめだぞww

くろあ：誰が寂しがるかよwでも、絶対またここに来てよwむらぁが来てくれるとやっぱり楽しいからねw

むらぁ：あはwそれって私を必要としてくれているってこと？

くろあ：何もいえないw

むらぁ：ありがとね、くろあそれでも嬉しいよw皆からこんなにあたたかい言葉がもらえることがwそれじゃあね皆今度はいつ来れるかわからないけどまた会おうねwバイバイw

管理人：むらぁさんが退室しました

だけどこの日以来むらぁを見ることはなかった。そうこの日がむらぁとの「最後」の会話だった

むらぁや奈々に並ぶほど大きな出会いを僕はもうひとつしていた。
それは少し時間は戻って中学1年の春休み。この日は父さんが仕事でしばらく家にいないのでこっそりパソコンをつついていた。そして僕がチャットに早く来すぎて僕はアイコンチャットで人が来るのを待っていた。

くろあ：誰か来ないかな・・・。。

管理人：とりでさんが入室しました

とりで：こんにちは

くろあ：こんw

とりで：初めましてくろあさん。タメOKなのでよろしくお願いしますw

くろあ：よろしくねとりでw僕もタメOKだからw

とりで：くろあってこのチャットに結構いるよね？

くろあ：うんwあ、ていうか良く知ってるねw

とりで：よく閲覧してたからw

くろあ：閲覧かw入室はしなかったんだねw

とりで：なんか楽しく話してる中入りづらかったから入らなかった。。でも今日はくろあがひとりだから入ってみたw

くろあ：なるほどwありがとう、丁度暇だったんだ。。

これがとりでとの初めての出会いだった。とりでとはすぐに仲良くなれた。それになぜかとりでにはなんでも話せることができていた。歳が一緒だったということもあるし性格が似ていたこともあったからかもしれない。ちなみにとりでのアイコンは黄緑色の鼻の長い動物みたいなアイコンだった。
そしてとりでと出会って10日ほどたった時またこの日はとりでとふたりだった。

とりで：本当にこのチャットは面白いねw
くろあ：だねw僕もここは好きwなくてはならないものになってるw
とりで：うん。春休み中にこの場所と出会ってよかったwこれからもたくさんの人と出会っていけたらいいなw
くろあ：出会えるよ。これから先ずっとねw
とりで：くろあ、これからも友達としてよろしくねw
くろあ：もちろんだよ、よろしくねとりでww

だけどとりでは毎日来てたのに春休みが終わるとパタリと来なくなった。
だがとりでとはこの先1回だけ会うことになる。

第２の居場所（前書き）

「交流の街ＴＯＷＮ」そうここが僕の第２の居場所となる。

第２の居場所

今日珍しく人がいないので僕はネットサーフィンをしていた。そしてひとつ興味深いサイトを見つけた。
「交流の街ＴＯＷＮ」というゲームを見つけた。そこは普通の生活シミュレーションゲームみたいなもので、自分の能力を上げたり、マイホームを買ったり、結婚したりして人と交流していく場所である。
僕は早速興味津々でパスワードを作り名前をアイコンチャットと同様に「くろあ」で登録した
登録して入ってみたのはいいものの人はいないしやり方がいまいちわからなかった。

とりあえず僕はＧＹＭという建物があったのでそこをクリックして開いてみた。そこには能力アップの筋トレメニューがたくさんあり適当に押してみると見事に能力が上がった。
またＳＣＨＯＯＬという学力アップの建物もあったので同様に能力アップをした。
そして疲れたときには温泉の建物に入り３０秒待って体力を回復させた。
またひとつわかったがここにはメールという機能があり携帯のない僕にはとても魅力的であった。

あれこれやっているうちに結構時間がたったのだが誰も来る様子はなくここでのチャットは今日は無理と思い、いつものアイコンチャットに戻った。

翌日再びＴＯＷＮに来てみるとひとり「ろすけ」という人が来ていた。そこで早速チャットの方ではなくろすけさんにメールを送ってみた。
「ろすけさん、初めましてくろあです。よろしくお願いします」
まずは挨拶だけで送ってみた。

２分ぐらい適当に待っているとメールが送ってこられた。
「初めまして、くろあさん。メールありがとうございます。こちらこそよろしくお願いします」
とりあえずメールを見て僕はまたメールを送ってみた

「僕、昨日このＴＯＷＮ始めたばっかりなんですけど色々わからないことがあるのでよかったら教えてくれませんか？」
メールを送りまたしばらく待っているとメールが返ってきた

「いいですよｗといっても僕も約１ヶ月ぐらいしかやってないですけど」

この後メールをしあってろすけさんにこのＴＯＷＮのことを色々と教えてもらった。
「ろすけさんほんと今日はありがとうございましたｗ今日は結構遅くなったのでまた明日試してみますねｗそれじゃおやすみなさい＾＾」
メールを送りチャットの方にも念のためにおやすみと入力し今日のところは退室した。

そしてまた今日僕はアイコンチャットのほうには行かずＴＯＷＮに専念したかっとのでＴＯＷＮへと行った。
ＴＯＷＮに行くとろすけさんは居なかったが「めぐ」さんという人が居たさっそくコンタクトをとろうと思いチャットで話すことにした

くろあ：めぐさんお初ですｗよろしくですｗ
めぐ：くろあさん初めましてｗよろしくお願いしますねｗ

とりあえず僕はチャットをしながら昨日ろすけさんに教えてもらったことをしながらめぐさんとチャットをすることにした。

くろあ：めぐさんってここいつ頃から始めたんですか？
めぐ：私は３週間ぐらい前に始めましたよ。くろあさんは？
くろあ：僕は一昨日始めたばっかりなんですよｗだからまだわからないことが多くてｗ
めぐ：あ、そうなんですかｗじゃあわからないことあったら聞いてくださいねｗ
くろあ：はい、丁度昨日ろすけさんにだいたいのことは教えてもらったんですけどまだわからないことがあるのでそのときはよろしくお願いしますｗ
めぐ：あ、ろすけさんに会ったんですかｗ私もあの人に教えてもらったんですよ。はい、じゃんじゃん聞いてくださいねｗ
くろあ：そういえばここって結構人来るの全然見ないんですけど、人ってどれくらいいるんですか？
めぐ：う～ん役場見る限り人は３１人くらい登録してるんですけど実質やってる人は少ないんですよ・・・・。。たぶん１０人ぐらいしかまともにやってないと思うｗ

くろあ：そうなんですか。。もっと増えてチャットとか楽しくできたらいいんですけどねｗ
めぐ：そうですね～。。そうなってくれたら嬉しいんですけどねｗ
この後もたくさんめぐさんと話した。結構この日でめぐさんとは仲良くなれた気がした。
時間もきたのでめぐさんに挨拶をしてから僕はおちることにした。

アイコンチャットには時々行ったがやっぱりＴＯＷＮが気になったので頻繁に行っていた。
僕は学校の友達ひとりをＴＯＷＮに誘ってみた。友達は「タモリ」という名前で登録しＴＯＷＮを始めた。タモリはかなり気に入ってくれたみたいで毎日メールをしたり楽しくチャットで会話していた。気づけばその中にはたまにろすけさんやめぐさんなどが混じって楽しく話したりしていた。
また僕たちより長くＴＯＷＮに住んでいるｋｏｔａさんのりっぴさんマリさんたちに出会った。

ＴＯＷＮに住み着いて１ヶ月たつ頃にはもうすっかり僕やタモリはＴＯＷＮに慣れていて、マイホームを建てたりして楽しんでいた。
また着実に総資産が増えてきていた。

そしてＴＯＷＮでも今の現在までで一番の出会いがこの頃にあった。
いつも通り僕がＴＯＷＮで暇をしていると「沙良」さんという人に出会った。
沙良：くろあさんこんにちはｗ初めまして沙良です。よろしくお願いしますｗ
くろあ：お初ですｗこちらこそよろしくお願いしますねｗ

沙良：ここってなんか変わってますよねw変わってるっていうかチャットしながらこんなにたくさんのことで遊べるなんてw
くろあ：僕も最初来た時はびっくりしました。でもそれがここＴＯＷＮのいいところだと思いますw
沙良：ですねw私も来たばっかりだけど凄く気に入っちゃいましたw
くろあ：僕も凄くここ気に入ってますw共に楽しんじゃいましょうw

沙良さんとは初めて喋ったわりにすぐに気が合いなんでも話していた。また沙良さんと話しているとアイコンチャットで仲良くしていたとりでのことを思い出したりもした。
沙良さんは僕よりひとつ年上でどこか喋り方などお姉さん的なところも感じた。でもやっぱりひとつ年上といっても無邪気なところは変わらなかった。

僕は沙良さんと会話して僕が落ちる前はいつも沙良さんにメールを送った。
「今日も楽しく話せてよかったですwなんかいつもこうやって沙良さんと楽しく喋ることが僕はとても嬉しいですwまた明日もよろしくお願いしますwそれじゃおやすみw」などと送っていた。
沙良さんからもいつもメールがあり本当にＴＯＷＮで毎日を楽しく過ごしていた

気づけば6月後半僕も１４歳になりあと1ヶ月もしないうちに夏休みだった。
僕のリアルの友達もまたひとり誘ってみた。名前は「サナトス」で登録していた。
だけどこのサナトスはよくｋｏｔａさんと喧嘩をしていた。ネチケットがなっていないとかをよくサナトスに注意していた。だけどネ

チケットはわかるんだけど、「こん」などという挨拶が嫌いらしくて「こんばんわ」などと略さず言わなければならなかった。そして前までのＴＯＷＮはこんな感じじゃなかったなどと前とよく比較をしていた。ｋｏｔａさんも僕たちより３歳も年上なんだから子供相手にそんなに言わないでもと何回も僕は思った。
まぁでもｋｏｔａさんは悪い人じゃないんだけどね。
それとｋｏｔａさんのＴＯＷＮでの結婚相手マリさんは楽しく面白い人だった。マリさんとは話があったから僕が高評価するだけかもしれないけど。でも本当にいい人だった。

そして誕生日の時には沙良さんから誕生日プレゼントを贈ってもらった。それは「アンティーク時計」で国語、音楽、美術の能力を上げるアイテムだった。でも僕はそれは使わず現在まで沙良さんからのアイテムは保管している。

この６月後半には気づけばＴＯＷＮの人数も少しずつだが増えてきていた。

くろあ：最近少しずつだけどＴＯＷＮも人増えてきたねｗ
沙良：そうだねｗこのままもっと増えていくといいけどｗ
タモリ：うんうんｗ
くろあ：それより、今日も暑いね～。。授業中寝てるときめっちゃ暑かった。
タモリ：そういえばくろあおもいっきり寝てたなｗ
沙良：寝ちゃだめだよｗｗていうかふたりってリア友同士なの？
くろあ：あっそういえば言ってなかったねｗうん、そうだよｗ
タモリ：あとサナトスともｗ
沙良：そうだったんだ、知らなかったｗタモリさん学校のくろあってどんな感じなの～？
くろあ：聞かなくていいからｗｗタモリ言わなくていいからなｗｗ

タモリ：沙良さん、あとでメールで教えてあげるw
沙良：うんw
くろあ：おぃおぃw

基本だいたいはいつも僕、沙良さん、タモリというメンバーで話していた。たまにめぐさんが来た時にはめぐさんを入れて話していた。

そしてついに待ちに待った夏休みが来た

初めての障害（前書き）

夏休み始めから奴との戦いが始まる

初めての障害

夏休みはじめ僕はアイコンチャットの方に顔を出していた

管理人：くろあさんが入室しました
くろあ：一括ｗ
奈々：あ、くろあだｗ一括～ｗ
ムロウ：久しぶりｗ
キキ：こんばんわｗ
総：こん
きら☆：こん
疾風：いかつ～ｗ

久しぶりにチャットに来てみると結構知らない人たちがいた。

くろあ：総さんにシュンさん、疾風さん、キキさんお初ですｗタメＯＫなのでよろしくｗ
総：こちらこそよろしくｗ
シュン：タメＯＫですｗよろしく～
キキ：よろしくねｗ
疾風：よろしくｗ
奈々：それよりくろあだいぶ久しぶりだねｗリアルで忙しかったの？
くろあ：いや～別に忙しくはなかったけど色々とやっててねｗ
奈々：気になるなぁｗ
くろあ：いや、まぁほんと色々だよｗｗ

僕がいない間に奈々やムロウは結構僕が知らない人たちなどと結構仲良くなったらしい。僕もたまにはアイコンチャットに来ないといけないなと反省した

キキ：皆さんは夏休み予定とかあります？
くろあ：僕は福岡に用事で行くかな～。。あとは部活とかw
奈々：私もちょっと京都に行って来るw
ムロウ：俺は特に用事はないw
疾風：俺も家でだらだら過ごすなw
きら☆：寝る！！
総：家族旅行w
キキ私は友達と遊び三昧かなw
くろあ：正直福岡行きたくないけどなぁ。。１０日ほどこっちも来れなくなるし。
奈々：私は携帯からくるけどやっぱりパソコンからチャットはしたいねw携帯はアイコンないしw
疾風：その気持ちわかるw俺も携帯でやったとき見づらいしアイコンないしで嫌だったw
キキ：くろあさんがんばってくださいw
ムロウ：何もしないやつ同士は楽しく過ごそうぜw疾風、きら、総w
総：そうだなw
疾風：だらだらしまくるぜw
きら☆：俺は寝まくるww

ここまでは本当に楽しく会話をしていた。そう、あいつが来るまで。
。

管理人：田村さんが入室しました

くろあ：一括
奈々：いかつ～
疾風：こんw

この時僕はまた新しい人が増えたなと思ったがそれは全然違った。。

田村：こここここここここここここここここここここここここここここここんん羽馬場馬場馬場馬場馬場ばばばばばばばばばばばばばばばばんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんわわわわわあっわあえあわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわあっわわあっわ

そういつは荒らしだったのだ。だけど荒らしだけではこの時僕はまだ驚かなかった。荒らしなんてチャットではあって当然みたいなものだったし、何回も見ていたからだ。

ムロウ：今日は相変わらず暑いな。。
くろあ：ほんと暑いよね。まじだるい・・・・。
キキ：熱中症には気をつけないとね。。
田村：朝ｆだふぁｊｋｆんかひｈｊふぃんｇ間ｃｋｖｈｍがｃ巫女ｇｍヴぁ、ｒｋｖ、身ｍｈｖ、；あｃぉ；ｋｍｖｇ不ｒｃ命おｘｐ、ｋ化ｌｖｋｍｈｔんｍｋｓ、ｋｐ。ｃｒｔｌｈｋｍｓｔｈｖｈ氏ｃｊｋｌヴぁ、・ｓｌｃｋｓｊｋｖねｒｃｇｐｓｖｒ、ｋｌ；。ｒ、ｒｍｂｍｊｊ、ｖｊｃｋｖｌ、ｍｂ。ｊｖｓせｒｊｋｌｖｌｓぢｋｍｈｍ、ｓｔｈｊ。ｋ。ｖ７７

だけど僕たちは無視して会話を続けていた。相手にするとこっちまでアク禁（アクセス禁止）になるからだ。

奈々：あ、今日は早めに落ちるねｗそれじゃお相手感謝ｗ
くろあ：お疲れ～
総：乙ｗ
きら☆：お疲れ様ｗ

管理人：奈々さんが退室しました。
田村：おおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉおぉあああああああああああああああああああああああああ

この後も何回も無視をし続けたがなぜか田村はこのアイコンチャットに居続けたのだった。そして皆の我慢もついに限界だったようだ。。

総：おい、お前いい加減にしろ！迷惑だぞ！！
疾風：まぁめっちゃうざいな。。

田村：だって暇何打桃も主もももっももも桃もおっ桃おっ桃も桃も桃桃桃もおっもおももももももももももmぉぉおん！！
くろあ：嫌、暇だからってやっていいことと悪いことがあるだろ。。
田村：ししいいｓっしししっしししししししねねんええんえねねねんね

ムロウ：早く、消えてくれねぇかなぁ。。
キキ：迷惑ですねぇ。。
きら☆：あぁうざ。
総：まじ消えてくれよ！
田村：菜なんなななんあなんあんんななんだｔｔってってててててぇえ！
くろあ：はぁ・・・・。。

結局田村はだまることはなかった。とりあえず僕は２窓にしてＴＯＷＮの方で田村が消えるのを待つことにした。

くろあ：こんばんわ～。
タモリ：こんｗ
沙良：くろあさん、こんばんわｗ
みづき：こんばんわｗ
ファイナルアサシン：こんｗ
くろあ：今日は結構居るねｗ

こっちに来てみると8人もいた。やっぱり皆も夏休みなのかなと僕は思った。

くろあ：いやぁあっちのチャット専念してやってきてけど荒らしが来ちゃって、めんどいからこっちに移動してきたｗ
タモリ：なるｗ
めぐ：荒らしはだるいですよねぇ。。
ファイナルアサシン：わかるわかるｗ

とりあえず僕はこっちで楽しくしばらくしゃべっていた。だが僕の予想を超える出来事が起きた
ふと、僕は参加者名のところに名前を目を向けてみるとそこにはなんと・・・「田村」の名前があったのだ。
さすがにこれには僕もびっくりした。アイコンチャットのほうにはまだ居て発言しているし・・・。だが、僕と一緒で2窓の可能性もあると考えた。でもさすがにここまではと思った。田村は田村でも違う人だろうと思うようにしたのだが次の田村の発言でやっぱりアイコンチャットに居る田村だと確信するのだった。

田村：俺の登場！！！！！！！！！！！皆待ってた！？待ってた！？なぁなぁくろあお前も待ってただろぉぉ！？

やっぱりこいつかと僕は肩を落としたし、なぜこいつがここに来ら

れるかを不思議に思った。

くろあ：お前・・・なんでここにいるんだよ・・・

田村：ささささぁ何ででしょう！！！！！！！！！！！？？

アイコンチャットの方に目を戻してみるとやっぱり一緒の内容だった。

と、そこでメールが来ているのに気づいたしかも3件。タモリ、沙良さん、ファイナルアサシンだった。しかも皆メールは一緒で「田村って人くろあの知り合いなの？」だった。

メールをするのもさすがに皆にも伝わりにくいのでチャットのところで皆に伝えることにした

くろあ：皆、こいつ僕が最初言ってた荒らしだよ！なぜか、僕が居たチャットからここに来てる。だから相手にしなくていいよ。

タモリ：マジかよw普通ここまで来れるか？しかもくろあの居るところまでw

くろあ：だから不思議なんだよ。。

みづき：ほんと不思議だねw

田村：ふはふふふっふふはふふはははうふあは

こっちでも田村は相変わらずだった。そしてもう疲れたので本当に無視することにした。この間田村からはうざいメールきたりチャットでは荒らし行為がやばかったりしたがやっとのことでアイコンチャットからも交流の街ＴＯＷＮからも田村は消えた

くろあ：厄介な相手だった。。今までで一番やばいやつだったな。

タモリ：ほんとしつこいやつだったな。メール来たのスゲーうざかった。

沙良：あぁいう行為迷惑だよね・・・。

くろあ：うん、なんであいつがここまで。とりあえず今日疲れたからおちるねw
タモリ：おつ～
みづき：お疲れ様ですw
めぐ：お疲れですw

そう言い僕はTOWNとチャットを退室した
田村との戦いはやっと終わったがこれは一時的にしか過ぎなかった。
田村はこれから先にまた1度姿を現すのだった。

キャラクタープロフィール（前書き）

突然ですが４章までのキャラクタープロフィールです
「あの日の思い出」キャラクタープロフィール１（アイコンチャット、交流の街ＴＷＮ編現在までで中心人物）

キャラクタープロフィール

～アイコンチャット編～

～くろあ～　中学２年１４歳　♂　主人公
アイコンは茶髪で赤い色の服の少年のアイコンを使っていたが１ヶ月ほどで黄色の髪の鎧をつけた少年のアイコンに変更。
アイコンチャットではマイペースで人に合わせるように発言をしている。
様々な人と出会い少しずつチャットに慣れていっている中級者。今では交流の街ＴＯＷＮと掛け持ちでチャットをしている

～むらぁ～　中学２年１３歳　♀　チャット引退？
紫髪をしたちょっと幼い顔で女の子アイコンを使用
人の気持ちを考え、なんでもすぐに溶け込めるタイプ。
初心者の頃のくろあにアイコンチャットのことをすべて教えた。また、今ではチャットを使っておらず詳細不明。くろあにとっての大切なひとりの人物

～りあら～　中学２年１４歳　♀　チャット引退？
緑髪でちょっと気の強そうな顔で女の子のアイコンを使用。
活発的で本当に元気な女の子
リッドとは気が合い、よく喋っていた。現在は詳細不明

～リッド～　中学２年１４歳　♂　チャット引退？
赤髪で強そうな感じの男のアイコンを使用
ノリがよくなんでも楽しむことができる人物
りあらとは気が合い、よく喋っていた。現在は詳細不明

～翠零～　中学３年１４歳　♂　クール
帽子をかぶったクールそうな男性のアイコン使用
何事にも冷静で荒らしが来ても冷静に対応
たまにアイコンチャットに来るが最近は出現率が減少中

～奈々～　中学２年１３歳　♀　皆の人気者
黒髪で優しそうな顔の少女のアイコンを使用していたが現在ではあらが居なくなったのでりあらが使っていたアイコンを使用している。
誰に対しても優しく誰とでもすぐに仲良くなれる。
皆からの人気者でチャットでは中心的な人物となっていっている。
くろあにとっては大切なひとりの人物となってきている。

～とりで～　中学２年１４歳　♂　行方不明？
アイコンは黄緑色の鼻の長い動物みたいなアイコンを使用。
親しめやすい性格をしている
春休みだけアイコンチャットに顔を出していてくろあとはすぐに仲良くなれた。春休みが終わると行方をくらました。くろあにとっては大きな出会いのひとつとなった。

～ムロウ～　中学３年１５歳　♂　暇人
アイコンは翠零同様、帽子をかぶったクールそうな男性のアイコン使用。
落ち着きがあるがやるときにはやる人
最近ではアイコンチャットに頻繁に顔を出している。着実に彼はアイコンチャットの中心人物として上がってきている。また、チャットに対してはかなりの上級者とも見れる

～疾風～　中学１年１２歳　♂　只今修行中

アイコンは髪が青色のクールそうな少年のアイコンを使用
なんにでも興味を持てる性格をしている
最近アイコンチャットを始めた様子。この後彼はチャットレベルが飛躍的に伸びていく。

～キキ～　小学６年１２歳　♀　予想外少女
アイコンは奈々が元使っていた黒髪で優しそうな顔の少女のアイコンを使用。
年齢相応でまだ幼い感じが出ている
完全なチャット初心者な少女。最年少でこのあと彼女はくろあにとっての予想外出来事人物のひとりとなる。この後交流の街ＴＯＷＮにも登場

～きら☆～　中学２年１３歳　♂　普通？
アイコンはまだ現在は使っていない。
アイコンチャットと交流の街ＴＯＷＮでは微妙に性格が違う。こっちでは普通な性格。
この後でてくる「もこ」という少女が好きな様子で「もこ」だけには忠実になんでも従う。
この後交流の街ＴＯＷＮにも登場

☆☆番外編☆☆

～田村～　？？？？　たぶん♂　一番厄介な荒らし
凄い筋肉でハゲている男のアイコンを使用
性格は荒らしとしか言いようがない
くろあが一番手こずった荒らし。どこか不思議でチャット能力も微妙に高い。本当に普通じゃない荒らしであった。
この後交流の街ＴＯＷＮに登場

～交流の街ＴＯＷＮ～

～くろあ～　中学２年１４歳　♂　主人公
性格はアイコンチャットとほぼ変わらないが、アイコンチャットより少し言葉が丁寧になっている。
交流の街ＴＯＷＮでも様々な人と出会い大きく育っていくことになる。現在ＴＯＷＮではまだまだ初心者レベルである。

～めぐ～　中学１年１３歳　♀　契約者
心優しく、少し消極的な面もある
ＴＯＷＮメンバーではくろあやのりっぴ、マリ達などとよく話している。後にくろあとＴＯＷＮ内での関係が発展していくことになる

～ろすけ～　中学２年１３歳　♂　ＴＯＷＮでの先輩
気軽に接してくれる人で話しやすい性格をしている
くろあにＴＯＷＮでのだいたいのことを教えてくれた人。ＴＯＷＮでは中級者レベルにあたる。

～タモリ～　中学２年１３歳　♂　リア友
好奇心旺盛な性格
くろあが初めてＴＯＷＮに誘ったリア友。リアルでもＴＯＷＮでも面白人物。最初はネットも初心者レベルだったがＴＯＷＮに入ってからは急成長をする

～沙良～　中学３年１５歳　♀　きっかけの少女
喋り方はお姉さん的だが無邪気なところがある。
基本ＴＯＷＮではくろあとタモリと絡んでいる。くろあとはメル友で１日のＴＯＷＮが終わった後は必ずメールをする。くろあにとっての大切なひとりの人物。

～ｋｏｔａ～　高校２年１６歳　♂　堅物
生真面目で少しでもゆるいことなどがあった場合は許さない。本当に生真面目な性格
少し堅物な人物であり、ネチケットが少しでも悪い人とは気が合わない。（例、サナトス）マリさんには優しく接するもとい気がある？ＴＯＷＮでの上級者。

～マリ～　中学２年１４歳　♀　抑制者
ゲーム好きで、みんなと気軽に話せる性格
くろあと一時期ひとつのゲームの話で盛り上がりそれ以来くろあと仲良くなった。またＴＯＷＮ内でのｋｏｔａの結婚相手。唯一ｋｏｔａを宥めてくれる人。そしてＴＯＷＮの上級者。

～ファイナルアサシン～　小学６年１１歳　♂　普通
小学生にしては冷静である。
ゲーム大好きの少年で、ネットについてもかなりの能力を持っているスーパー小学生。ＴＯＷＮでも将来有望な少年。

～サナトス～　中学２年１３歳　♂　リア友
自己中心的なところがあり少しわがままタモリがＴＯＷＮに誘ったリア友くろあとも部活が一緒で友達である。だが性格的にはくろあはあまり好きではない。

～陸戦型～　中学２年１４歳　♂　リア友
リアルとＴＯＷＮでは本当に面白い性格をしている
リアルでのくろあの友達そして同じクラスで同じ部活の者である。
リアルでもＴＯＷＮでもサナトスとは仲が悪い。後にサナトスと問題を起こすことになる。

～キキ～　小学６年１２歳　♀　予想外少女
アイコンチャットと性格は全く一緒である。
ここＴＯＷＮで予想外の行動をくろあに起こす

～きら★～　中学２年１３歳　♂　変態
アイコンチャットとは違いなぜか変態と化した
タモリと結構言い争いなどをするがこれは仲がいいのか悪いのかがよくわからない。ＴＯＷＮでは来て早々資産金ランキング１位となる実力を持っている

☆☆番外編☆☆

～田村～　？？？？　たぶん♂　一番厄介な荒らし
アイコンチャットと一緒の性格
どうやって交流の街ＴＯＷＮに来たのかがナゾで今の現在まで不思議となっている

思い出の夏休み

夏休み僕は朝に少し交流の街ＴＯＷＮに行きそして部活へ行き帰ってきてから父さんが居ないときにはアイコンチャットそして夜は２窓でアイコンチャット&交流の街ＴＯＷＮという行動の繰り返しをしていた。
そして部活が終わって家に帰ってきて父さんが居なかったのでパソコンを起動させてアイコンチャットをすることにした。アイコンチャットに行くとひとりキキがいた。とりあえず僕も入室することにした

くろあ：こんｗ
キキ：こん＾＾
くろあ：今日はキキひとりなんだね。キキはいつここに来たの～？
キキ：私は１５分ぐらい前に来たよｗ
くろあ：なるほど、今日皆忙しいのかな？ムロウとか暇そうだけどなｗ
キキ：そうだね～。全然来ないしねｗ

しばらくの間僕はキキと話していた。話しているうちに少しずつ話題が無くなってきたので僕はＴＯＷＮに誘ってみることにした。

くろあ：ねぇキキは交流の街ＴＯＷＮって知ってる？
キキ：知らないよ～。。
くろあ：そうか。じゃあちょっと来てみない？ここにＵＲＬ載せるから。
キキ：うんｗくろあがいるならいってみようかなｗ
くろあ：じゃあ載せるね。最初に名前とＩＤ決めたらＴＯＷＮ内に入れるから

キキ：わかったよｗ

僕は２窓にしＴＯＷＮに行きキキが来るのを待った。数分後キキはＴＯＷＮに入室した。
そしてたぶんＴＯＷＮのこと全然わからないだろうと思って色々とメールを送って説明することにした。メールを５件以上越す頃にはキキもＴＯＷＮのことがだんだんとわかってきたようだった
そのままＴＯＷＮで僕はメールじゃなくキキとチャットをすることにした

くろあ：キキ少しはわかってきた？
キキ：うんｗくろあが丁寧に教えてくれるからだよｗ
くろあ：いえいえｗとりあえず楽しんでＴＯＷＮやっていこｗ
キキ：そうだねｗもう少し私が慣れるまでよろしくねｗ
くろあ：もちろんｗ

この後僕たちは少し話して時間も来たので僕はおちることにした。
夜僕はまた２窓をしてＴＯＷＮのほうに来てみるとアイコンチャットではなくＴＯＷＮにキキはいた。

とりあえず僕はキキに「ＴＯＷＮどうかな？やっていけそうかな？」とメールを送ってみた。
そして２分ぐらいでメールが返ってきた。

キキ：ここ楽しいねｗすっかりはまっちゃったよｗありがとうね、くろあこんな楽しいところ教えてくれてｗ

くろあ：どういたしましてｗせっかくだから今このＴＯＷＮに居る人たちと話してみなよ、皆いい人だからｗ

キキ：うんwじゃあ早速挨拶のメール送ってみるねwそれじゃまた後で。

くろあ：あぁわかった。

ここで僕たち一旦メールをするのをやめた。僕はＴＯＷＮに集中していたのでアイコンチャットで話をしていることについていけない状態になったので僕はＴＯＷＮで暇つぶしすることにした。

僕は呆けているとあることに気づいた。今恋愛の能力がいつの間にか２００を越えていた。そうこのＴＯＷＮは２００を超えると恋人がつくることができるのだ。早速僕は恋人斡旋所へ行ってプロフィールを登録した。

恋人は５人までつくることができて、僕はとりあえずその１人をつくることにした。

僕は真っ先に沙良さんのことを考えたが彼女は最近ＩＮ率が以上に下がってきているから恋人ＯＫの返信来るのが遅くなるだろうし、うまく恋人になったとしてもラブラブ度を上げれると思わなかったのでひとまず沙良さんは保留にすることにした。

そして僕はもうひとりのめぐさんのことを思った。彼女なら今恋人もいないしＩＮ率も結構高いほうだし、話も合う。だから僕はめぐさんに恋人申請のメールを送ることにした。正直このメールを送るときは凄い緊張した。

丁度今めぐさんが来ていたので僕はメールを送った後メールが返ってくるのを待った。

少しするとメールが返ってきた。僕がどきどきしながらメールを見てみることにした。

めぐ：くろあさんなら全然ＯＫですよｗこれから恋人同士ということでよろしくお願いしますねｗ

返ってきた返事はＯＫだった。僕は本当にこの時は嬉しかった。こうしてＴＯＷＮでの初の恋人はめぐさんになった。

この後も僕とめぐさんは何件かメールをし合った。またコマンドにあるデートをするでラブラブ度を上げていった。

そうこうしているうちにいつの間にかキキからメールが来ていた。

キキ：一通り皆にメールしてみたよ～。ここの人たち優しいし面白いねｗ

くろあ：そうでしょｗでもとりあえずこれから楽しんで行ってねｗ

キキ：うんｗあ、くろあ少し聞いていい？

くろあ：ん？別にいいよｗ

キキ：ありがとうｗくろあって彼女っているの？あ、リアルでねｗ

くろあ：あぁ。。いないよ～。。

キキ：へぇ。。いないんだ～。居ると思ったよｗ

くろあ：ｗｗ居たらここでこんなにのんびりとＴＯＷＮしてないよｗキキは彼氏とか居るの？

キキ：私も居ないよｗでも気になってる人は居るんだ・・・。。

くろあ：へぇ気になる人は居るんだ。。僕は気になる人も居ないからな・・・。よ～し恋愛に関してもこれからがんばるぞ～！というわけでお互い頑張ろうｗ

キキ：うん、がんばろｗ

今思ったらこんな恋愛的な話をするのはＴＯＷＮでは初めてだった。だがこの会話から後で予想外の事件が起こってくるのだった。

時間も来てたのでそろそろ僕は落ちる事にした。

くろあ：それじゃあ今日はここらへんで落ちるねｗお相手感謝ｗ
タモリ：おつかれ～
キキ：お疲れ様ｗまた話そうねｗ
めぐ：お疲れ様ですｗ
ファイナルアサシン：おつ～
ろすけ：お疲れ様～

いつの間にか今日で８月になっていた。僕は部活に友達との遊び、そしてＴＯＷＮにアイコンチャットとある意味忙しい日々を過ごしていた。

今日はＴＯＷＮの方へと入室した

くろあ：こん～
キキ：こんにちは
タモリ：おいっすw
きら★：こん
沙良：こんにちはw
サナトス：う～っす

来てみると見慣れたメンバー達がいた。ちなみにきら★は僕が誘ってみた。
僕は沙良さんが珍しく来ているのでメールをうってみることにした。

くろあ：お久しぶりw沙良さん。元気にしてた？

沙良：あ、くろあ君ひさしぶりだねw元気だったよ～。。色々忙しくてここに来る時間がなくてね～。

くろあ：なるほど。それじゃあしょうがないねwでもたまには来てねw前みたいに色々と喋りたいしw

沙良：うん、そうだねw私も極力ここにくるようにするよw

この後も僕たちはメールをし合った。メールをしている途中もう1件違う人からメールが来た。その主はキキだった。

キキ：毎日暑いねぇ。。暇だよ～。

とりとめのないメールだった。とりあえず僕は返信した。そしてまた沙良さんとのメールに戻った。
それからというもの今日はこの沙良さんとメールをしてキキにメー

ルをしての繰り返しだった。

だがこのメールをしていた時にふと気づいたことがあった。
キキとメールしていた時には普通に送信などしていたが沙良さんとメールする時は違って明らかに沙良さんのことを意識してそして楽しくメールをしていたんだ。

よく考えてみると僕はいつも沙良さんがＴＯＷＮに入室した時には声をかけていたし１日の終わりには必ず今日の話したことについてのメールをしていた。

この時僕はやっぱりと思った。この感情はむらぁや奈々と話していた時と一緒で僕は声も顔も知らない沙良さんの事が好きになっていたんだ。。

そんな感情を持ちながら沙良さんが退室した後もＴＯＷＮをしていた。
やっている途中珍しい人がＴＯＷＮへと入ってきた。
僕が参加人数の名前のところをふと見てみると「あるふぁ」という名前があった。

そうこの「あるふぁ」という人は交流の街ＴＯＷＮの管理人であった。
僕はＴＯＷＮに来て以来あるふぁさんとはほんの少し喋ったことがあるがそこまで濃く話したことはなかったので少し挨拶版で話してみることにした。

くろあ：あるふぁさんお久しぶりですw
あるふぁ：あ、どもwお久しぶりです。そして皆さんこんにちは。管理人のあるふぁです。
タモリ：え！？あるふぁさんて管理人なんだ！！お会いできて光栄ですww
あるふぁ：どうもですw―、Д´）＞ビシッ！
くろあ：それよりあるふぁさんがここに来る事珍しいですけど今日はなんかあるんですか？
あるふぁ：あ、そうそう忘れるところだった。この交流の街ＴＯＷＮに新しく２つの街を増やしますwあとアイテム増加ですw
キキ：おぉ凄いですねw
めぐ：なんか増えるの久しぶりですねw
くろあ：おぉ楽しみw
あるふぁ：今から増やすのでしばしお待ちを。。

そして３０分後・・・・
あるふぁ：完成したぜw
くろあ：早ッ！！
あるふぁ：街は完成してたからねwとりあえず新しい街にいけると思うw
きら★：よし早速行くぜ！！
僕は新しくできた街に行ってみた。正直あまり今までの街とは中身は変わらないが外見は海と山の街で変わっていた。
きら★：俺山好きだから引っ越すわw
陸戦型：んじゃあ俺海のほうが好きだからそこに家建てる。
くろあ：僕はこのまま普通の街でいいやwここ気に入ってるしw

めぐ：じゃあ私もこのままくろあさんの家の隣で居ますねw
タモリ：俺も今はここでいいやw
キキ：私も～。
あるふぁ：とりあえず皆さん２つの街のことよろしくね。それでは俺はおちる。またいつか。
めぐ：お疲れ様ですw
くろあ：またいつかw
タモリ：お疲れ様～

この日からＴＯＷＮに２つ街が増え合計４つの街になった。そしてこれから現在まであまりＴＯＷＮは変わることはなくなった。

夜、僕は昼にＴＯＷＮに集中していたからアイコンチャットの方に行けなかったのでＴＯＷＮは２窓で放置しておいてアイコンチャットの方に集中するようにした。

管理人：くろあさんが入室しました
くろあ：一括～
奈々：こんw
ムロウ：こん～
疾風：こんばんわw
きら☆：こん
もこ：こんばんわ。そして初めまして～w
くろあ：あ、もこさん初めましてwよろしくねw
奈々：最近くろあここ来るの減ってきてな～い？
くろあ：そうかな？

奈々：そうだよw何してるかわからないけどちゃんとここにも来てね～。。
くろあ：あぁごめん、そうするよw
今思うと今日ここで奈々と話すの久しぶりかもしれないな。よく考えてみると確かに僕ここに来るの減ってきてるな。気をつけよう。。

もこ：皆って恋人いるの～？ちなみに私はいないw
ムロウ：俺はいない。。
くろあ：僕もいないよ～
奈々：私もいないw
疾風：俺はいるw
きら☆：俺にはもこだけだぜw
もこ：疾風って彼女いるんだwきら☆には何も言えないw
疾風：いるさw妄想じゃなくリアルになw
きら☆：おぉなに言ってるんだもこよwこんなにも愛してるというのにw
もこ：ww
奈々：きら☆ってなかなか積極的だねw

奈々って彼氏いなかったんだ。なんか安心したようなしないような気がする。

ここでの会話を見る限りもこさんはきら☆と仲が良いっぽい。ていうかきら☆が一方的なような気もするんだけどな。。それより奈々が言ったとおりきら☆は積極的すぎるな。。
でもそのきら☆の積極的なところがうらやましい。僕も積極的だったら沙良さんにこの思いを伝えられてるのかもしれない。。

この後僕たちはいつも道りたわいもない会話を続けていた。

全然思いもしなかった。彼女がそんな風に思っていたなんて・・・。
僕はこの時全然気づいていなかった。彼女の気持ちに・・・
そう、この8月5日に予想していなかった事が起きた。

今日は僕はいつも通りアイコンチャットとＴＯＷＮで2窓をしていた。

くろあ：今日も相変わらず暇だった。。
タモリ：だな。部活以外と特になにもしてないような気がする。。
マリ：暇っていうことは平和っていうことだよｗいいじゃんｗ
キキ：そうですねｗ平和が一番ですｗ
ファイナルアサシン：まぁ暇もアレだけどね。。

とりとめのない話をしながら時間が過ぎていっていた。
そうしていると1通のメールが僕の元に届いていた。差出人はキキからだった。

キキ：少しくろあに言いたいことがあるけどいいかな？

この本文を見た時僕はなんだろうと思った。もしかしてキキに怒らせるようなことしたかなとも考えた。

くろあ：あぁうん。別に大丈夫だけど。。

そして少ししたらメールが返ってきた。ドキドキしながら僕はメールを開いてみた。だがそのメールを見た時、ＴＯＷＮをはじめてから一番びっくりする事が起きた。
その内容は・・・・

キキ：私はくろあのことが大好きです。

それはたった１５文字の内容だった。いやそのたった１５文字の内容が大きかったのだった。
いや、それ以前にどうしてキキが僕のことなんかをと思った。焦って考えているうちにもう一通キキからメールが来た。

キキ：えっと、いきなりだからびっくりしてると思うけど・・・。私くろあのことが本当に大好きなの。。くろあの顔も声も全然知らないけど・・・・だけどくろあの性格とか私にはちゃんとわかるの！優しいし、冷静だし。。他にも色々あるけどそんなところ全部が好きなの！だからくろあの気持ちを教えて・・・？

考えられなかった。。彼女が僕にそんな気持ちを持っていただなんて。それより返事をすることに一番困った。なんて返事をしていいのかに。もちろんキキのことは嫌いじゃなかった。だけどキキを考えたときどうしても二人の女の子のことを考えてしまっていた。奈々に沙良さん。。
やっぱり僕はこの二人のことが好きだったのだ。

だからキキに断らなきゃと思ったがなんて返事をしようかにほんとに困った。
気づけばメールが着てから１５分以上は経っていた。

だがこの日結局僕は返事が思いつかず逃げるようにＴＯＷＮを退室してしまった。

結局昨日はあれから僕はＴＯＷＮに入室することはなかった。
僕はパソコンの電源をつけいつも通りＴＯＷＮに行こうとしていたがどうにも昨日のことで行きづらかった。なので僕はアイコンチャットの方へ行くことにした。

アイコンチャットに行くと珍しく奈々がひとりでいた。
それを見ると僕は早速アイコンチャットに入室した。

管理人：くろあさんが入室しました。
くろあ：こん～
奈々：こんｗ
くろあ：今日は奈々以外は誰も居ないんだね。。
奈々：そうみたい。。それはそうとこうやってくろあとふたりきりなのも春以来だねｗ
くろあ：ふたりきりってｗｗでも確かにそうだねｗ結構ここも人増えてきたしね～
奈々：うんｗということで今日はおもいっきり話そうｗ
くろあ：あぁそうだねｗ

この日はほんと久々に奈々と話すことになった。だが、奈々と話していても僕はやっぱり昨日のことが頭から離れなかった。

奈々：ねぇくろあ、ひとつ聞いていい？
くろあ：うん、別に大丈夫だよ。
奈々：くろあ今なんか隠し事というより悩み事あるでしょ？
くろあ：えっ、なんで？
奈々：私にはわかるよwくろあと付き合い長いしそれに友達だしw

まさか奈々がそこまで僕のことを見抜けるなんて僕はびっくりしたし、嬉しい気持ちでもあった。

くろあ：ははw奈々は凄いな。確かに悩み事はあるかな。。
奈々：やっぱりwさぁさぁお姉さんに話してみなさいw
くろあ：お姉さんって同い年だろ、僕達w
奈々：そこのところはどうでもいいよwそれより言ってごらんw
くろあ：あぁたまには相談してみるか・・・・。。実はさ昨日ある人からチャットで好きって告白されっちゃってさ。。
奈々：ふむふむ。
くろあ：でもさ、僕好きな人がいるんだよ。でも僕その告白してくれた彼女のことは嫌いじゃないし友達でいうと結構好きなほうにはいるんだよね。。だからその子を傷つけたくないんだ。でもそれをどうしたらいいのかが悩んでいるんだよね・・・
奈々：なるほどね～。まさかくろあが告白されるなんてねぇwでもさ、くろあはその子のこと友達としては好きなんだよね？
くろあ：あぁうん。だけど友達としてだよ。
奈々：だったら私は断ったほうがいいと思うな。友達としてなんだからさ。それにくろあには好きな子がいるんでしょ？だったらやっぱり断ったほうがいいよ。。
くろあ：それはわかってるんだけどさ。でも彼女のこと傷つけたくないし・・・

奈々：はぁ～。。でもさそれじゃあなんの解決にもならないよw
くろあ：そうだけどさ。。
奈々：でもやっぱり私がこう言っても意味ないよねwけど、くろあはくろあらしく返事をしたほうがいいよw余計なことは考えず自分が言いたいことを言えばさw
くろあ：自分らしくか・・・・。。そうか、そうだよな。余計なことは考えず僕自身の答えをそのまま言えばいいのか！
奈々：そうだよwだからくろあがんばれ！！
くろあ：うんw奈々ありがとなw
奈々：いえいえwくろあと私の仲じゃないw助けるのは当たり前だよw
くろあ：そうだなwそれじゃあ僕行ってくるよw
奈々：うん、いってらっしゃいw

管理人：くろあさんが退室しました

奈々に相談してよかったと僕は思った。そして僕はＴＯＷＮへとむかった
ＴＯＷＮに行くとキキはまだ来ていなかった。
だがとりあえず僕は入室してメールだけをキキに送ることにした。
正直この時何を書いて送るかなんてことは考えていなかったけど奈々に言われたととおり自分らしく書いて送ることにした。

くろあ：昨日はごめんね返事出せなくて。キキが僕のことをそんな風に思ってくれていたなんてびっくりしちゃってさ。。それにこんなことなんてリアルでもネットの世界でも1回も体験したことなくて。。本当にごめんね。それはそうと返事なんだけど僕なりに考えた結果を書くね。
僕はキキのことがもちろん好きだよ。でもさ、その好きってのは異性としてじゃなくて友達としてキキのことが好きなんだ。本当に友

達として僕はキキのことが好きだよ。だから今は悪いけどキキとは付き合えない。それに僕は恋愛ってことがまだよくわかってないんだよ・・・。。
だから、もう少し待ってくれないかな？僕が恋愛ってことをよく知るため。そしてもっと僕は君のことが知りたいし・・・。それに僕はキキとこれから先も仲良くしていきたい。
ごめんね、なんか優柔不断みたいな結果になっちゃって。だけどこれが僕の答えだから。

そして僕は長々となったメールを確認し送信ボタンを押した。後はキキからの返事を待つだけとなった。

結局夕方にはキキは現れなかった。
そして僕はまた夜ＴＯＷＮに行くことにした。ＴＯＷＮに来てみると参加者の名前のところにキキの名前を見つけた。早速僕はＴＯＷＮに入室してメールが来てないか確認したがメールはきていなかった。僕はそれでもメールが来るのを待ってみることにした。
そうして１０分ぐらい待っているとメールがきた。
僕は受信したメールを開いてみることにした。

キキ：こっちこそごめんね急にこんな変なメールを送っちゃって。くろあは優柔不断なんかじゃないよ。くろあはこうしてちゃんとした答えを私に送ってくれたから。。だから、くろあの答え私に届いたよ。だから私くろあを待ってみるねｗ今はダメでも絶対に待つね。そしてくろあに私のこと知ってもらうね。だからこれからも今までどおり一緒に話そうねｗ

キキはちゃんと僕にメールを送ってくれた。僕はそれだけで嬉しかった。本当のところ僕はキキがもうメールをしてくれないんじゃないかと思っていたからだ。だから僕はメールが来たことに本当に嬉しかった。

くろあ：うん、ありがとうねキキｗ当たり前だよこれからも一緒に話そうｗそしてこれからもよろしくねｗ

だから僕もキキがメールを送ってくれたように僕もまたメールを送った。そして僕はこれでようやく終わりだと思った。
だがこれは確かに終わりであった。本当に。。だがこの日以来僕はキキをアイコンチャットそしてＴＯＷＮでも見かけなくなった。

僕はこれで一安心をしていたがやはり僕は彼女のことを傷つけてしまっていたんだ。だけどこれでよかったんだよな。。あれが僕の答えだったんだから。
そうだこれでよかったんだ。。

そう、これでよかったんだ。

８月も気づけば中盤に差し掛かっていた。

あれから約１０日ぐらい経つがやはりキキの姿を僕は１回も今日まで見ていなかった。

管理人：くろあさんが入室しました
くろあ：こんｗって誰もいないか。

今日は２窓をしてアイコンチャットをしていた。
だが珍しく誰もいなかった。数分待っていると１人入室してきた。

管理人：奈々さんが入室しました
奈々：一括～
くろあ：こんｗ
奈々：最近ふたりってこと多いねｗ
くろあ：確かにそうだねｗ
奈々：あ、くろあこの前話してたアレどうなった？

アレとはやっぱりこの前のキキとのことだ。

くろあ：とりあえずは終わったよ。。振ったっていうか待ってほしいって言ったよ。でもさあの終わった時はこれでよかったんだと思ってたけど今更になってこれでよかったんだろうかって思い始めたんだよね。。
奈々：終わったんだねｗくろあの答えはいいと思うよｗだってそれはくろあが考えたちゃんとした答えだから。だからもうこのことについてはくよくよ考えたって仕方ないよ。シャキッとしよう！

やっぱり奈々は頼りになるっていうか信頼できるな。だからこそ奈々のことを僕は好きになったんだよな。

くろあ：そうだよね。これでよかったんだ。これが僕の本当の答えだったからwありがとうね、奈々wやっぱり君は頼りになるよwそれと今回の件相談にのってくれてありがとうw
奈々：いやいやwこの前にも言ったとおりくろあと私の仲じゃないw当然のことをしただけよw
くろあ：それでも本当にありがとうw君と友達でよかったよw
奈々：えへへw照れるじゃないw

いつまでも引きずってなんかいられない。もしこれからキキと会うときがあるのならばいつも通り話そういつも通りに楽しく。。と僕は心に誓うのだった。

くろあ：あぁ夏休みも残り１０日か～。。
マリ：そうですねぇ。。ほんと早いねぇ。

夏休みも終わりに近づいてきた頃でも僕は相変わらずＴＯＷＮに来ていた。

くろあ：夏休みも残りわずかだなんて考えたくないな。。
タモリ：まぁな。。俺まだ宿題残ってるし・・・
めぐ：私もです。
くろあ：そういえば僕もまだまだ残ってるや・・・
ファイナルアサシン：やめよう。。夏休みが終わるっていう話題。
なんか頭痛くなってきたしw
くろあ：そうだな・・・。

皆もやっぱり夏休みが終わるのは嫌らしい。まぁさすがにそうだよ

な。。こんな気楽な毎日が終わってしまうんだから。それにしても残り１０日間どうやって過ごすかだよな。もちろんＴＯＷＮとアイコンチャットでだけど。

くろあ：ちょっと2窓するから反応遅くなりまーす。
めぐ：了解ですw
タモリ：アイコンチャットかw了解w
きら★：俺もアイコンチャット行こうかなw

とりあえず僕は2窓をしてアイコンチャットに行くことにした。アイコンチャットに行ってみるといつものメンバーに加えて新しい人たちがいた。
それより、アイコンチャットでの会話を見る限りやっぱり皆が話していることは夏休みがもうすぐ終わるとかの話だった。

管理人：くろあさんが入室しました
管理人：きら★さんが入室しました
奈々：一括w
もこ：ふたりともこんw
ムロウ：おいっすw
柳：初めましてwこんばんわですw
芽衣：こんばんわ～w
くろあ：こんwていうかきらも来たのかよw
きら★：俺はもこたんに会いに来たんだよw
疾風：お前ら一緒に来るとかタイミングいいなw
くろあ：いや、きらが勝手にタウンからついて来ただけだよ
きら★：待て待て俺は別にお前を追ってきたんじゃなくて俺はもこたんに会いに来たんだぞ！
くろあ：らしいよ、もこ。
もこ：いや、私にふられてもw

ムロウ：くろあが言ってたタウンって交流の街ＴＯＷＮのことか？
くろあ：うん、そうだけど。ムロウ知ってるの？
ムロウ：あぁ一応俺も昔やってたからなｗもう全然行ってないけどｗ
奈々：私もやってたよｗていうか、くろあがいる時に普通に居たけどね。ここと違う名前でｗ
くろあ：ふたりとも居たのかよｗ

たぶんムロウが言ったのは僕が来る前のことだろうな。それにしても奈々までいたとはなぁ。

奈々：うんｗでもあそこ私には合わなくて１日したら全然やらなくなっちゃったｗ
くろあ：まじでｗ少しでも声かけてくれたらよかったのにｗ
奈々：だって楽しそうに話してたからｗさすがに新人の私が入るのもアレかな～って思ってｗ

奈々が来ていたことを知っていたら会話ぐらいやめてたのに。もったいないことしたかなと僕は思った

きら★：よし！もこも交流のＴＯＷＮに行くぞ！そして俺と恋人になるんだｗ
もこ：えー！何言ってるの～。私は別に・・・
きら★：ほら、ＵＲＬだ！ここから行って登録するんだｗそれじゃあ俺はタウンに行って待ってるからなｗ
管理人：きら★さんが退室しました。
疾風：もこも大変だね。
もこ：本当だよ～。でも、行かないとまた泣いてなんか言われそうだから行ってくるね～。それじゃあお相手感謝ｗまたね～
管理人：もこさんが退室しました。

くろあ：一括
奈々：いかつ～
ムロウ：またな～

きら★ともこが退室したあとも俺達はいつも通りに話して時間が来たので俺は退室していった。

そして8月31日夏休み最終日。僕はアイコンチャットとタウンで夏休みにあったことを仲間達と振り返っていた

くろあ：ついに明日から学校かぁ・・・
ムロウ：俺なんか受験生だぜ。マジだりぃ。。
疾風：はぁ・・・
奈々：まぁまぁ3人ともがんばろうよw
きら☆：そうだぜwポジティブに行こうぜ！

アイコンチャットのほうではいつものメンバーで僕達は明日から学校ということもあり鬱な気分でいた。

くろあ：お前のそのポジティブ気分は見習えそうにないよ。。
きら☆：あっはっはｗｗ
奈々：でもチャットでこんなに過ごした夏休みは初めてだったよｗ
ムロウ：そうだな、俺も初めてだぜｗ
くろあ：僕もそうだよｗでも、この夏休み色々とあったね～。リアルでもアイコンチャットでもさ。
疾風：だなｗ田村とかｗ

田村か・・・。そんな奴いたなぁ。僕的には初めての障害だったような気がする。

ムロウ：あぁあいつかｗ
きら☆：あんまり思い出したくないやつだな・・・
奈々：なかなか面白い人だったねｗ
くろあ：おぃおぃ、面白いってｗｗ
ムロウ：でも、田村みたいなしつこい荒らしは初めてだったな。。
大抵の荒らしは無視っておいたりしておくと飽きてすぐに消えるんだがあいつはマジしつこかったな。。
疾風：しかも半端なく会話の邪魔だったしな！
奈々：ｗｗ確かに過去ログが凄いことになってたよねｗ

どうやら僕だけじゃなく皆も田村のことをしっかりと覚えているようだった。まぁあれだけやったんだからなぁ。

疾風：でも相手してたらアク禁になるから困るんだよなぁ。。
ムロウ：そうだよな。アク禁があるからな。
奈々：なんか対策練らないとねｗ
きら☆：俺は頭が回らないから皆に任せるｗ

この後僕たちは対策を練ろうとしたがやっぱり無視という手段しかでてこなかった。

くろあ：まぁ荒らしのことは置いておいて明日からまたがんばろうよw
奈々：だねw学校明日早く終わるしまた皆でチャットしようw
ムロウ：おぅ俺の楽しみは今チャットだけだからなw
きら☆：よっしゃw俺はもこたんに伝えとくぜ！
疾風：あぁ楽しみにしておくぜぃw

この後いくらか話した後僕はアイコンチャットを退室した。結局アイコンチャットの一番の夏休みのできごとと言えば田村のことだったが僕は改めていい体験をしたなとしみじみ思うのだった。

そして一方タウンの方でも同じようにタウン内の夏休みのできごとを振り返っていた。

タモリ：いや～この夏休みはほとんど毎日タウンに来てたよな～
くろあ：そうだね。タウン三昧だったなw
きら★：全くだぜw
くろあ：ていうかこっちにもきら★居るのかよw
きら★：それはこっちの台詞だw
めぐ：ふふ、ふたりとも仲良いんですねw
くろあ：それはないよ、めぐさん。
きら★：あぁないな！

ファイナルアサシン：まぁそんなことよりタウンもこの夏休みの間に色々と変わったよな。
くろあ：そうだね。人口も増えたし、アイテムも増えたし。それに行ける街も２つ増えたしなw
タモリ：だなw行ける街２つ増えたのは大きいよな。
めぐ：それにタウンの管理人さんに会えましたよねw
くろあ：そうだね。僕達より先にタウンに居ためぐさんですら管理人のあるふぁさんに会ったことないんだから相当管理人さんはレアだよねw
きら★：まぁ今度はいつあるふぁさんに会えるかだな。

皆と話していると結構夏休みの間でタウンが成長していることに改めて気づいた。だけどやっぱりタウンでの一番の出来事って言ったら僕の中ではキキからの告白のことだよな。
あんまり思い出したくないことなんだけどやっぱりあの時のことは衝撃的な感じだったのでどうしても思い出してしまう。
あれ以来キキは来てないし・・・

タモリ：おーい、くろあ居るか～？
くろあ：あ、ごめんちょっとボーっとしてたw
きら★：おぃおぃ大丈夫かよw明日から学校始まるんだぜ。
めぐ：そうなんですよね～。明日から学校があるんですよね～。
タモリ：まぁ俺は死なない程度になんとかやってくw
きら★：俺は学校でもぐうたら過ごすぜw
くろあ：お前らしいなw
めぐ：皆さん明日からがんばっていきましょう！
ファイナルアサシン：よっしゃーがんばるか！
くろあ：そうだねw授業が終わればここで皆に会えるさw

こうしてアイコンチャット、交流の街ＴＯＷＮでの僕達の夏休みはゆっくりと終わっていくのだった。

苦難

2学期が始まりしばらくした時僕はなぜかこの時珍しくいつもは行かないチャットの場所に行って様々な人たちと話していた。そしてそこで一人の人物に会って仲良くなったのだがそれがある意味苦難という道への始まりだった。

その子の名前は「いちご」といいすぐに仲良くなれて人懐っこいような性格をしていた。仲良くなれたということもありいちごにタウンを教えてみると見事にいちごもタウンにはまっていった。

いちご：皆さん初めまして、いちごって言います。よろしくお願いしますw
きら★：よろしくwでも俺はもこたん一筋なんでw
くろあ：お前はなに言ってんだよw
もこ：wwまぁいちごさんよろしくねw
いちご：はい、よろしくお願いしますw

そしていちごにタウンでの基本的なことを教えてあげたりしていちごはだんだんとタウンに慣れてきていた。その慣れて来た事もありいちごはタウンにリアルの友達をたくさんと連れてきていた。
そのいちごの友達とも僕やタモリは仲良くなっていった。

１０月に入ると僕の中で大きな出来事がまた一つ起きた。
タウンに来てみると一通メールが来ていたの僕は読んでみることにした。
その送り主はいちごだった。

いちご：ねぇねぇ、私くろあの声聞いてみたいんだけどよかったら電話してみない？

正直このメールは迷った。別に自分自身の声がどうとかっていうことが問題じゃないんだけどこの時僕はチャットの友達とかとは電話など一度もしたことがなくてそのことで僕はそのことで迷っていた。だけどなぜか僕は返信する時の内容には「やってみよう」と書いてメールを送ってしまった。

するといちごからは「じゃあ明後日の１２時くらいにw」といって電話番号と一緒にメールが返ってきた。

この後僕は相当後悔していた。なんでやってみようとか言ったんだろうと。

いちごと約束をした電話をする日。この時僕は到底一人じゃできないと思いサナトスを呼んでいた。最初はタモリにお願いしたが用事があるようなのでサナトスに頼んだ。

そして電話をかける時間になったので電話をかけることにした。
電話をかけていると女の声の人がでてきた。そうこの声の人がいちごだった。
妙に相手の方も緊張しているのかところどころ会話の中で噛んだりしていた。

電話の相手はいちごだけではなくいちごのリア友でタウンにいる咲月、雷香、はちみつ、スズたちであった。
緊張しすぎていることもあり大半の電話はサナトスに任せていた。

そして電話をかけて話すこと２０分弱やっと電話が終わった。
この電話事件のことは今現在でも僕は忘れていない。

夜タウンにいってみるとメールが来ていた。
いちご：今日は電話楽しかったよｗ今度はちゃんとくろあもたくさん話してよねｗ

という内容で来ていた。

僕は独り言で「今度もあるのかよ」と呟いたのだった。

ある日2窓で僕はアイコンチャットに来ていた。
来ていたとは言ってもただ入室せずに閲覧しているだけだ。

奈々：あの時は楽しかったね～
ムロウ：いや、大変だっただけだと思うぞw
疾風：奈々は本当にお気楽だなw荒らしが来ていて楽しいってなかなかないぞ
奈々：そうかなw
アルベル：でも、そこが奈々のかわいらしいところだと思うぞw
のの：そうだよwお気楽ってとこが奈々のいいとこw
奈々：えへへへ～

どうやらみんなは僕が居ない間に来ていた荒らしのことについて話しているようだ。
そして奈々のいいところについて。

いつもの僕なら普通入室して話すのだが今日は入れないでいた。
それは、新しい人が居るので入れないということでもなく、会話に入れないからでもなく、ただ単に僕は奈々の人気の有り様を改めて実感したからだ。
そしてもうひとつ奈々のことを好きという感情があるために他の人にも嫉妬してしまっていたからだ。

結局僕はこの時アイコンチャットには入室せずタウンへと行った。

くろあ：はぁ～・・・
タモリ：お、くろあ来てたのかw
咲月：でも、くろあなんか元気なさそうだね？
はちみつ：なになに？なにかあったの？
くろあ：いや、ただ疲れてるだけ。。
タモリ：あぁなんだ。今日は部活も忙しかったからな～
めぐ：ふたりともお疲れ様ですw

さすがにこの悩みはみんなの前で言えないでいた。

そんな悩みを抱えながらタウンでボーっとして過ごしているとひとつのことを思い出した。
そう、それは最近沙良さんがタウンに来ていないことだった。
沙良さんは夏休み前半に顔を1回だけ見せてそれ以来来ていないはずだ。
僕はとりあえず沙良さんにメールを出してみることにした。

くろあ：久しぶりにメール送りますw沙良さん元気ですか？最近ここに来ていないみたいだけど忙しいのかな？もしこのメールを読んでくれたら返信くれるとうれしいですwまた前みたいに一緒にタウンで話せれたらうれしいですw

僕はこのメールを沙良さんが呼んでくれることを祈って送信した。

だが、このメールは彼女には届くことがなかった。
そして沙良さんは１１月前半に交流の街ＴＯＷＮを去っていった。

このことは僕にとってショックが大きかった。
交流の街ＴＯＷＮでの一番悲しかった出来事・・・。

タモリ：なぁくろあ、沙良さん街去ってしまったな。
くろあ：あぁ、そうだな・・・。
いちご：ねぇ、前から思ってたんだけど沙良さんってどんな人だったの？
ファイナルアサシン：確かくろあと仲良かったよな。
くろあ：うん。沙良さんはほんとにいい人だったよ。

大切な人が居なくなったということから僕は元気が出ないで居た。
もう沙良さんと一生会うことができないと思うだけで胸が痛くなった。

くろあ：ごめん、そろそろ落ちるよ
タモリ：今日は早いんだな。
ファイナルアサシン：まぁ元気出せよくろあ。
くろあ：わかってる。じゃあまたね。

今日のところは落ちることにした。
今日このままやっていても会話にも入れないしタウンでもやりたい

ことができないと思う。

こうしてしばらく僕はタウンに対してもやる気が出ないでいた。

最近は奈々への感情、そして沙良さんがいなくなるという出来事で僕はこの時が一番精神的にぼろぼろだったと思う。

タウンへ行くと沙良さんが居なくなって僕が元気がなくなっていることに気づいてかタモリ、ファイナルアサシン、ろすけさん、めぐさんなどからメールが何通か来ていた。
このメールを見てさすがにこれ以上皆に迷惑をかけらないと思って僕は少しずつでもやる気を取り戻そうとした。

確かに僕にとって沙良さんはＴＯＷＮ内では一番大切な人でありこれからもずっと一緒にＴＯＷＮをやっていきたい人だと思っていた。
でも、彼女は居なくなったんだ。
だからこそその現実を受け入れようと思った。
タウンにはまだ僕を思っている友人達がいるその事を忘れちゃいけ

ないんだ。
それにもしかしたら彼女はまた戻ってくるかもしれない。
だから、待っていよう。いつまでも・・・・。

そして沙良さんが居なくなってしばらく経った。
雪が降り始めてきた１２月。

くろあ：もう一年かぁ。。
奈々：いきなりどうしたのくろあ？ｗ

今日はアイコンチャットを集中してやっていた。

くろあ：いやさ、アイコンチャットに来てもう一年経ったんだなって思ってさ。

そう、去年の今日僕が初めてチャットに来た日だった。そしてもう１年が経ったんだ。

奈々：私は来月あたりで１年かなｗでも早いね、そんなに経つんだ。
ムロウ：そうだな。こうして俺達は歳を重ねていくのだ
疾風：ムロウおじさんくさいぞｗでも確かに早いな。。

マジック：俺は最近来たばかりだからな～
くろあ：なんかこのチャット来て色々あったな～って考えてしまうなw
奈々：あ、わかるよ～。わたしも考えるとき結構あるもんw
たった1年だけど本当に色々あったと思う。
1年前の今日はチャットのこと全然知らなかったんだもんな。
でも、チャットのことをむらぁに教えてもらって、そこから楽しくなってきたんだよな～。
今思ったらむらぁに感謝しないとな。今では全然会わないけど・・・

奈々：う～ん、私このチャットに来てよかったな～
ムロウ：なんだよ、急にw
奈々：だって、ここに来てなかったら皆に会うこともなかったし～。だから来てよかったのw
疾風：確かになw俺もここに来てよかったぜ。奈々みたいな楽しいやつがいるとは思ってもなかったけどww
マジック：俺も俺もw
ムロウ：まぁ俺も奈々みたいな最高なやつに会えて最高だぜ！！

このチャットのログを見ていてまた僕は胸がもやもやしてきた。

奈々：くろあはどうなの？
くろあ：あぁ、僕も皆に出会えてよかったよ

皆みたいに奈々に出会えて嬉しかったみたいなことは正直に言えなかった。
そして自分が正直に彼女に思いを言えないことに次第に腹が立ってきた

結局その後もこんな気持ちのままチャットをしていたのだが全然皆と話しているときに会話にも入れずなにを話していたかすら思い出せないでいた。

それから少し経ったある日僕はパソコンもつけずに部屋であることを考えていた。
奈々との距離感のことだ。

奈々に対して僕は友情以上の感情を持っている。だけど奈々は僕に対してはそういう感情を持っていないと思う。
そのこともあり僕のなかではなにかもやもやした感情も生まれてきた。
他人への嫉妬、そして自分に自信を持てないこと。

ここ最近は明らかにチャットをしていて奈々が複数の相手と仲良く喋っていてそれを見ているとなんだかムカムカしてくる。
そして僕も奈々に喋りかけようとしているがこのムカムカしている状態で本当にうまく喋れるかどうかが心配で結局は喋れないという結果だ。

このことがあり奈々との距離が離れていってるのかもしれない。

いや、もともと奈々と僕とでは人としての差がありすぎのかもしれない。

チャットでは誰とでもすぐ仲良くなれてなにがあってもいつも笑っていて、そしてチャットでは皆のアイドルの奈々。それに対して僕はチャットでは一応名前は知られているがそこまで目立つわけでもなく新しい人が来ても仲良くなるまでには時間がかかってしまう。こんなに違いがあるとさすがに彼女と釣り合うわけがないと思ってしまう。

それよりこんな事を考えてしまっている時点でダメなのかもしれない。

今こんな僕を見たらあいつはどんなことを思うだろうか・・・・。

どんなことを言ってくれるだろうか・・・・。

むらぁにもう一度会いたい。

離れゆく心

クリスマスが終わった次の日やっと中学生生活2回目の冬休みがきた。
去年の冬休みはチャットだけで冬休みを過ごしていたが、今年は交流の街タウンもあるので楽しく過ごせそうと思えるのだが今の心にひっかかっている物がついたままでは有意義に過ごせそうもない。
なんとかしてこのひっかかっている物をとりたいのだがどうすればいいのかが思いつかない。
なので僕はこの冬休みはアイコンチャットのほうを少し控えようと考えた。
チャットを行くのを少し控えたらちょっとはこのひっかかっているものも少しずつだがマシになるだろうと思った。だがこの行為ははたから見たらただ逃げているようにしか見えないかもしれない。
でも誰かにそう思われたとしても僕は今はチャットに行かないだろう。

そういうこともあり僕は冬休みはタウンの方へとばかりに行っていた。
タウンにはいつも通りのメンバーが居ていつも通りに会話をしていた。
そんな光景を見ているとなぜだかチャットを楽しくやっていた時を思い出した。

タモリ：おぅ、くろあ来てたのか
くろあ：うん。ごめん挨拶するのすっかり忘れてたw
いちご：あはは、くろあらしいねw
僕らしいか・・・。僕らしさって一体なんなんだろう。
くろあ：いつの間にかタウンも人口増えたよね～
めぐ：そうですねw私が初めて来た時は全然いなかったのに。
タモリ：俺が来た時もあんまりいなかったよな。
咲月：えぇ、そうなの！？私これぐらいの人数だと思ってたw
そう最初タウンに来た時は３１人ぐらいしかいなかった。そしてその内約２０人はただ登録して来ない人達だった。なので実質最初は１０人もいなかった。だけどこの時はすでに人口は６０人は越していた。
めぐ：くろあさん来たぐらいから人数も増え始めましたよねw
マリ：そうだね～。確かそのぐらいの時期からだねw
タモリ：俺もくろあにこのサイト教えてもらったしなw
マリ：なんだろう、くろあさんに人でも呼ぶ力でもあるのかな？w
くろあ：そんなのあるわけないじゃないですかw
きら★：でもお前ってなんか不思議なやつだよな～。
くろあ：不思議って、なにがだよ・・・。
きら★：いやさ、あっちのチャットの方でもそうだけどなんかお前って独特なんだよw
くろあ：だから、なにが言いたいんだよ。。
きら★：俺もよくわからなくなってきたwとりあえずお前は不思議ちゃんなんだ！
タモリ：きら混乱するなよw

めぐ：でもくろあさんがって本当に珍しいと思います。
くろあ：めぐさんまで・・・。
めぐ：あ、すいません悪い意味じゃないんですよ。ただくろあさんって私がたくさんの人とチャットしてきた中でなかなか居ないタイプで珍しいってことですよw ん～なんて言うのかな？私くろあさんと居ると落ち着くんですよw

くろあ：別に僕はそこらへんに居る人と変わりませんよ。。
めぐ：そんなことありませんよ。それにくろあさんと付き合っている私が言うんだから間違いありません！w

付き合っていると言ってもこのタウン内の機能のことなんだけど・・・。

きら★：おっ、なんかいい雰囲気だなw
タモリ：おぃ今いいところなんだからお前は出てくるなよw
くろあ：いや、別にそういうわけじゃ・・・。
いちご：くろあとめぐさん仲いいんだね～。
めぐ：恋人ランク1位ですからねw
はちみつ：私達もがんばらなきゃね、タモリ！
タモリ：あぁ、そうだなw

そうこの時僕とめぐさんは恋人ランクでいつの間にか1位をとっていたのだった。
それにしても僕が不思議か。それに落ち着く・・・。まさかそんなはずもないのに・・・。

そんなことを考えているといつの間にかメールが届いていた。

メールの画面を開いてみるとメールを送ってきた主はめぐさんだっ

た。
僕はそのメール内容を読んでみる事にした。
「あの、くろあさん。私くろあさんと結婚してみたいです。あ、もちろんタウンの機能ですよ！今さっきくろあさんに言ったとおりくろあさんといると落ち着くし。それにくろあさんを信頼してますから。だからよかったらお願いします。」

結婚申し込みのメールだった。そういえばラブ度がある程度たまるとタウンでは結婚できるのだった。

僕はそのメールを見て悩みもしないでメールを送り返すことにした。
「もちろんいいですよw僕もめぐさんとならやっていけるような気がします。なのでこれからは配偶者としてよろしくお願いします」

もちろん結婚ＯＫという返事を送った。
僕はそれだけ彼女のことを信頼している。だから承諾した。
そしてこの日ついに僕はタウンで始めての配偶者を得ることとなった。

こんな感じであと何通かめぐさんとメールをしているとその途中１通きら★からメールがきた
僕はそのメールを開いてみることにした
「お前、最近アイコンチャット行ってるか？」

メールの内容はアイコンチャットについてのことだった。
今はあまりアイコンチャットのことは考えたくないがそれでもメールを返信した

「最近は微妙に行くの減ってる」

とりあえずそれだけを記入した。

しばらくしているときらからメールが届いた。

「やっぱりな。俺もここ最近忙しかったから行ってなかったけど前久しぶりに行ったらお前の話題が出ててよ、奈々が最近見ないとか言ってて心配してたぞ」

奈々が僕のことを・・・・？

きらのメールはそれだけじゃなくまだ続きがあった。

「それにお前最近なんか変だぞ」

まさかこいつに変と言われるとは思わなかった。

「その内チャットには顔出すよ・・・。というよりお前に変って言われたくないんだけどw僕はいつも通りだよ」

数分待っているとまたきらからメールが届いた。

「ふっ、お前は俺が変態とでも言いたいのかwまぁそんなことよりお前をタウンで様子を見る限りやはりおかしいと思うぞ。今さっき挨拶版で言ったようにお前は不思議って感じがするがここ最近ではなんかそういうのが無くなってきている気がするぞ。なにかあったのか？」

「別になにもないよ。それに僕は全然今まで通りだから」

きらのメールをみて僕はそれに返信した。

返信したあとすぐに再びメールが返ってきた。

今思えばこんなに真面目にきらとメールするのは初めてかもしれない。

「そうか、それならいいんだがなwまぁ悩みとかあったらこのきら★様にいつでもメールしなさい！」

さすがにこのメールに返信をしようとは思わなかった。
それにしてもきらが僕の様子に気づいているとは思わなかった。

この状況をなんとかしたいのはわかってる。
けどこの胸にひっかかっているものをどう取ればいいかがわからなかった。

新しい1年を迎えてから少し経ったある日僕は久しぶりにアイコンチャットへと行ってみることにしてみた。
たった1週間と少しほどしか来てなかっただけなのに凄い懐かしい気がした。
だけどまだ昼間ということもあり誰も居なかった。
とりあえず僕は誰も居ないなか入室をした。

過去ログを見る限り奈々やムロウ達はどうやら昨日は楽しく会話していたようだった。
それを見るとまた胸がもやもやしてくる感じがした。
そんなことを思っているとタイミングがいいか悪いかわからないが
「彼女」が入室してきた

管理人：奈々さんが入室しました
奈々：くろあ見つけたーー！！w

チャットの中だけど僕は久しぶりに奈々の声を聞いたような気がした。

くろあ：久しぶり、奈々。
奈々：ほんと久しぶりだよ！今までなにしてたの、くろあ！？
くろあ：特になにもしてないよ。ただ来てなかっただけだよw
奈々：へぇ、そうなんだ～。。

なんだろういつもなら奈々とふたりきりで喋る時はテンションが上がるというかわくわくしながらやってるのに今はそういう気分になれなくてふたりきりということに焦っている。

奈々：くろあが居ない間にね新しい人たちがチャットにいっぱい来たんだよ～
くろあ：そうか。たった1週間ちょい居ないぐらいでそんなに来たのかぁ
奈々：うん、だからくろあもその子達と仲良くなれたらいいねw
くろあ：あぁそうだね
奈々：だから、くろあもチャットに来てよ。また皆でいっぱい話そうよ
くろあ：僕もそうしたいよw

僕も奈々や皆たちと話したい今までどおりたくさん彼女達と語りあいたい。
けど今の僕はそれが本当にできるのだろうか・・・？

奈々：ねぇ、くろあ。
くろあ：ん、何？
奈々：最近わたしのこと避けてない？

突然のことだった。奈々がまさかこんなことを言うなんて思ってもみなかった。

くろあ：なんだよ、急にw別に僕は奈々のこと避けてないよ。
僕がキーボードをうっているとき微かに手が震えていた。それほど僕は動揺しているのだった。

奈々：嘘だよ。だってくろあの様子見ればすぐにわかるよ。ねぇどうしてなの？
くろあ：ちょっと待ってよ、だから僕は別に避けてないって。それになんだよ僕の様子って・・・
奈々：明らかにおかしいんだもん。いつものくろあなら私と喋ってる時楽しそうにしてくれてるのに今のくろあと喋っててもそんなの全然伝わってこないんだもん！それにくろあはただ来てなかったって言ってたけどそれは違うでしょ？

なんで奈々には僕の全てがわかっているんだろうか。
パソコン画面に映っている奈々の発言を見ているとキーボードがうてなくて何も言えない状態になっていた。

奈々：ねぇ、一体どうしたのくろあ？私なにかした？教えてよ！私が悪いことしたなら謝るからさ！！

ただチャットで更新している画面を僕はただ呆然と見ているだけだった。

奈々：お願いだから、もう一度私と・・・皆と一緒にチャットしようよ！

もうここまで来ると何も言えなかった。というよりここから出たかったが出るに出れない状況だったんだ

管理人：疾風さんが入室しました
この険悪なムードの中で疾風が入室してきた。

疾風：おい、お前らどうしたんだ！？

僕は他のチャットメンバーには迷惑をかけられないということで僕は焦りついにマウスを動かしキーボードをうった。
くろあ：ごめん、今の僕じゃなにも言えないから・・・。
奈々：ちょっと待ってよくろあ！！
管理人：くろあさんが退室しました。

最後に奈々に名前を呼ばれたが僕はそれと同時ぐらいに退室を押してチャットルームから出て行った。

いや、この状況から逃げ出したんだ。

壊れた関係

冬休みが終わった。たった2週間弱だったのでもちろん休みが終わっていくのも早かった。
そしてあの事件・・・僕の中で最大のアイコンチャットでの事件。
あれからも早1週間が経とうとしていた。

あれから僕はアイコンチャットはもちろんタウンにすらも行っていない状態だ。
というよりパソコンすらつけていない。

学校でもタモリやサナトスになんでタウンに来ないのか聞かれたが「今は忙しい」としか答えられないでいた。

自分の部屋のベッドに寝転がってふとアイコンチャットのことを考えてしまう。
あの後どうなっただろうかと・・・。
一応僕が退室する時には僕が発言したログを消してきたのだがあの時は疾風様子を見て入室してきたからあの状況を知っているだろう。
それにあの奈々と喋っている時には何人か閲覧者がいたからもしかしたらあれはチャットのメンバーが見ていたのかもしれない。

いや、それよりも僕は奈々を傷つけてしまったんだ。
自分の勝手な思いによって・・・・。

でもいつまでもこうしてばっかりはいられない。
タウンぐらいは復活しておくべきかもしれない。めぐさんとは結婚してるしデート行かなかったらラブ度が下がって離婚になることもあるしそれにタウンの皆は関係ないんだ。

そう思いながら僕は久しぶりにパソコンを立ち上げタウンへと行った。

タウンへ入室するといつものメンバーが居た。
久々に皆に挨拶した後は特に会話することもなく今までできていなかったデートをしたりお金を稼いだりした。
そしてそれをしている間にメールが1件来ていることに気づいた。
メールは珍しくもこからのものだった。
とりあえず僕はそのメールを開いてみることにした

「だいぶ久しぶりだね、くろあwあのさ、単刀直入に聞くけどチャットでなにかあったの？」

どうやらもこもチャットのことであったことが気になっているようだ。

「少しね。でもごめん今は何も言えないよ」
ただそれだけをうってメールを返信した。
今もこはタウンには居ないのでメールはしばらくは返ってこないだろう。
そういうことで僕はメールをやめて挨拶版でみんながなにか会話しているので気分転換にその輪の中に入ってみることにした。

くろあ：皆なにしてるの？
タモリ：いや、新人さんが入ってきたから皆で色々とタウンについて教えてるんだw
羅夢：くろあさん、初めましてw羅夢（らむ）って言いますwよろしくお願いします。
くろあ：あぁうん。らむさんね、よろしくですwひらがなでらむさんって呼ばせてもらいますね。
羅夢：らむって呼んでくれていいですよwそれにタメ口でいいです。それにどうやらくろあさんと私一緒の年齢のようですし。
くろあ：あぁわかったよ、らむ。じゃあ僕もタメでいいからw
羅夢：うん、わかったよ。くろあw
りょっち：さすがくろあさんですね。すぐに初めての人とも仲良くなれるとはw
くろあ：いや、そういうわけじゃ。。

別にそういうわけじゃない。ただなぜか今回だけ特別でらむとは自然と会話ができてうまく話せている。それになぜか彼女とは初めて会うわけじゃないようにも思えた。

この後僕は何通からむとメールをしあっていた。
それは普通の会話でただのとりとめのない話だけどなぜか自然と話していた。
今さっきまであまり喋りたくないと思っていたのが嘘のようにキーボードで文字をうっていた。

そんなことが何日か続いていたある日またしても事件が起きた。
事件と言ったら違うかもしれないが僕にとってそれは凄く驚いたことあり真実だった。

ファイナルアサシン：やっと最近くろあもタウンに毎日来れるようになったな。用事的なものは終わったのか？
くろあ：いや、終わってはないんだけど気分転換に来てるだけだよきら★：フッ、まぁなにかは知らんが頑張れよくろあ。

もしかしたらきらはチャットで起きていたことを知っているのかもしれない。

羅夢：え？最近くろあタウンに来れてなかったの？
くろあ：最近って言ってもらむが来る前までのことだけどねwちょっと色々あってね。。
羅夢：色々って？
くろあ：だから色々だよwちょっとね・・・
咲月：なぁに？他人には言えない怪しいことでもしてたの～？
きら★：なにっ！怪しいことだと！？俺も誘えくろあw
くろあ：別にそういうことじゃないんだけど・・・

そんな感じで皆にちゃかされながらも久しぶりに楽しく会話をしているとメールが届いた。
そのメールを送ってきた主はなんとなく僕は予想できた。
メールを開くと贈り主はやはり羅夢だった。
羅夢とは毎日メールをしてて楽しく会話をしている。だから今日も昨日の話の続きかなと思いながらメールを読んでみるとその内容はいつもと全然違っていた。

「くろあ、私になにか隠し事してない？」

いつもと違う様子のメールだから僕はびっくりした。
そもそもらむと会ったのはつい最近で仲良くなったのだってつい先日だ。
それになんで彼女は僕が今隠しているもののことを感じ取っているのだ・・・

「え、なにも隠し事なんかしてないけど・・・」

とぼけたようなメールで返信をした。
少し焦りながら次のメールを待っているとすぐに返信がきた僕はそのメールを開いた

「それは嘘だよね。今くろあはある人のこと・・・ううん、人間関係で困ってるんじゃないの？」

当たっていた。だけど僕はそんなことよりなんで彼女が僕のことをわかっているのかが不思議に思った
「なんで知ってるんだ。もしかしてらむはアイコンチャットのメンバーの人なの？」

僕が今胸にひっかかっていることがわかる人間それはアイコンチャットのメンバーしかいないはずだ。
僕は意を決して聞いてみた。

2分ほど経った後再びメールが返ってきた。僕は恐る恐るそのメールを開いてみた
「う～ん、今ではそうとは言えないけど・・・。でもひとつだけ言えることがあるよ。それは・・・私がくろあの親友だってことかな」

意味がわからなかった。というより僕の親友・・・？
「君は一体誰なんだ・・・」
少し遅くなりながらもなんとかキーボードをうって返信をした。
今の僕の頭はいっぱいいっぱいだった。

また彼女からのメールが届いた。こんなにメールを開くのを緊張したのはキキの時以来だった
そして僕はメールを開いた。

「え、まだわからないかなぁ？ん～じゃあヒントは名前だよ」

名前・・・。
僕は震えている口を開き少し声に出してらむの名前を呼んでみた。
「羅夢・・・。らむ。らむ・・・・羅夢。」
ただひたすらに羅夢という名前を口に出した。

そしてついに僕はそのらむという名前に隠された意味がわかった。
だけどそれは、ありえないことだ。アイツが今ここに居ることが・・・。

「むらぁ・・・。お前なのか？」
そう、ただらむの名前を逆にしただけ。
でも、本当にアイツなのか・・・？だけど僕にとってもむらぁは親

友。
だったらもしかしたら・・・。
そんなことを考えているとメールが来た。
今さっきは恐る恐るメールを開いていたのだったが今度は少し緊張してでも早く真実が知りたいという気持ちが強かった。僕はメールを開いた・・・

「やっとわかったんだぁw相変わらずだねぇ、くろあ」

本当にむらぁだった。
でも、なんでむらぁがここいに居るんだ・・・。
「本当にむらぁなのか！なんでお前・・・チャット引退したんじゃなかったのか！？」

ここらから僕たちは今までの会ってなかった時間を取り戻すかのようにひたすらメールを送りあった

「ちょっと～、勝手に私を引退させないでよw私引退するなんて言った覚えないんだけど」
「それはそうだけど・・・。だってお前アイコンチャットの方全然来ないし・・・。それよりなんでむらぁがここに居るんだよ！？」
「ん～事情があって来れなかっただけだよwそれに私がここに来た理由はさっき言ったようにくろあが今困ってることを解消してあげるために来てあげたんだよ～」
どうやらむらぁはすでにアイコンチャットであったことを知っているようだった。

「なんでむらぁがその事を知っているんだよ・・・」
「奈々ちゃんとメル友っていうのは知ってよね？それで相談されたんだよ。でも誰とそういうことがあったのかは言わなかったけどなんとなく奈々ちゃんとメールしてる時にくろあだってのがわかったんだよ」

「なんとなくって・・・。けどなんでじゃあ僕がタウンに居ることを知ってるんだよ。僕はまだむらぁにタウンやってるていうこと教えてないはずだよ」
「それは、くろあがチャットに来てないときに一回チャットに久しぶりに行ったんだよ。その時にきらが居たから聞いたんだよ」
きらが教えたのか・・・。ということはきらは羅夢の正体がむらぁだってこと知ってたのか。

「そういうことか・・・。きらは知ってたのか・・・」
「うん。ねぇくろあ一体どうしたの？悩んでるなんてくろあらしくないよ」
「わからないんだ・・・。今僕がどうなっているかが・・・」
わからない。本当に自分がなにをしたいのかということが
「わからないかぁ。じゃあ今自分を見失ってるっていうことだね」
自分を見失っている。確かにそうなのかもしれない・・・。このチャットという場所で。。

「そうかもしれない・・・」
「ねぇ、くろあってそういうキャラだったっけ？」
「え？キャラっていわれても・・・」

「あれ、くろあって天然的なキャラじゃなかったっけ？」
「いや、知らないよ」
「くろあはちょっとおっちょこちょいってで皆となに少しずれている感じでそれに頼りないって感じだったはずだよ～」
「なんだよそれ・・・」

むらぁが何を言いたいのかが僕には一切わからなかった。

「でも、くろあのそんなところが皆を癒してくれてたんだよ。私もあの頃なにか疲れた時にくろあとチャットしてたら癒されたしそれに元気もらってたんだよ」

僕がむらぁを癒していた・・・？そんなわけは・・・。
考えているともう1通連続してむらぁからメールが届いた

「それにね、皆もそんなくろあとチャットをして癒されてたと思うんだ。だから今のくろあは本当のくろあじゃないと思う！」

本当の僕じゃない。だったら僕は・・・

「じゃあ僕はどうしたらいいんだよ！」
「そうだねぇ、じゃあ今の気持ちを奈々に言葉で伝えたらいいんじゃいの？そしたらすっきりするかも」
「すっきり？」
「だって、今のくろあはたぶん胸に自分の思っていることをためこんでいると思うの。だから全て吐き出してみようよ」
「そんなこと言われても、今の僕じゃ無理だよ」
「そんなことないよ。それに自分に自信を持ってよ！くろあならちゃんと奈々に対して思いを伝えられると思うから」

自分に自信を・・・。元々僕はリアルでもチャットでも消極的な性格だ。そしてそれに加え今は自分に自信を持てていない。こんな自分を僕は本当に駄目な奴だとも思ってる。

でも、それでも僕は・・・

「ねぇ、むらぁこんな僕でも本当に奈々に自分の思いを伝えられると思う？」

「大丈夫だよ！」

「根拠は？」

「私が言うから間違いないの！親友を信じなさいくろあw」

「親友か、はは、確かにそうだな。君を信じてみようかな」

「うん！それに私はくろあの味方だからいつでも頼っていいんだよ！」

チャットで僕にとっての1番の親友、そして僕の味方。

どうやら僕は最高の友達を持っているようだな・・・

「ねぇ、むらぁ」

「な～に？」

「ありがとうね。僕のために考えてくれて」

「アハハ、くろあがお礼だなんてwでも私もくろあにお礼を言っておかないといけないかな～」

「え、なんで？」

これまでに僕はむらぁにお礼を言われるようなことをしてきた覚えはなかった。

「あのチャットをしていた時、あの時あの一瞬を楽しませてくれて

ありがとう」
「むらぁ・・・」
「私ね、よくチャットしていた時くろあが居てくれたから楽しかったと思うの。もちろん他の人たち、リッドやりあら、奈々たちとチャットしていた時も楽しかったよ。でもくろあが居てくれたからもっと楽しくなったと思うの。それに癒されたしねwだからくろあああありがとう」

むらぁがここまで思っていてくれたなんて僕は思いもしなかった。

「馬鹿だな。それを言うと僕も同じ思いだよ。それに僕はむらぁが居てくれたからむらぁがチャットの全てを教えてくれたから今日までチャットやタウンをやれていると思うんだ。だからお互い様だよ」

「そっかぁ。お互い様かぁ」
「だからこれからもよろしくね、むらぁ」
「うん、こちらこそ」
「さてと、これから奈々に思いを伝えたいけどどうすればいいと思う？」
「だったら私が奈々にメール送っておくから、ん～22時にアイコンチャットに来てくれるかな？」
「1時間後か。わかったアイコンチャットに行くよ」
「うんwそれじゃあがんばってね、くろあ！」
「あぁ、色々とありがとう」

むらぁとのメールも終わり僕はタウンを退室しアイコンチャットの画面を表示して緊張しながらも1時間待つことにした。

僕はうまく奈々に今思っていることを伝えられることができるのだろうか。

伝えるということ

時間が経つのは早いもので1時間が経った。

管理人：くろあさんが入室しました

僕はなんとか意を決して入室ボタンを押しアイコンチャットへと入室した。

丁度今日は閲覧者は居るもののタイミングがいいのか入室者は0。いや、もしかしたら、チャットメンバーがむらぁかきら★あたりに今からあることを伝えられて居ないのかもしれない。

皆にも迷惑をかけている。

だからこそうまくこの思いを奈々に伝えて今日ここで全てを終わらしたい。

管理人：奈々さんが入室しました。

そしてついに奈々が入室をしてきた。

奈々が入室してきたとともに僕は緊張で少し固まってしまった

それに奈々と最初に何を話したらいいのかがわからなくなってしまった。

奈々：久しぶりだね、くろあw

最初に口を開いたのは奈々だった。

くろあ：うん、１０日ぶりぐらいかな

奈々：それぐらいだね

そして沈黙。

だけどこのままじゃ僕の思いを奈々に伝えられないので僕は遅いながらも文字をうっていった

くろあ：少し話したいから秘密チャットいいかな？

奈々：いいよ～

秘密チャットとは指定した人と他の人には内緒でチャットできる機能であり閲覧者が何人かいるということもあるので僕は秘密チャットを使うことにした。

秘密チャットに切り替えると僕は早速奈々に話しかけることにしたくろあ：まずはごめん。この前勝手に逃げ出したりなんかして・・・・。

奈々：うん、私こそごめんね。いきなり色々と言っちゃって。

くろあ：奈々は悪くないよ！全て僕が悪いんだから・・・

奈々：くろあ・・・。

そう、全て僕が悪いんだ・・・。だから僕は奈々にそのことをわかってもらわないといけない

くろあ：ねぇ、奈々。僕は奈々のこと避けてたわけじゃないんだよ・・・。

奈々：え・・・違うの？

くろあ：奈々のこと嫌いになったわけでもないしアイコンチャットが嫌になったわけでもない。。
奈々：じゃあ、くろあは何で前のくろあじゃなくなっちゃったの？
前の僕・・・・。自分ではわからないけど奈々やむらぁにとったら僕は変わってしまっていたのだろう。

くろあ：たぶん僕は焦っていたんだと思う。
奈々：焦って・・・？
くろあ：奈々やムロウ、疾風その他色々な人が皆で仲良くしている中その輪の中にうまく入れなくなっていたことに・・・。それに皆はチャットをすることで成長しているように思えるのになんだか僕だけが置いていかれてるような気がしたんだ。

アイコンチャットでの事件が起こる前、皆が奈々に話しかけているように何度も奈々に話そうとはしていたけれど僕はうまく話すことができなかった。そのことで僕は自分に自信を持てなくなっていたかもしれない。

くろあ：それは自分の弱さが原因でもあるのはわかってる・・・。
僕は自分を見失っていた・・。それに僕はチャットでも小さな存在で結局はあんまり目立たない奴だってわかってた。
奈々：違うよ！くろあは私にとって・・・ううん私たちにとって大切な人だよ！！

くろあ：わかってるよ。奈々がそれぐらい思っててくれているってことは・・・。
奈々：だったら、なんで・・・・。。
くろあ：だから僕はこんな奴だけどこれが本当の僕だから良いと思

ったんだ。
奈々：え？
くろあ：いや、あいつに・・・むらぁに教えられたんだよ

ここからが僕が奈々に最も伝えたいこと。うまく伝えられるかわからないけれど僕なりに伝えなきゃいけない。

くろあ：僕はこれからも自分らしくマイペースでやっていくよ。焦らずゆっくりに。たとえ皆と距離を置いていかれても僕はそれをマイペースで追っていく。奈々に中々話しかけられなくても僕らしく話しかけようと思う。たとえそれがうまく喋れなくても。だから、僕は僕らしくでいくよ。
奈々：くろあ・・・。

正直ここまでくると僕は自分がなにを言ったのかがわからなかった。

奈々：アハハw
くろあ：え？

なぜだか突然奈々は笑い始めた。

くろあ：ちょっと、なにが可笑しいんだ・・・。僕は自分の思いを・・・
奈々：わかってるよ、くろあ
くろあ：じゃあ、なんで・・・。。
奈々：なんか、私が深く考えすぎてたから可笑しくなっちゃってw
くろあ：深く・・・？
奈々：だって、くろあが私のこと嫌いになっちゃったと思ったし、それにもうくろあがアイコンチャットに来なくなるんじゃないかと思ってたから。

くろあ：僕が奈々を嫌いになるわけないじゃないか！
奈々：うん、わかってる。くろあが簡単に人を嫌いになる人じゃないくらい。
くろあ：それならいいんだけど・・・。
奈々：ねぇくろあ？
くろあ：ん？
奈々：くろあはアイコンチャットから勝手に居なくならないでね？

居なくならないでか・・・。アイコンチャットには居なくなった人はたくさんいる。
リッドにりあら、翠零、キキそれにとりで。むらぁはよくわからないけど・・・。
けれどずっと一緒にこれからも皆と居られるわけではない。
だけども僕は・・・

くろあ：居なくならないよ。僕はこれからも皆と一緒に居たいと思うし、それに奈々ともずっと一緒にチャットをしていきたいと思ってるよ。だから勝手に居なくなるなんてことはないからさ。
奈々：くろあ・・・。うん、信じてるからw

これからも奈々とずっと一緒にチャットをしていきたい。これは僕の本心だ。

奈々：ねぇ、くろあ。今のは告白かなw
くろあ：何言ってるんだよ・・・。友達として言ったまでだよ。
奈々：ちぇっ。。つまんないの～w

さすがにそこまで奈々に言える勇気はまだ僕にはなかった。

くろあ：さてと、話も終わったし。そろそろ秘密チャットも終わろ

うか。。
奈々：うん、そうだねwそれに閲覧してる人たちもどうなってるか気になってるだろうしw
くろあ：そうだなwあ、そうだ奈々。
奈々：何？
くろあ：これからもよろしくね。
奈々：うん！こちらこそw

これでついにアイコンチャットでの事件は幕を閉じた。
それに僕の胸にひっかかっていたものはすっかりなくなっていた。
どうやらむらぁが全て吐き出したらすっきりするってのは本当だったようだな。

そして僕と奈々は秘密チャットをやめて、通常のチャットへと戻っていった。

奈々：おーい、皆終わったから入ってきなよ～。

管理人：疾風さんが入室しました
管理人：ムロウさんが入室しました
管理人：きら☆さんが入室しました
管理人：もこさんが入室しました
管理人：マジックさんが入室しました
管理人：むらぁさんが入室しました

くろあ：うわっ・・・こんなに閲覧してたのか・・・。。

奈々が終わったことを告げると一気に閲覧していたチャットのメンバーたちが入室してきた

疾風：当たり前じゃないか、心配してたんだからなw
きら☆：ふっ、仲間として当然のことだな・・・
もこ：きら、台詞がくさいよ。。
ムロウ：で、仲直りはしたのか？
奈々：仲直りだなんて、別に私とくろあは喧嘩してたわけじゃないよwね、くろあ？w
くろあ：あ、あぁそうだね。

喧嘩をしていたわけじゃないそれは確かにそうだった。

マジック：じゃあ一体何が原因だったんだ？
奈々：ん～特になんでもなかったよwただくろあが反抗期に入ってただけw
ムロウ：それだけかよww
くろあ：いや、そんな感じなのかもしれないw
きら☆：いかにもお前らしいなw
むらぁ：でも、これで一件落着なんだよね？
くろあ：うん。皆には迷惑かけたね。
むらぁ：ほんとだよ～。これで1個貸しだね、くろあw
くろあ：ははは・・・・wでもむらぁには本当に感謝してるよ
奈々：うんwむらぁちゃんありがとうねw
むらぁ：あはは・・・wそんなに言われると照れちゃうよ～。。

皆にも感謝してるけどやはり今回の事件でお礼を一番言わなければいけない相手はむらぁだ。
こいつが居なければこの事件は終わっていなかったかもしれない。

むらぁ：じゃあ私の役目も終わりだねw
くろあ：確かにそうだけど・・・。これからもチャット来れるんだ

よね？
むらぁ：う～ん、どうかな～。。私も今回はちょっと無理したからな～・・・
疾風：どういうことだ？
むらぁ：ん～なにかは言えないけどちょっとチャットをインターネットをすることがちょっと難しいんだよ・・・。
マジック：でも今日とかは普通に来れてるじゃんw
むらぁ：今回は特別だよ。親友が困ってるから来たまでだよw
きら☆：スーパーマンみたいだなw
もこ：きらは黙ってなさい！
奈々：じゃあむらぁちゃんはこれからもここには来れないってこと？
むらぁ：うん。。今日で最後ってことかなw
くろあ：そうなのか・・・。また会えなくなるのか。
むらぁ：なぁにぃwくろあはまた私が居なくなることに寂しさを感じちゃってるの？w
くろあ：だから違うって・・・。でも、確かにそうかもな。君が居たら正直僕は楽しいと思う。だから最後なんて言うなよ。また必ず来てよ。
むらぁ：くろあ・・・。

むらぁには最後なんて言ってほしくなかった。僕はむらぁと会えなくなるなんて考えたくなんかない。

奈々：そうだよ、むらぁちゃん。またチャットに来てよ！
ムロウ：あぁ、いつでもチャットに来いよ。お前が居なくなるのもアレだからな。
マジック：確かにw俺達の中では珍しいキャラだしなw
きら☆：くろあ並に珍しいキャラだなw
もこ：それに、むらぁちゃんのことも忘れるはずないしw
疾風：俺達は仲間だしな～。

むらぁ：皆・・・。
くろあ：だから、来れるときいつでも来てくれよ、むらぁ。
むらぁ：うん、難しいと思うけど。そうするよwだからもう最後なんて言わないねw
くろあ：あぁw
むらぁ：それじゃあそろそろ時間だし落ちようかな～。。

時計を見てみるとすでに１１時になっていた。奈々との話し合いは３０分以上はかかっていたようだ。

くろあ：うん、絶対また来てねw
むらぁ：わかってるよwそれにまたどこかの誰かさんが困ってたらこっちも心配しなきゃならないしw
きら☆：www
くろあ：誰のことだよ・・・。。
むらぁ：あははwじゃあね、皆！久しぶりにチャットできて楽しかったよw
マジック：お疲れさまw
疾風：またどこかでw
ムロウ：必ず来いよな～
もこ：待ってるからねw
きら☆：俺様が手を広げて待っててやるw
奈々：またね、むらぁちゃん！
くろあ：むらぁ今日はありがとう！またあの時みたいにチャットできる日を待ってるから！
むらぁ：うん！じゃあ・・・またね！

管理人：むらぁさんが退室しました

むらぁは退室していった。
むらぁはこれからもまたしばらくは顔を見せることは出来ないと思う。
けど、僕はあいつがチャットに来るまでずっと待っている。
そう、あいつの一番の親友として。

奈々：むらぁちゃん行っちゃったね。
マジック：あぁそうだな。
くろあ：さてと、僕もそろそろ時間だし、そろそろ落ちようかな。
ムロウ：もうこんな時間だしな。
奈々：ねぇ、くろあ。くろあはこれからもアイコンチャットに来てくれるんだよね？
くろあ：うん。もう全てが終わったからねwだから明日も来るよ。
奈々：そっかぁwじゃあくろあが来るの楽しみにしてるねw
きら☆：まぁ俺はお前が来ようが来ないがどっちでもいいけどなw
もこ：きらがツンデレは気持ち悪いよ・・・。。
くろあ：それじゃあ、おちるね～。みんなおやすみw
疾風：お疲れ～
奈々：またね、くろあw
もこ：お疲れさま

管理人：くろあさんが退室しました。

時間にもなったので僕はチャットを退室した。
今回のアイコンチャットの事件は僕にとってはとても大きなことだった。
でもその分・・・奈々に思いを伝えたことで僕は少しは成長したと思う。

思いを伝えるという事は大切だということを僕はこの日知った。

そしてパソコンを消そうと思ったが2窓でタウンの方を放置していたのを思い出した。
挨拶だけして退室しようとタウンに行ってみたらメールが1件来ていた。

メールを開いてみるとそれはらむ・・・むらぁからのメールだった。
今さっき別れたばかりなのにと思いながらメールを読んでみる事にした。

「くろあに私は何度も助けられたよ。落ち込んでいる時時とかもくろあと喋っているだけで元気になれたしもちろん、くろあに言ったように癒されてたよwだからこれからもくろあと一緒に居たい。一緒に笑っていたい。くろあに会えて幸せだったよ・・・。くろあ大好きだよ♪」

よく意味がわからないメールだった。
けれど、僕は嬉しかった。
たぶん冗談なのだろうけどここまでむらぁに思われていることに・・・。

だから・・・

僕もむらぁに出会えたことが最高の幸せだ。

巡る季節

季節は春。
早いもので4月になっていた。
そして僕は中学3年生となった。

本当に時が過ぎていくのは早いものだ。
だけど、この中学3年は忙しい年になるだろう。
そう、中学3年ということは受験生という事でもある。

なので勉強・・・塾も今まで以上に行かないといけないのでアイコンチャットやタウンには今までのように多くは行けないだろう。

それでも、何とか時間をうまく見つけて行きたいと思っている。

というわけで僕は時間を見つけて今日はアイコンチャットでみんなと会話をしていた。

奈々：私たちもついに受験生だよ～。。
くろあ：そうだね・・・。
きら☆：俺は勉強しなくても余裕だけどなw
もこ：それは駄目だよ、きら。。
疾風：受験生は大変そうだな。
ムロウ：俺も大変だったからな。今度はお前達が頑張れよw
りんご：まぁがんばろうw
雫：そうだね、勉強は嫌いだけど・・・。

てる：同じく・・・

４月になるとチャットも人がだんだんと新しい人たちが増えてきていた。
相変わらず僕は新しい人たちと仲良くなるまでには少し時間がかかるがそれでもなんとか仲良くできていると思う。

ちなみにこの中に居る「りんご」という人物は珍しく同じ出身地である。

くろあ：ところで皆は受験する高校とかもう決まってるの？
奈々：決まってるよ～。今の状態じゃあ難しいかもしれないけどw
きら☆：俺はもこたんと一緒のところ行くぜ！
もこ：出身地が違うから無理でしょw
りんご：ん～一応決まってるよw
雫：私は一応大丈夫だろうって先生に言われたw
てる：俺もなんとなくは決まってる・・・

皆決まってるのか・・・。僕はまだはっきりと決まってないんだよな。
自分がなにをしたいのか。なにを勉強したいのかがはっきりわからないんだよな。

ムロウ：くろあは決まってるのか？
くろあ：いや、まだ決まってない。。
りんご：くろあ早く決めないとw私と一緒のところ行く？w
くろあ：りんごは確か前女子高とか言ってただろうw
りんご：ちっ、ばれたかww
奈々：でも、早く決めたほうがいいよ、くろあw
くろあ：うん、先生にも言われてるから今月中には決めておくよ。。

この前の3者面談の時にも先生にも早く決めとくようにと言われた。
成績はそこまでいい方じゃないし、スポーツもそこそこだし芸術的センスもあるってわけでもない。
商業、工業系の学校よりは普通科の学校がいいんだろうけど、普通科だけでも高校は大量にあるからそこを考えないといけない・・・。

こんな感じで4月というより春は高校を決めるのに迷ってしまう季節となった。

そして早くも夏。
梅雨入りもしてそしてなんと言っても今年は暑かった。
そんな中毎日塾へ行っててタウンやアイコンチャットをする時間は本当に少ししかなかった。

今日は時間を見つけてタウンで会話をしていた

くろあ：行きたい高校決まったのはいいけど勉強がだるい・・・。
タモリ：俺も・・・。タウンに来る時間も減ってきたし。。
いちご：あはは、ふたりとも大変だねw私もだけど・・・。
りょっち：受験生は忙しいのは当たり前ですよ。
ファイナルアサシン：俺も中3になったらこうなるのか。だいぶ先だけどw
めぐ：私も1年後には受験かぁ。。

相変わらず、今回も受験の話。
それだけ勉強で疲れてるってことなのかもしれない。

くろあ：やめよう、受験の話してると頭痛くなってくる。。
タモリ：同じく・・・。明るい話題にしようw
りょっち：そうですね！

この後も僕たちは話題を変えて話していたがなぜかふと話題は自然に勉強関係のほうに変わっていくのだった。

まぁこれだけ同じ年齢でしかも受験生が集まってればしょうがないか。

でも、勉強もちゃんとしていかないといけない。
受験の日、前期試験日は1月、それまでがんばらないとな。

夏休みは毎日塾、そして勉強の繰り返しで夏休みは終わってしまい、夏はあっさりと終わってしまった。

そして秋。
受験の日まで段々と近づいてきていた。

奈々：受験までもう少しだよ～

くろあ：あぁ、そうだね。。
きら☆：もうどうなってもいいさw
もこ：それは駄目だと思うけど・・・。
りんご：でもやっぱり自分が行きたい高校には受かりたいよねw
奈々：うんうんw
もこ：皆が笑顔で合格することができたらいいねw
きら☆：おっ！もこたん良いこと言うなw
奈々：それに最近はみんな勉強とかで忙しいけどさ、また皆でチャット楽しくしたいね～。勉強のこととか忘れちゃってw
くろあ：うん、だからそれまでがんばろう！
きら☆：よっしゃー！もこたんのためにやってやるぜぇ！！
もこ：きらは放っておいてがんばろう！
りんご：よーし、やるぞー！
奈々：合格してみせるよ～w

アイコンチャットのおかげで僕たちは改めて気合を入れることができた。
だから、絶対に合格しなければならない。
僕はそう思うのであった。

冬が来てついに受験の日がやってきた。
前期選抜、僕の学校は数学、国語、英語の試験と面接だ。
今まで勉強に面接の練習嫌というぐらいやってきたので今までのや

ってきた全てのものを出し切れば絶対にいけるはずだ。

それにしてもまさかここまで緊張するとは思わなかった。
昨日アイコンチャットメンバーやタウンのメンバーに応援してもらったときは安心しきっていたのに受験会場の学校に来ると緊張が半端ない。

だけどここで落ちるわけにはいかない。
応援してくれている両親、おばあちゃんやおじいちゃん、学校の友達、先生、それにアイコンチャットのメンバーとタウンのメンバーのためにも。

この前期選抜で合格してみせる・・・。

こうして長い受験の日は始まった。

そして前期選抜は終わった。
終わったら肩の荷が下りた。初めての受験・・・。こんなに疲れるとはな。

前期選抜が終わった後1週間は僕は勉強もせずにだらだらと過ごしていた。
まるで今まで勉強を毎日していたのが嘘のようだ・・・

だがだらだらと過ごしていると1週間経つのは早いもので合格発表の日となっていた。

相変わらず僕は受験した高校へ来ると緊張をしていた。

合格発表の紙が張り出されているところへ来るとそこにはたくさんの人だかりができていた。
その中には合格しただろうと思われる人が友達などと喜びを分かち合っている人や電話をしている人、また落ちたのかはわからないけど、明らかに暗くなっている人や下を向いて泣いているひとなどがいた。

僕はそんな人たちを見ながらも合格発表の紙の前までに来た。
緊張しならも僕は自分の番号を一生懸命に探した。

どんな結果になろうともそれを受け止めなければならない。

結果は・・・・・

合格だった。
自分の番号を見た時僕は全ての力が抜けていった。

この後僕は近くの公衆電話で親に電話をした。
どうやら親は泣いていたようだ。
本当に期待にこたえられてよかった。勉強もがんばってきてよかった。

そして夜。僕はチャットとタウン両方に行って今日合格したことを皆に伝えた。

奈々：くろあ、おめでとーーー！！ｗ
疾風：やるじゃないかくろあｗｗ
きら☆：ふんっ！うまくいったのはほめるが調子にのるなよｗ

もこ：妬まないの、きらw
ムロウ：よくやったなw
くろあ：皆ありがとうw
奈々：でもやっと終わったんだね。これで勉強もしなくてすむし、ゆっくりできるねw
くろあ：あぁ、そうだね。後は卒業式を待つだけよ。
きら☆：俺は受験が明後日だというのに・・・。
もこ：勉強してなよw
くろあ：それより、りんごは今日来てないの？あいつも確か合格発表今日のはずだけど・・・。
奈々：う～ん、まだ見てないね。。どうしたんだろう？
きら☆：まさか、落ちたとか！
もこ：こーら、縁起悪いこと言わないの！
ムロウ：もしかしたらその可能性もあるが友達とかと合格したからって騒いでるんじゃないのか？
くろあ：あ、そうかもしれないねw
奈々：でも、くろあもお疲れさまwこれからはチャット前どおり今までできるねw
くろあ：うん、やっとねw

りんごが気になるけど、なんかこうやってチャットでのんびりするのは久しぶりのように感じた。
そしてそれはタウンでも一緒だった。

タモリ：いや～まさか俺も受かるとは思わなかったw
くろあ：お互いがんばった価値があったね。
めぐ：おふたりとも合格おめでとうございますw
陸戦型：くろあの裏切り者・・・。
くろあ：いや、なんか悪い。でも後期があるから頑張れよ！
タモリ：そういえばサナトスも落ちたって言ってたな～。

りょっち：受かる人も多く居れば落ちる人も居るってことですねｗ
いちご：私たちは今日前期試験だったよｗ合格発表の日が待ち遠しい。。
くろあ：合格したらまた皆でタウンで騒ごうよｗ

この受験でタウンに居る僕のリア友タモリは合格し、陸戦型は落ちていた。それにサナトスも。

まぁなんにしてもこれで僕の受験地獄は終わった。
あとは卒業式・・・。それだけだ。

そして冬が終わりまた春が来た。
３月１５日中学卒業式。

今日で僕は中学を卒業する。
友達と馬鹿やって遊んだり、あまりいい成績を出せなかったけど部活もがんばった。
勉強はただ疲れただけだったけど・・・。
でも、それでも充実した３年間だったと思う。

友達全員とは違う学校へ行くことになってしまったけど、これからも友達とは交流を持っていきたいと思う。
それはアイコンチャットとタウンでも同じことで皆ともこの先仲良くしていきたい。

本当に長いようで短かった3年間・・・

僕たちは今日中学を卒業した。

キャラクタープロフィール２（前書き）

くろあ達も中学を卒業して区切りがいいので再びキャラクタープロフィールです

「あの日の思い出」キャラクタープロフィール２（アイコンチャット、交流の街ＴＯＷＮ編現在までで中心人物）

この中には増えた人物も居れば減った人物も居ます

キャラクタープロフィール2

～アイコンチャット編～

～くろあ～　高校1年　15歳♂　主人公
最近では色々と悩みを抱えていたがそれを奈々やむらぁと共に解消し一回り成長をしたようだ。
アイコンチャットでは相変わらずマイペースなのだがそこがくろあのいいところでもある。
アイコンチャットを始めてもうすぐ3年目を迎えることになる。すでにチャットレベルは中級者以上に成長したと思われる。

～むらぁ～　高校1年　15歳♀　親友
アイコンチャットを引退したと思われていたが再びくろあの前に姿を現した。
くろあが悩んでいるところを助けてくれた、くろあの1番の親友。
どうやらリアルの方で色々事情があり忙しくパソコン自体にあまり触れられないらしい。

～奈々～　高校1年　15歳♀　皆のアイドル
いつも元気で誰に対しても優しく誰とでもすぐに仲良くなれる。
チャットではアイドル的存在で皆から人気もある。
くろあとの事件以来くろあとはより一層仲良くなった。
くろあにとって大切なひとりの人物

～きら☆～　高校1年　15歳♂　自称もこの彼氏
アイコンは今も使っていない。
もこが大好きでいつももこを追っかけまわしている。
性格は変わり者。というより変態。

交流の街ＴＯＷＮにも居て、資産金ランキングでは上位である。

～もこ～　高校１年　１５歳♀　抑制者
アイコンはきらと同じく使っていない。
きら☆を抑えることができる唯一の人物であり、きら☆に対する突っ込みもなかなかのもの。
きら☆はもこの事が好きなようだがもこは・・・？

～ムロウ～　高校２年　１６歳♂　暇人
アイコンチャットではお兄さん的存在。
よくアイコンチャットに顔を出しては奈々たちと楽しそう会話をしている。
奈々に気があるようにみえるのだが・・・？

～疾風～　中学３年　１４歳♂　上級者
１年前と比べると明らかにチャットのレベルが高くなっている。
また、タイピング速度は異常に速い。
チャットでは特に奈々とムロウと気が合うようだ。

～マジック～　高校３年　１６歳♂　普通
アイコンは仮面をつけた無口そうな男のアイコンを使っている。
よくチャットに来ており皆とよく話している。
特に特徴はなく本当に普通な人物。
だが、そのこともあり何を考えているのかがわからない。

～りんご～　高校１年　１５歳♀　ネット友？リア友？
アイコンはピンク色の髪をしたまだ幼い女の子のアイコンを使っている。
くろあとは同じ県に住んでいる。
チャットはまだ初心者だがアイコンチャットにはすぐに慣れたよう

だ。
アイコンチャットで特に気が合うのは、くろあとてる。

～雫～　高校1年　１５歳♀　引っ込み思案
アイコンは魔女のような女の子のアイコンを使っている。
最近アイコンチャットに来た新人の女の子。
チャットに来ることはあるのだがそこまで積極的に喋ることはない。

～とりで～　高校1年　１５歳♂　行方不明
最近は全く姿を現していない。
だが、この後意外なところで登場。

～キキ～　中学2年　１３歳♀　失恋
くろあに振られて以来チャットそしてタウンですらも姿を見なくなった。
今はどこで何をしているかがわからない。

～てる～　高校1年　１５歳♂　初心者
アイコンはとりでが使ってたのと一緒で黄緑色の鼻の長い動物みたいなアイコンを使用。
まだまだチャットのレベルは低いがアイコンチャットをすることで少しずつだがレベルを上げて来ている。
チャットでは、くろあやりんご、奈々などとよく話す。

～交流の街ＴＯＷＮ編～

～くろあ～　高校1年　１５歳♂　主人公
タウンに来てもうすぐで2年が経とうとしている。

タウンにはもう既に完璧に慣れたようでタウン暦では結構先輩の部類に入る
アイコンチャットとは性格においてもなにも変わらない。
タウンでは付き合っていためぐと結婚をした。

〜めぐ〜　中学3年　１４歳♀　配偶者
くろあ達のタウンの先輩である。
約2年前は少し消極的なところがあったが、くろあ達や他のメンバーたちと接している内にそんな面は消えてきた。
タウンではくろあと仲が良く、結婚をした。

〜タモリ〜　高校1年　１５歳♂　リア友
くろあと同じくもうすぐでタウンに来て2年が経とうとしている。
高校に入学してもくろあとはよく会うことがある。
高校入学後は商業高校でもあるのでタイピング速度が一気に速くなる。
タウンでは、はちみつと結婚した。

〜ファイナルアサシン〜　中学2年　１３歳♂　天才
タウンの皆から将来有望な少年と思われている。
チャットにおいてもパソコン、タイピング速度などのレベルは非常に高い。
最近はホームページを作ったようだ。

〜サナトス〜　高校1年　１５歳♂　リア友
相変わらず自己中心的なところがありわがままなところがある。
中学の頃は陸戦型とリアルでよく喧嘩をしていた。
前期選抜のときには一度希望の高校に落ちたが後期選抜で見事に合格した
タウンでは最近咲月と結婚をした

～陸戦型～　高校１年　１５歳♂　リア友
個性的な性格をしている。
リアルではよくくろあと絡んでおり高校生になってもよく遊んでいる。
サナトスとは相変わらず相性が悪い。
最近はタウンで見ることがなくなった。

～きら★～　高校１年　１５歳♂　自称もこの彼氏
タウンでもなかなかの変態ぶりである。
だが、タウンのゲームとしての素質はあり何度も資産金ランキングでは１位になったことがある。
念願かなってついにもこと結婚をした。

～もこ～　高校１年　１５歳♀　抑制者
きら★に無理やり誘われてタウンに連れてこられた。
どうやら毎日きら★とメールをしているらしい。一方的にきら★が送っているのであろうが・・・。
どういう経緯できら★と結婚したのかが謎である。

～いちご～　高校１年　１５歳　積極的
他のチャットでくろあが誘ってタウンへとやってきた。
リア友をたくさんタウンに連れてきたりしている。
積極的でくろあに電話をしようなどと誘ったことがある。
タウンではりょっちと結婚をした

～りょっち～　高校１年　１５歳　真面目
基本丁寧な言葉で皆と会話をする。
最近では少しずつタウンにも慣れてきているようだ。
タウンではいちごと結婚をした。

～ろすけ～　高校１年　１５歳　ＴＯＷＮでの先輩
くろあ達のＴＯＷＮでの先輩。
最近は滅多に来なくなってきている。
どうやらリアルが忙しいらしい。

～咲月～　高校１年　１５歳　積極的
いちごとはちみつのリア友。
性格は優しく、初心者の人たちが来たら丁寧に教えてあげたりする。
タウンではサナトスと結婚をした

～はちみつ～　高校１年　１５歳　積極的
いちごと咲月のリア友。
２人のリア友ということもありタウン内でも凄く仲が良い。
２人以外では特にタモリと仲が良く結婚をした

～キキ～　中学２年　１３歳♀　失恋
アイコンチャットと同様でくろあに振られてから姿を見せていない。
一体どうしたのだろうか？

～マリ～　高校１年　１５歳♀　先輩
くろあ達のタウンでの先輩。
ｋｏｔａを宥めることのできる唯一の先輩であったが最近は少し出現率が低下している。タウンに来たかと思えば挨拶をしてすぐ落ちるという感じ
そのｋｏｔａはもうすでにタウンには来ていない。

～あるふぁ～　大学２年　１９歳♂　管理人
交流の街ＴＯＷＮの管理人。
タウン内に来ることはないがしっかりと管理はしてくれているよう

だ。
たまにアイテムなどを増やしてくれたり荒らしを追放したりしてくれる。

〜羅夢〜　高校1年　15歳♀　親友
ただのタウンの新入りかと思われたがその正体はアイコンチャットのむらぁだった。
彼女は忙しいという中くろあを助けるためだけにタウンに潜入しそして見事にくろあを助けた。
くろあにとっては親友でもあり恩人でもある。

始まりと終わりと

４月僕はひとつ大人への階段を上った。
そう、僕たちは高校生になった。

まぁ高校生といっても突然なにか変わるということでもないが・・・・。

それでも僕の身の回りで変わったことといえば、ついに僕も携帯が持てるようになった。
中学の卒業式後親に早速買ってもらった。
タウンにはいけないが、これでいつでもアイコンチャットには携帯からいけるようになった。
携帯からのチャットはとてもやりにくいが・・・・。
それと最近では奈々やタモリ達ともメールをしている。
タモリやサナトス、陸戦型などはリアルの友達でメールをしているのは当然だがやっぱりネットでの友達の奈々達と普通にメールができるようになったのは新鮮だった。

だいぶ前から皆とはメールしたかったと思ってたし・・・・。

それより入学式には何人か顔見知りの人たちが居たがほとんどが他の中学から入学してきた人たちだらけで少し不安になった。
なんとか友達を作らないとな・・・・。

入学式後は早く終わり特にすることもなかったので僕は家に帰ってすぐにアイコンチャットとタウンへと行った。

くろあ：ふぅ、入学式疲れた・・・。
奈々：お疲れさま～
てる：くろあも今日入学式だったんだよな？
くろあ：うん。皆もそうでしょ？
奈々：私も今日だったよw
てる：あぁ。俺も疲れたよ。。
きら☆：俺は寝てたから、そこまで疲れなかったぜ！
もこ：きら、それは威張れることじゃないと思うよ・・・。

どうやら皆も入学式だったらしい。たぶん入学式が早く終わったからチャットに来たんだろうな。

くろあ：ねぇ、りんご最近見ないことない？だいぶ前も聞いたような気がするけど・・・
てる：そういえば、あいつ最近見てないなw
奈々：そうだね～。確か最後に見たのが前期選抜前だよね。。
もこ：う～んどうしたんだろう。。

僕の住んでいる場所はどこの高校全部今日は入学式のはずだ。
同じ出身地のりんごも入学式には行っているはずだろう。
それにしてもあいつはどうしたんだろうか・・・？

奈々：それよりも、皆入学式どうだった？
くろあ：何か友達も別の高校だし不安だらけって感じかな。。
きら☆：可愛い子だらけでうっきうきしちゃうぜ！だけど俺にとっ

てはもこたんが一番だけどなw
もこ：・・・・。私も少し不安かな。。
てる：俺は2人ほど友達一緒の学校だけどクラスがばらばらだからな。
奈々：私もこれから不安だけど、友達できたよ！！
さすが奈々だな。リアルでもすぐに友達ができるとは・・・。
今日はこんな感じでアイコンチャットで話をしていた。

そして僕はアイコンチャットをしながらタウンのほうでも会話をしていた。

タモリ：いや～人多かった・・・。
くろあ：タモリのところの学校は確か人数多かったよね。
咲月：私なんて学校で迷っちゃったよw
りょっち：どんまいですw
いちご：でも、私達ももう高校生なんだよねw
くろあ：あんまり実感ないけどね～。。
タモリ：だなwまだまだ中学生気分だぜw
高校生になったからといっても急激になにかが変わるというわけでもない。
まだまだ僕たちは子供なんだし・・・。

この後もアイコンチャットとタウンで会話をしていた。
1時間ほどすると少し眠たくなってきたので僕は少し寝ることにして両方とも退室をしパソコンの電源を切った。

翌日。高校にもまだ慣れていないのと友達がクラスに居ないということで僕は教室の自分の机で少しどきどきしながらも座っていた。周りを見てみると僕と同じくまだ友達ができていなさそうな人が多く、机で寝てる人やボーっとしている人など様々に居た。同じ学校かは知らないがそれでも早い人はもうすでに友達を作っていた。

僕は積極的か消極的かと聞かれたらどちらかというと消極的なので、積極的に友達を作ることができない。中学の時は小学校の時の友達、部活や友達から声をかけてきてくれたというので友達はできたのだが高校じゃそうはいかないだろう。

こんな時に奈々みたいにすぐに友達と仲良くなれたらなぁ・・・。

「あの」

そんなことを思っていると後ろから声を掛けられた。僕は後ろを振り返るとそこには女の子が座っていた

「え、何かな？」

「ん～・・・」

彼女は指を口のところにあてながら首を捻り唸り始めた。

「えっと・・・」

さすがにこっちを見て唸り続けているので逆に僕が困ってきてしまった。

「もしかして、くろあ？」

「！！」

その言葉を聴いた瞬間僕は固まってしまった。

なんでこの子が僕のネットでのハンドルネームを知っているのかが分からなかった。

いや、そもそもこの子のことなんて一回も見たことないし知らないぞ・・・

「なんで、君がそのことを・・・」

「あーやっぱりそうなんだ～」

そう言うと彼女は嬉しそうにして僕の手を強引にとり振り回した。

僕はかなり焦っていたがなんとか手を離した。

「ねぇねぇ、くろあ。私のことわかる？」

「いや、分かるって言っても・・・。それより君はもしかしてアイコンチャットかタウンに居る人なのか・・・？」

僕のハンドルネームが分かるといえば、仲の良いリアルの友達とアイコンチャットとタウンの友達ぐらいしか居ない筈だ。

「タウンは知らないけど、アイコンチャットなら知ってるかな～。というより分からないの？」

やっぱりアイコンチャットのメンバーの誰かなんだ。だけど、この子は一体・・・。

「ごめん、わからない。君は誰なんだ？」

「ひっどいな～。私なんて絶対この人くろあだって分かったのに。まぁしょうがないかまだそこまで付き合い長かったってわけでもないし」

1年間も付き合いがない？最近会った人なのかな？

「りんごだよ、りんご」

「りんご！？」

「そんなに驚かなくても～」

なんであいつがこんなところに・・・。

「そりゃ驚くに決まってるだろ！なんでお前がここに居るんだよ！だいたいお前女子高受けたんじゃなかったのか！？」

「あ～あれね。うん、前期で落ちたよ」

「落ちたって・・・。まさかそれで前期の後チャットには来なかったのか」

「そういうこと♪」

何が面白いのか彼女はなぜか笑い始めた。こっちは全然笑えないのだが・・・

「いや、それよりどうしてこの学校に・・・」

「だって～、前期で落ちたらもう後期ではあの学校受けないって思ってたし。私の友達もその時他の高校受かってたし。それでそういう感じで困ってる時チャットでくろあと話してたときくろあがこの

高校受けること思い出して私もここ受けてみることにしたの。それで見事合格ってわけ。それにやっぱり知り合いが居たほうがいいでしょ？」

「わからないこともないけど・・・。よく初めて会うのにこんなに簡単に話しかけてこれたな・・・」

「え？だって私達初めてじゃないじゃん。チャットでよく喋ってたじゃない」

「そういう意味じゃなくて、リアルの話だよ」

「ん～、今さっき言ったとおりこの人くろあだってわかったからね」

「もし、違ってたらどうするつもりだったんだよ？」

「その時はその時よ」

なんかやっぱりこいつ変わってるな・・・。チャットではそんな感じはしなかったけど。

「ねぇねぇ、それよりくろあ？」

「ん、何？」

「くろあって、容姿こんな人だったんだね。かっこいいっていうよりどちらかといえばかわいいって感じだよね。でも性格はチャットとほぼ同じ」

そう言いながらりんごは僕のことをジロジロと見始めてきた。

「別にかわいいってわけじゃ・・・」

「あ、くろあは私のことどんな感じの子だと思ってた？」

チャットで話してた時はあまり考えることはなかった。どうせ会わないだろうしと考えていたから。

でも今日実際会ってみるとりんごは結構美人な方に入ると思う。ま

ぁ性格はチャットと比べるとおかしなところが入ってると思うけど・・・。

「なんとも思ってなかったよ」

「え～少しは考えてくれてもいいじゃない。つまんないな～」

「それより、りんご」

「な～に？」

「いつまでチャットでの名前呼んでるのかなと思って・・・。まぁ僕もりんごって言ってるわけだけども」

「あ～それもそうだね。でも、あだ名ってことでいいんじゃない？」

「お前がいいなら僕も別にいいけど・・・。でもさすがに名前ぐらいは覚えておいてくれよ」

「わかってるよ。それじゃあ改めてよろしくね、くろあ」

「あぁ、よろしく、りんご」

僕たちは改めて挨拶をした。その後りんごとも結構話した後担任の先生が教室に入ってきて授業が始まった。といっても先生の自己紹介や自分の自己紹介なのだが。

今日も学校初日なので少し早く学校が終わり僕はさっさと帰ろうとしていた。

「くろあ、一緒に帰ろうよ」

帰る準備をしていると再びりんごが話しかけてきた。

「いいけど、僕自転車だよ」

「私はバスだけど、じゃあバス停までっていうことで」

「わかったよ」

僕は自転車をおしてりんごと会話をしながらバス停までむかう事になった。

「くろあってアイコンチャットどれくらい居るんだっけ？」

「ん～そうだな、２年ちょいぐらいかな？１２月で３年目になるって感じ」

「結構長いんだね。私はちょうど１年ぐらいなのかな？」

「そういえばりんごとは去年の今頃に出会ったんだよな」

「そうだね。あの時は受験勉強で忙しい時だったよね」

受験勉強。あまり思い出したくないな・・・。

というより去年の今頃は僕はまだ行きたい学校がはっきり決まってなかったんだよな。

「ねぇ、くろあ直球で聞きたいことあるんだけどいいかな？」

「なんだよ？」

「くろあって奈々のこと好きなの？」

「なんでだよ、僕はそんな風に思ってないよ。友達としては好きだけど」

僕は本当は奈々のことが好きだ。

でも相手が友達のりんごだとしてもそれはまだ言えない。

「えー、本当かな～？」

「本当だよ。それより、りんごはバス乗ってどれくらいのところに家あるんだ？」
「なんか話そらされたような・・・。私の家はバスで２０分降りてから徒歩で5分ぐらいのところだよ」
「そうなんだ。じゃあ市内ってことか」

意外と僕とりんごはそこまで離れたところに住んでいるわけじゃなかったのか。

「よーし、明日からは友達もっと作るよー！！くろあも一緒にね」
「僕も一緒なのかよ・・・。まぁ別にいいけど」

それに僕一人じゃあ簡単に友達を作ることは無理だろうし

「決定ね！それじゃあバス停も近いしここらへんでいいよ、くろあ」
「あぁ、わかった。それじゃあまた明日ね」
「うん、またね。くろあ～」

そう言って僕とりんごはバス停の近くで別れた。
とりあえず友達ができてよかった・・・。まぁ相手はりんごなんだけど。
そんなことを思いながら僕は自転車に乗って家に帰っていった。

晩飯後、僕はいつものようにパソコンを立ち上げチャットへと行った。

チャットへ行くと久しぶりにりんごがチャットへと来ていた。
管理人：くろあさんが入室しました
疾風：おぉタイミングいいなw
くろあ：タイミング？
ムロウ：ちょうどお前とりんごのこと喋ってたんだよw
りんご：そうそうw今日会ったことをね！
くろあ：そのことか・・・。
奈々：ねぇねぇ、りんごちゃん、くろあってリアルじゃどんな感じだったの！？」
りんご：可愛い系って感じだよw私も想像していたのと違ったからびっくりしちゃったw
くろあ：だから可愛い系ってなんだよ・・・。
奈々：へぇ～可愛い系なんだ～。いいな～りんごちゃんだけくろあに会えて。。
ムロウ：でも、まさかくろあとりんごが高校一緒だとはな。
疾風：そんなことってあるもんなんだな。
くろあ：僕だってビックリしてるよ。。

チャットメンバーの誰かと会うなんて想像もしてなかった。
くろあ：それに学校で会ったのにここでまた会うってなんか変な感じだし・・・
りんご：ちょっとー、くろあそれってどういう意味よ？まさか私に2回も会いたくなかったとでも言いたいの？
くろあ：いや、それは・・・。その、違うけどさ。なんか新鮮っていうか。。
奈々：そうだね～私も新鮮だと思うよwこのチャットでチャットを通して出会ったことある人ってくろあとりんごくらいじゃないのか

な～？
ムロウ：それもそうだなwこんなことになったやつはチャットで見たことないし。
確かにこのチャットを始めてからしばらく経つけどこんな体験をしたってやつは見たことない。
奈々：それじゃあ私達もその内オフ会しようよw
てる：オフ会？
ムロウ：簡単に言うと俺達がリアルで実際に会うみたいなものさw
疾風：オフ会かぁ・・いいかもなw
くろあ：でも、学生の僕たちじゃ今は金のほうとかも心配だよな・・・。
りんご：確かにね。皆住んでるところばらばらだし集まるのにもお金かかるよねw
奈々：む～。じゃあ約束という事でw
くろあ：え、約束？
奈々：うん！今はまだできないけどあと何年後かになったらオフ会しようって約束！
ムロウ：おぅ、いいなソレw
疾風：何年後かが楽しみだなw
りんご：必ずオフ会しようね！
くろあ：まぁそれも悪くないかもね。
いつになるかは分からないけどオフ会を開く時が楽しみだ。
リアルで皆と喋るのも楽しいかもしれない。

そして高校生活が始まり1ヶ月経った。
りんごや僕は友達がそれなりにできて少しずつだが高校生活が楽しくなってきていた。
相変わらずリアルでのりんごのテンションにはついていけていないのだが・・・。

そんな中久しぶりに大きな事件が起きた。
まさかこの事件があんなに長くなるとはこの時なにも思っていなかっただろう。

僕はいつも通りパソコンをつけてタウンに行こうとしていた。
だけどタウンのサイトを開こうとしても何故か開かなかった。
僕はもう一度出直して再び入ってみようとしてみるがサイトは開いてくれなかった。
この後何回も出入りしてみたが結果は一緒だった。

この時間は無理だろうと思い僕は時間を置いてまた再び後で来ることにした。

夜、再び僕はタウンのサイトに入ろうとしていたが昼間と結果が一緒で全然入れない状態でいた。
どうしてだろうと思っていると携帯が鳴りメールが来た。
携帯を開いてみるとタモリからのメールだった。
内容は「タウンのサイトが開かないんだけどお前のところはどうだ？」という内容だった。
どうやらこのタウンが開かない状態は僕だけではなくタモリやそのほかの人たちもそうなんだろう。
今自分もタウンに入れないことをタモリにメールを送信した。

結局この日はタウンはおろかタウンのあるサイトにも入れないままで終わっていった。

だが、その次の日もそのまた次の日もそして一週間後もサイトに入れない状態が続いていた。
さすがにここまで来ると相当心配になっていた。
タウンができない間はアイコンチャットのほうで暇つぶしをしていたり、「きら☆」や「もこ」などと何故タウンに入れなくなったのかなどと話したりしていた。

くろあ：まだタウンは使えないのか・・・。。
もこ：そうだねぇ、こんなことって初めてだよね
きら☆：あぁマジでタウンないと暇なんだがw
くろあ：なんとか管理人のあるふぁさんに連絡とれたらいいんだけどなぁ。

もこ：それができないから困ってるんだけどねw
きら☆：俺、一応メアド知ってるぞ！
くろあ：え、嘘つけよ。なんでお前が知ってるんだよ・・・
あるふぁさんとタウンで話す機会はほとんどないしサイトのほうでもなかなか交流できる機会はないはずだ。

きら☆：まぁ俺が一方的に知ってるだけなんだけどなwブログにフリーメールアドレス貼ってたしw
くろあ：お前ブログ知ってたのかよ・・・。
もこ：ちょっとー、きら何でそれを早く言わないのよ！！
きら☆：ふたりとも知らなかったのかよww俺様はとっくに二人とも知ってるつもりでいたから話さなかったんだよwそれにサイトに普通にブログの場所リンクで載せてたじゃんwだから俺は悪くないからもこたん怒らないでw
確かに僕にも落ち度はあったかも・・・。基本タウンしか使わないからタウン以外にあるやつとかあまり見なかったし・・・。

もこ：わかったから、それよりURL教えてよ！
きら☆：さすがもこたん！よし、ふたりとも少し待ってろ！
きらは待てと言った後すぐにURLをチャット上に載せてくれた。
僕はそのURLをクリックして早速あるふぁさんのブログに行った。
あるふぁさんのブログを見てみると日記の方はしばらく更新をしていないようだ。
そして少し横にはメールをする場所があったので僕はそこをクリックしてあるふぁさんにメールを送ることにした。

「交流の街ＴＯＷＮにいる、あったうです。しばらくタウンというよりサイトのほうがアクセスできないようなのですがどうなってしまったんでしょうか？またタウンができるようになるのを楽しみにしています」
というような感じで僕のメアドものせてメールを送った。

メールを送った後は再びチャットに戻りもことときらにメールを送ったことを伝えた。

もこ：これであるふぁさんが返信くれたらいいんだけどねｗ私も一応メール送ったよ～
きら☆：俺も送ったｗ早くできるようになったらいいなｗ
くろあ：だね。まぁあるふぁさんもたぶん今頃なんとかしてくれているだろう。
きら☆：そうだといいんだがなｗ

この後もしばらく話して、ほかの人たちも来たので話題を変えていつも通り楽しく会話をした。
そしてその後時間も来たので僕たちは解散した。

それから数日後あるふぁさんからついにメールが届いた。
僕は急いであるふぁさんから届いたメールを読んでみることにした

「あったうさん、お久しぶりです。交流の街ＴＯＷＮの管理人をしているあるふぁです。ご報告のほうが遅くなってすいません。今サイトの現状を言いますと、どうやら交流の街ＴＯＷＮの他にもというよりサイト全体で色々と複雑な問題が起こっており、只今サイトに入れない状態となっています。このことについてはなんとか復旧

しておりますのでもうしばらくお待ちください。サイト自体は早ければ一週間以内には直ると思いますがＴＯＷＮや他の機能などについてはまだ未定です。またこれからの復旧進行などについてはブログの方をご覧ください。これからもサイトの方をよろしくお願いします」

どうやらサイトを直すのにだいぶ苦戦しているようだった。
僕はあるふぁさんに「全然大丈夫ですので、復旧のほうがんばってください」とだけメールを送った。

だけど、なんとか直るようでよかった。このままタウン使えなくなるのも嫌だし・・・。
僕はどんなにタウンの復旧が遅くなっても待つことにした。

そしてまた数日後あるふぁさんのブログに行ってみると日記が更新されておりそれを読んでみるとどうやらサイトの方が直ったようだ。
早速サイトに行ってみると前のまんまのサイトが表示された。
約２週間ちょっとぶりだけだとういうのに何故か凄く久しぶりのような気がした。

でもタウンは直っていないのでまだそこのところは心配だった。
だけどサイトが直っただけでもよかった。

サイトを一通り見ていると掲示板がありそこにはタウンのメンバーが何人か書き込みをしていた。
他の人たちもタウンが出来なくて困っておりそのことについてや普通に雑談をしたりしていた。

タウンメンバーではおもに、タモリやきら★、いちごにめぐさんなどが書き込みをしていた。

皆は本当にタウンが好きだからこんなに書き込みをしているんだろうな。まぁ僕もそうなんだけど・・・

そんなことを思いながら僕も書き込むことにした

くろあ：皆久しぶり～。元気にしてた？まだタウンは直ってないけどサイトは直ってほんとよかったねwまぁ気長に待っていよう。

僕は生存確認みたいな感じで掲示板に書き込んだ。

掲示板はチャットみたいにすぐに返事が来るわけではないのでしばらく待たないといけない。

相手がいつ掲示板を見て書き込むかがわからない。

夜、再び掲示板の方へ行ってみるとたくさんの書き込みがあった

いちご：くろあ久しぶり～wそれとサイト復活おめでとー！

ろすけ：皆さんお久しぶりです。サイトの方復活おめでとうございます。

タモリ：ろすけさん懐かしいwお久しぶりです。ほんとサイトだけでも直ってよかったなw

咲月：この調子でタウンも直ってくれたらいいんだけどねw

きら★：やっほー皆俺様に会えなくて寂しかったか～？

もこ：サイト復活おめでとうございます。あと、きらは黙っときな

さい
めぐ：お久しぶりです。また皆で話したいですねw
サナトス：早くタウン復活しねぇかな～。。
掲示板には本当にタウンの復活を願う書き込みがあった。それにろすけさんを久しぶりに見た。
しばらく皆と会話をする時はここを使わないといけないな。

そしてまたしばらく経った。
しばらく経ってもまたタウンは直らないでいた。
サイトは直って安心をしていたのだがまさかここまでタウンが直るのが遅いとは思わなかった。
それが僕を不安にさせていた。
まさかこのままタウンがなくなってしまうのじゃないかということで・・・。

タウンは僕の大切な場所でもありなくてはならない存在みたいなものだ。たぶん他の人もそう思っているだろう。だからこそなくしたりしたくない。
そんなことを考えながら今日も掲示板で会話をしていた。

くろあ：やっぱりタウンって大切な場所だなってしみじみ思うよ。
タモリ：あぁそうだな。俺にとってもとても大切な場所だよ。
めぐ：私もです。いつの間にかタウンが私の中で大きなものとなっていました。

咲月：そうだよね。私、タウンがこんなに大切なものになるとは思ってもなかったもの。
りょっち：それだけタウンで過ごした日々充実してたということですね。
いちご：りょっちの言うとおりだね。タウンにいるとほんとに楽しいもの。

皆も自分が思っているタウンへの思いを掲示板で言い合っていた。
まさかＴＯＷＮにこれだけの思いがあるとはあるふぁさんも思ってはいないだろう。
だからこそ、あるふぁさんにこの僕たちの思いを知ってもらいタウンを直してもらいたい。

そしてついに僕たちが待ち望んでいた日がやってきた。

いつも通り僕はあるふぁんのブログを読みに行ってみるとブログが更新されておりタイトルは「復活」だった。そのタイトルを見ただけで僕は胸の鼓動が早くなった。そして僕は素早くブログを読むことにした

「サイトを活用してくれている皆様いつもありがとうございます。タイトルにも書いてある通りついにアレが・・・「交流の街ＴＯＷＮ」が復活しました。時間はかかりましたがなんとか直すことができてよかったです。それとサイトの掲示板を拝見させてもらいまし

た。まさかタウンがここまで皆様に愛されているとは思いもしていませんでした。管理人として嬉しい限りです。サイトそれにタウンを活用してくださっている方本当にありがとうございます！！今後ともよろしくお願いします！」

どうやらあるふぁさんは掲示板に書いてあることを見てくれたようだった。あと、あるふぁさんに僕たちの思いが届いてよかった。
僕はブログを読み終わった後サイトに行き「交流の街ＴＯＷＮ」をクリックをした。

クリックをした後画面に映しだされたのは約１ヶ月ぶりのタウンの姿だった。
僕はその姿を懐かしく思いながらいつものパスワードを入力してログインした。

パスワードを入力している時「データが消えていたらどうしよう」などとも心配していたがちゃんとログインができてタウンでおなじみのメニュー画面が現れた。
所持金額も能力パラメーターもなにもかもが変わらずタウンが使えなくなる前の状態だった。

しばらくすると皆もタウンへとログインし始めてきた。

きら★：なっつかしぃぃぞおぉぉぉお！！！！！
もこ：きらうるさいよ。でもほんと懐かしいね。

くろあ：あぁ。でも懐かしいな。1ヶ月長かったな・・・。
タモリ：そうだな。まさかこんなにタウンが使えなくなるとは思ってもなかったからな。
いちご：あるふぁさんがちゃんと直してくれてよかったw
きら★：あの人には感謝しないとなw
めぐ：そうですねw後で感謝のコメントしに行かないと。
タモリ：俺はメール送っておこうかなw
りょっち：そうですね。それにしても本当にタウンが直ってよかった・・・。
くろあ：このままタウンが直らなかったら皆とも一生離れ離れになることになってたかもしれないからね。
いちご：そうだね。私もこんな形で皆と会えなくなるのも嫌だよ・・・。
咲月：私だって嫌だよ～。もっと皆と喋りたいことだっていっぱいあるんだしw
タモリ：皆一緒の思いだろw
くろあ：うん。このまま終わりなんて形にならなくてよかったよ。

正直1ヶ月もタウンが直らないとこのままタウンが直らないまま終わるんじゃないかと思ったときもあったけど今日この日タウンがちゃんと直っていつも通りのタウンで復活してくれて本当によかった。そしてこのままタウンが終わりじゃなくてまた皆と楽しく話せるときが来て本当に嬉しい。
けどこの事があったから改めて僕はタウンが大切なものかを実感できたのかもしれない。

そして今日はいつもより遅くまでタウンで皆と会話をしたのだった。

関係

タウンが復旧してしばらく経った。
あれからタウンは特に問題もなく正常だった。
というよりタウンが直ってからはあるふぁさんがよくタウンに来るようになったような気がする。
来るといっても少しの間だがあるふぁさんはアイテムを増やしてくれたり新しい建物を建ててくれたりなどしてくれている。
たぶんだけど僕たちの思いが伝わったからあるふぁさんが来てくれているのだろう。
そんな感じで最近は何事もなく落ち着いてきていた。

そしてリアルの方では高校生活初めての夏休みが幕を開けた。
まぁ高校になったからといって中学の時と夏休みの内容が変わるというわけではないのだけど・・・

きら☆：いや～やって来ましたなぁ夏休みw
ムロウ：あぁそうさw俺達の夏休みが来たのだよ！！
マジック：サマーバケーションッッ！！
くろあ：3人ともテンション高いね。。
てる：そうだな。異常に高いなw
マジック：何言ってるんだ！お前ら夏休みだぞ！！長期休暇なんだぞ！

くろあ：それぐらいわかってるよw
ムロウ：相変わらず、お前ら二人は冷めてるなww
くろあ：そう言われても・・・。
てる：何も言えねぇww
きら☆：まぁまぁ。諸君落ち着きたまえ。それより俺は今無性に疑問を抱いているのだ・・・
くろあ：疑問？いったいなんだ？

まぁきらの疑問ということはたぶんどうでもいいことだろう・・・。

きら☆：それはな・・・。
マジック：それは？
きら☆：今チャットに女子が居ないことだ！！

やっぱりどうでもいいことだった。

てる：ww
ムロウ：確かに今ここに居る奴らは見事に男だなw
きら☆：そうだろう！？なんでこのくそ暑い中男共が集まって喋らなきゃならんのだ！！
くろあ：暑いのは認めるけどねw
てる：相変わらずきらのテンポにはついていけそうにないわw
きら☆：もこたんはどこだ！？奈々にりんご、雫、その他の者達はいったいどこにいるんだぁ！！
くろあ：知らないよ・・・
ムロウ：ちょっと俺達が早く来すぎたかなw

ムロウの言うとおりまだ昼だ。夏休みなので暇だから皆チャットに来たのだろう。

きら☆：よしっ！ここは・・・
マジック：ここは？
きら☆：女子達が居ないから男子だけの会話をしようぜぃ！
ほんとこいつの考えていることが僕にはよく理解できない・・・。
ムロウ：ちょwwこんな昼からいいんですかww
きら☆：構わん構わんwこの俺が良いと言うのですから。
てる：お前は一体何者なんだよw
くろあ：ところで男子だけの会話ってなんだよ？
マジック：俺まだ１８歳越してねぇよw
てる：いや、さすがに１８禁ネタはやばいだろw
きら☆：なら、しょうがない。あのネタでいくか。
ムロウ：あのネタ？
きら☆：そうだ！チャットで好きな子の名前を教えあおうぜ☆
くろあ：いや、無理だろ・・・。
きら☆：何が無理なんだ、くろあ。お前だって何年もチャットしてるんだし好きな子ぐらい居るだろう！
確かにそうだけど・・・。そんなの言えるはずがない。
ムロウ：そうだなぁ。俺もネット恋愛何度だってしたことあるしw
マジック：プレイボーイだったんだなムロウ。
てる：だけど、くろあの言うとおりここで言うのは無理だろw閲覧だって来るかもしれないしさw
今閲覧は誰も居ないけれど絶対誰か来るはずだ。
それにこの状況で誰かが入室とかしてきたらやばいだろうし。
きら☆：大丈夫。だいたいで発言していったらそのログ消していっ

たらいいだけだ。
くろあ：でも、そんなに消していったら僕たちもその喋ってる内容見れないだろ？
きら☆：大丈夫だ。その場合のためにログを自動更新にしておけ。
確かに自動更新にしたらログが勝手に表示されて誰かが自分のログを消したとしてもその何十秒後かに消されるからその間に会話を見れることができる。

マジック：確かにその通りだな。
きら☆：じゃあそういうことだ。それでは始めるぞ！！

誰も同意してないのにきらが勝手に喋りだした。

きら☆：俺の好きな奴聞きたい人！！
くろあ：もこだろ・・・。
てる：もこだなw
マジック：もこしかいないだろうw
ムロウ：あぁもこだ。
きら☆：なんでお前ら知ってるんだぁぁ！

相変わらずこいつはアホだ。それにしてもきらの気持ちはもちろん知っているけどもこの方はきらの事どう思っているんだろう・・・？

ムロウ：さぁきらは終わりということで次は誰行く？
てる：のってきたなムロウ・・・。
ムロウ：ふっ、こんな楽しいこと久しぶりだからなw
きら☆：ならば、それでは楽しくなってきたというムロウの好きな人でも聞くとしようかw
マジック：そうだなwまぁ俺はだいたいわかるがな。皆もわかるだ

ろう？
くろあ：まぁな・・・。
きら☆：ずばり、奈々だな。

ムロウは奈々と喋る時は本当に楽しそうに喋りなにより積極的に喋る。
たぶんそれで皆も気づいていたのだろう。

ムロウ：フフ・・・
くろあ：どうしたんだ？
てる：不気味な笑いだなw
ムロウ：どうやら知っていたようだな！そうさ俺は奈々が好きなんだ！！
マジック：これは開き直ったと言えるのか？
くろあ：さぁ？どうなんだろう・・・。
ムロウ：別に開き直ってなどいないさ！俺は心の底から奈々を愛している！
きら☆：ほぅなかなかだな、ムロウwさすがだ！！
ムロウ：奈々が好きすぎてたまらないさw俺はずっとあいつのことを考えている！！

こんなムロウは見たことはなかった。たぶんムキになってるだけだろうけど。
それに今さっきからずっと奈々について語ってるし・・・。
というよりムロウはこんなに奈々のこと好きだったのか。

きら☆：あ～さすがにこの俺様もムロウの変化に戸惑っているのだが・・・。まぁ次に行こうかw
マジック：そうだなwじゃあ次は誰いくよ？
てる：次行くのか・・・。

ムロウ：なら次はマジックお前だ！！
くろあ：ムロウ復活するの早いな。
マジック：俺かよw
きら☆：マジックか。俺はマジックだけは全然わからんなw
てる：俺もわからない・・・
くろあ：同じく。
ムロウ：むぅ、悔しいが俺もわからんぞ・・・

マジックがこのチャットで特に積極的に女の子と話していたところを特に見たことがない。
皆と平均的に喋ってたし。そういう場面は本当に見たことなどなかった。

マジック：いやぁ実は俺別に好きなやつはいないんだよw
くろあ：そうなのかw
てる：それじゃあしょうがないなw
きら☆：全くマジックは枯れてるなwまぁそんな感じはしたんだがな。
ムロウ：くっ・・・そうか。。なら次はてるお前だ！
きら☆：進行役は俺様だったのに・・・。

明らかにムロウのやつは動揺しているな。
それにしても次はてるか。てるが気になっている人っているのかな？
居るとしたらたぶんアイツだろうけど・・・。

てる：今度は俺か・・・。
きら☆：ずばり、りんごだな！！
くろあ：早ッ！
マジック：てると言ったらりんごしか考えられないよな。
ムロウ：普通に仲いいしなw

てる：いや、俺は別に・・・。
きら☆：素直になりなさい。君はりんごのことが好きなんだよw
マジック：そうそうw全てを吐き出しなさい。
てる：ちょ、お前らw
ムロウ：だが、少しでも気になっているという気持ちはあるだろう？
てる：ま、まぁ・・少しぐらいなら・・・
きら☆：ハッハッハwそれは好きということなのだよ少年！
くろあ：明らかにお前らが誘導尋問したような気がするんだけどw
ムロウ：ふっ、お互いにがんばろうじゃないか、てる。
てる：あ、あぁ。。

やっぱり明らかに誘導尋問だろう。
それにどんどんこいつらテンション上がってきてるし。

ムロウ：さて、残るは・・・
きら☆：くろあだな！！
マジック：アンカーだなw
てる：くろあ耐えてくれ・・・。

ついに僕の順番に来てしまった。
ていうかマジでここから逃げ出したい・・・。だけどさすがにそうもいかないだろう。

くろあ：あのさ、やっぱりやめないか。閲覧もいるし・・・。
ムロウ：なにを言うか今更！それに閲覧は見たこともないＩＰで他人だ！関係ない。
きら☆：そうだぞ、皆恥ずかしながら言ったんだぞ。
別に僕は聞きたいとか言った覚えはないんだけどな。

マジック：だけど、くろあの場合は簡単だろw
きら☆：それもそうだなwそれじゃあ皆一緒に言うかw
ムロウ：いいなwじゃあ「せーの」でいくぞ。
てる：すまない、くろあ。

なんか僕が何も言えなくて困ってる時に話勝手に進んでるし。

ムロウ：せーの！！

ムロウが合図を出した。この瞬間一気にログが表示された。

きら☆：奈々
てる：奈々
マジック：りんご
ムロウ：むらぁ

奈々が多かった。といってもふたりだけど。
でもなんでわかってるとか言ってバラバラなんだよ・・・

きら☆：いやいや、くろあが好きなのは奈々に決まってるだろう！
なぁてる？
てる：俺は何も言えない・・・
ムロウ：アホか！くろあが好きなのはむらぁだろ！むらぁとくろあ明らかに相思相愛だっただろ！それに親友が好きな女をくろあが好きになると思うか！？
マジック：てるには悪いけど普通に考えたらりんごだろ！なんていってもリアルで実際に会ってるし、それに同じクラスで友達だぞ！？

また勝手にこいつらは言い争いを始めたし・・・。

ムロウ：おい、くろあはどうなんだよ！？
きら☆：そうだ。くろあの気持ちが一番大事なんだぞ！？
くろあ：僕の気持ちって言われても・・・。。

僕の気持ち・・・。奈々にむらぁ、りんごか。
奈々と出会って少しした頃から正直奈々のことは気になっていた。
前奈々と色々あったときは本当に最悪な事になってたけど仲直りをして前より奈々に近づけた事が感じられた時は本当に嬉しかった。
僕はやっぱり奈々のことが好きなんじゃないだろうか？
それとりんご。
りんごは他の2人と比べると一番付き合いは短いけどリアルでもほぼ毎日あってるしある意味付き合いは一番深いかもしれない。それに距離が近いのは明らかに彼女だろう。
だけど彼女に対してそういう好きという気持ちはない。
友達としての好きという気持ちはあるんだけど恋愛対象としては見れない。
そしてむらぁ。
一番付き合いが古いけど1年に1回会うか会わないかという感じになっている。
奈々からだいぶ前にむらぁのメールアドレスを聞いたけどむらぁが忙しいことを考えるとなかなかメールをできないでいる。
それでもこのチャットで一番仲が良い人と言えばむらぁだろう。なんていったって親友だし。
だけどむらぁを恋愛対象として見るというならばどうなんだろうか。
アイツと喋っていれば普通に楽しいし遠慮とかもいらない。
だけどむらぁをそんな恋愛対象としては見たことはない。
僕はアイツのことをどう思っているのだろうか・・・？

マジック：おい、くろあ！優柔不断はいかんぞ！

くろあ：いや、優柔不断とか言われても・・・。
きら☆：ならば、誰か一人を選べ！！
ムロウ：むらぁかりんごかそれとも、奈々なのか・・・？
マジック：りんごを選ぶ場合はてるの気持ちも考えてやれよ、くろあw
てる：俺は別に・・・。

さすがにここまで皆に言われてたら言わないわけにもいかない。
だけど僕は一体どうしたらいいんだろうか。

きら☆：さぁ答えろ、くろあ！！
くろあ：えっと、僕は・・・。

管理人：奈々さんが入室しました

僕がなんとか答えようとしたとき、タイミング良く奈々が入室してきた。

奈々：はろ〜w
てる：こんw
マジック：まさかここでw
ムロウ：奈々待ってたぜww
きら☆：チッ、もう少しだったんだが・・・。

それにしても本当に助かった。
まだあまりちゃんとした答え出せないでいたし。

奈々：ん？なんの話してたの？
ムロウ：いやいやなんでもないさw
マジック：そうそう、たいした事ないw

奈々：ふ～ん。そうなのくろあ？
くろあ：あ、あぁたいした事ないってw
奈々：そうなんだ～。私はてっきりくろあの好きな人皆が聞いてると思ったのにw
くろあ：そ、それはどうかな～・・・？

もしかして奈々は見ていたんじゃないのか・・・。
でも会話の最後のほうは閲覧いなかったはずだし・・・。

奈々：でも、くろあの好きな人って誰なのかな～？
てる：はは・・wそれは俺も知らないなぁ・・・。。
ムロウ：ふっ、それはむらぁだろうw
くろあ：おぃムロウ！なに言ってるんだよ。
奈々：え、くろあってむらぁちゃんのこと好きだったの！？
きら☆：いやそれが本当なのかということを今話していたところだったのだ。
くろあ：お前らなぁ・・・。

こいつら明らかに僕を裏切りやがった。男同士の話だったはずなのに。
これはまためんどうなことになりそうだ。

奈々：ねぇねぇくろあってむらぁちゃんのこと好きなの～？
くろあ：だからそれはまだ分からないんだって。
きら☆：くろあいい加減答えを出せw俺らが言ったやつの中に好きなやつはいるだろう。
ムロウ：むらぁだよな、くろあ！？

ここまで来ると本当になにがなんだかわからなくなってきた。

くろあ：あぁ、そうだよ！僕はむらぁが好きだよ！
だから僕は混乱しすぎてキーボードをよくわからないが適当に押していた。

きら☆：うおおぉ！ついにくろあが白状しやがったぜ！！
ムロウ：ふっ、やはりむらぁだったか。まぁ当然だな。
マジック：なんだよ、むらぁだったのかよ。よかったな参謀。
てる：おぃくろあお前、そんな感じで言っていいのかよ。。
くろあ：いや、その・・・。

皆の発言を見た時にやっと僕は事の大事さがわかったのだがもう引き返せないところまで来ていた

ムロウ：これからのくろあとむらぁの展開が楽しみだな！なぁ奈々？
奈々：そ、そうだね・・・。でもくろあは本当にむらぁちゃんの事が好きなの・・・？
くろあ：えっと、だから・・・
ムロウ：好きなんだよな！？好きだからこそお前はちゃんと俺達の前で発言したんだしな。

なぜかムロウの押しがいつにもまして強かった。

きら☆：まぁ確かにむらぁとあそこまで楽しく話してるしなwくろあとむらぁが会話してた時ってなんか二人の世界みたいでフィールドはってたような感じだったしなww
奈々：そうなんだ・・・。やっぱりくろあは奈々ちゃんのこと・・・。

てる：なんか凄いことになってきたぞ。くろあいいのか？
くろあ：あぁ、もう引き返せないよ。。
ムロウ：そうさ、もう引き返すことなどできないぞくろあ！さてくろあの発表も終わったしそれではこれからのことを考えるか！
マジック：これからのこと？
てる：というよりこれって男子だけの話じゃなかったのかよ・・・。
きら☆：気にするなwこれからが楽しくなるところじゃないかw

奈々：あ、ごめんそろそろ私落ちるね。
ムロウ：お、そうか？今日は早いな。
奈々：ちょっと用事があるんだよ～。それじゃあね～
くろあ：お疲れさま。またねw
てる：お疲れ～。
マジック：またなw
管理人：奈々さんが退室しました

これまたタイミングが良いのか悪いのかわからないが奈々が退室をしていった。

てる：気のせいか奈々なんだか元気なかったことないか？
くろあ：そうだね、最初は普通のように感じだけど後から少し調子悪くなったような・・・。
ムロウ：そうか？まぁ奈々のことは俺に任せておけ！それよりこれからまたログ消していくようにしろよ！また男達の会話が始まるからな！
マジック：まだやるのかよw俺もさすがに疲れてきたぞ。。
きら☆：意外とムロウがテンション高くなってるからなw
ムロウ：もう俺を止められるやつなどいないぜwそれよりさぁどうする！
てる：どうするってなにをさ？

ムロウ：それぞれ好きなやつにどうアプローチするかに決まってるじゃないか！
くろあ：アプローチって別に今までのままでいいじゃないか。
ムロウ：なにを言うか！！ここまで皆それぞれ好きなやつがいるのだぞ！まぁマジックを除いてだが。これはもう告白までいくしかないじゃないか！！
きら☆：確かにそうだな！ちなみに俺はいつでももこたんに告白する準備はできているぜ！！
マジック：お前の思いはもうわかったからwそれにしても急な展開過ぎないか？告白とか。。
ムロウ：恋は急なんだ！俺は奈々に自分の思いを聞いてほしいがなw疾風にくろあもそうだろう？
てる：俺は別にこのままでいいと思うけどな。
くろあ：僕もだよ。もし嫌な結果になったら今の関係が壊れてしまうかもしれないだろ？だったら今のままでいいじゃないか。

僕は今の関係を壊したくなんてなかった。
それにいつまでも皆で仲良くチャットをしていきたいそれだけなんだから。

ムロウ：確かにくろあの言うことは間違っていない。だがな、今の俺達は次の段階へ行く必要があると思うのだよ！！
てる：次の段階・・・？
ムロウ：あぁ、そうだ。俺達がこれ以上仲を深めるためにも次の段階へと進む必要があると俺は考える！だからこういう経験は必要なのだよ！！
くろあ：なんか無理やりなような気がするんだけど・・・。
きら☆：ふっ、ムロウお前の気持ち確かに俺には届いたぜ！行こう、次の段階へ！！
ムロウ：わかってくれたか、きら！いや、親友よ！そうだ俺達は進

むんだ！
マジック：なんかふたりでわかりあってるな。
ムロウ：何を言っているお前たちも一緒に進むんだぞ！行くぞお前ら！

なんか勝手に僕たちも進むことになってしまった。
こうなったらこいつはもう誰にも止められないだろうな・・・。
ここは一旦退却するしかないか・・・。

くろあ：ごめん、そろそろ時間だから落ちるよ。
てる：お、いつの間にこんな時間に。。
マジック：俺もそろそろ落ちようかな
ムロウ：わかってるな、お前ら！また夜も来いよ！早速行動を開始するぞ！
きら☆：任せとけ！！
くろあ：あはは・・・。気が向いたら来るよ。それじゃw
管理人：くろあさんが退室しました。

なんとか僕はこの場から逃げるように退室をした。
ある意味この時間のチャットは辛かったな・・・。
それにしても退室する間際にムロウが「行動を開始する」とかどうとか言っていたけどどうするつもりだろうか。少し気になるな・・・。

次の日。

僕は結局昨日の夜はアイコンチャットに行かないでいた。
さすがに昨日のムロウはやばかったので1日空けてから行くように考えたからだ。
ムロウが正常に戻っていてくれたらいいんだけど・・・。

アイコンチャットに行ってみるとムロウの名前はなく、マジックとりんごだけが居た。

管理人：くろあさんが入室しました。

くろあ：こん～
りんご：あ、くろあだw
マジック：おいっすw
くろあ：夜なのにいつもより居ないね。
りんご：そうなんだよね。皆どうしたんだろ？

昨日はあれだけ男達が集まったというのに今日は僕を入れてたったの3人だけだ。
そんなことを思っているとマジックから秘密チャットの誘いがあった。
僕はそれを承諾するとりんごには内緒で秘密チャットが始まった。

くろあ：どうしたのマジック？秘密チャットなんて珍しいね。。
マジック：あぁ、急にすまないな。ちょっとお前に話があってな。
くろあ：話って？
マジック：ムロウときらのことなんだが・・・
くろあ：あのふたりがどうしたんだ？
マジック：どうやらあのふたりが奈々ともこに告白したらしいぞw
くろあ：え、マジで・・・。
マジック：マジだぜwてるが言ってたから間違いない！

ムロウときらが告白したのか・・・。
きらはいつものことだからどうでもいいけどムロウは奈々に・・・。
一体どうなったんだろう。

くろあ：それでどうなったんだ？
マジック：きらはお前が考えていることと同じでいつも通りもこに流されたさ。
くろあ：やっぱりなwでも少しはもこに伝わったんじゃないかな？
真剣にきらが言ってればの話なんだけどな。
マジック：それはどうだろうなwそれでムロウのことなんだけどさ、どうやらあいつ奈々にフられたらしい。
くろあ：えっ、フられたのか？
マジック：あぁ。しかも奈々のムロウに対するフったときの台詞が「好きな人がいる」っていわれたらしい。しかもその好きな人がこのチャットに居るんだとよ。それでムロウは奈々に誰か聞いたんだけどどうやら奈々は教えなかったっぽいぞ。まぁそんなことがあって今相当ムロウはショック受けてるらしいぞ。

そりゃショックだろうな。好きな人にフられたら・・・。でも奈々に好きな人がいたのか。それに対してもびっくりだな。

マジック：さすがの奈々もこんなことがあったからここに来づらいんだろうな。。きらともこはしらんが・・・。
くろあ：そうだろうね。ところでてるは今日はもう来ないのか？
マジック：さっきまでは普通に昨日のことについて喋ってたさwだけどどうやらきらに「次はお前の番だ！」とか言われて警戒しているっぽいぞ。
くろあ：なるほど・・・。てるも大変だね。
マジック：だな。まぁくろあも気をつけろよ。きらはたぶんお前に

も言うだろうからなw
くろあ：うん、気をつけるよ。
巻き添えはごめんだけどやっぱり皆とはいつも通り喋りたい。だから皆来てくれるといいんだけど。

りんご：ねぇねぇふたりとも居るの？？
くろあ：あ、ごめん居るよ。
マジック：おっと、俺も居るぞw
りんご：ふたりとも何してたのよー！私ふたりにずっと呼びかけてたんだよ！私独り言してたみたいじゃんw

ずっとマジックと秘密チャットで喋ってたからこっちの通常チャットのことをすっかり忘れていた。
過去ログを見てみると本当にりんごは僕たちを呼びかけていたようだ。しかもずっと・・・。

くろあ：ほんとごめんって！ちょっとボーっとしてて・・・。。
マジック：俺は用事しててな。すまんなw
りんご：全く・・・。ふたりともしっかりしてよねw

この後いつものように適当な話題を振りながら喋っていたがしばらくしても誰も来なかった。そして僕たちは人数も少ないのでいつもより早く流れで落ちていった。

次の日もアイコンチャットに行ったのだけど今日は誰も居なかった。とりあえず僕は入室して誰か来ないか待ってみることにした。

そしてしばらくしてるとひとり入室者が現れた。

管理人：奈々さんが入室しました。

それは奈々だった。奈々はムロウと色々あってしばらく顔は見せないと思っていたが意外なことにチャットに現れた。

くろあ：こん～

奈々：こんw

くろあ：気のせいかなんか久しぶりにな気がするねw

奈々：うん。確かくろあとは2日はあってなかったよねw

くろあ：そういえばそうだねw

その2日の間に色々あったから会わなかったのは無理もなかったな。

奈々：それにしても今日は全然人居ないねw

くろあ：そうだね。僕もここでしばらく待っても全然人来なかったから焦ったよw

奈々：あははw大変だったねwでも、こうやってくろあとふたりで話すことって久しぶりだね。

くろあ：あ、そうだっけ。

奈々：そうだよ～w

確かにそうだ。奈々とふたりきりで話すのはあの1年ちょっと前の事件以来だ。

だけどあれは僕にとっても黒歴史みたいなものなので思い出したくなかった。

奈々：ねぇくろあ。もしかしてくろあって最近ここであった出来事

しってる？
くろあ：出来事？
奈々：うん。私にとっては大きな出来事かなw
出来事。たぶん僕が今思っていることなんだろう。
ここ最近で起きたこととといえばそれしかない。

くろあ：まぁムロウ達のことなのかな？
奈々：やっぱり知ってたんだぁ。。くろあはこのことについてどこまで知ってるの？
くろあ：だいたいは知ってるつもりだけど・・・。ムロウが奈々に振られたこととか。。
奈々：あはは～そこまで知ってるんだぁ・・・。
くろあ：一応ねwマジックから教えてもらったからね。。
奈々：そっかぁ。ねぇ、くろあ。私って本当にムロウのこと振ってよかったのかな？
くろあ：え、どういうこと？
奈々：だって私のせいでムロウが傷ついたのかもしれないんだし・・・。

確かにムロウは奈々に振られて相当落ち込んでいるんだろうな。

くろあ：だけど、奈々には好きな人がいるんでしょ？だったら僕は別に奈々が振ったこと間違ってないと思うよ。それにそんな中途半端な気持ちで付き合ったとしてもうまくいかないと思うし。
奈々：え、くろあ私に好きな人が居ることも知ってるの？
くろあ：え、え～っとそれは～・・・。まぁそれもマジックから教えてもらってさ。。
奈々：そっか。振ったところおもいっきりマジックに見られてたんだねw

くろあ：そういうことになるね・・・。
奈々：でもくろあにそう言ってもらえるとなんだか少し落ち着いたよw私間違ってなかったってことに。
くろあ：奈々は間違ってないよwそれに僕だってそういう立場にあったら奈々と同じように答えるしw
奈々：そうだよね～。。くろあも好きな人居るんだよねwむらぁちゃんがw
くろあ：ちょっ・・・！違うよ！あの時は頭に血がのぼっててやけくそでそう言っただけで・・・。
奈々：照れるな照れるなw
なんかちょっと自分で地雷踏んだような気がする・・・。
くろあ：照れてるわけじゃないんだけどな・・・。
奈々：あははwいじけない、いじけないw

微妙な勘違いをされているようだが少しは奈々はいつもの奈々に戻ったようだ。
この後も僕は奈々にいじられたりしながら会話をしていたが会話の途中意外な人物が入室してきた
管理人：ムロウさんが入室しました。
それはムロウだった。奈々が居るというのにまさかのムロウが来た。
ムロウはショックから立ち直れたのだろうか？
くろあ：やぁ、ムロウ。
ムロウ：久しぶりだな。くろあ、奈々。

奈々：うん、久しぶりだね・・・。

いつもはテンションの高い二人でもこの時だけはさすがに静かだった。

というより変な空気が流れていた。

しばらくすると、ムロウが発言をした。

ムロウ：なぁ、奈々ひとつ聞いていいか？

奈々：なにかな？

ムロウ：奈々が言った好きな人についてなんだが。

奈々：うん。

ムロウはこの空気の中まさかこんな事を奈々に聞くとは思いもしなかった。

ムロウ：もしかして奈々の好きな人ってくろあなのか？

くろあ：は？

突然のムロウの発言に僕は度肝を抜いた。

というより奈々が僕のことを好きってありえないだろ。

くろあ：何言ってるんだよなんで奈々が僕のことを・・・

ムロウ：お前は黙っとけ。俺は奈々に聞いてるんだ。

文字からでも伝わるムロウの雰囲気が僕に伝わった。

今ここにいるムロウがいつものあのテンションの高いムロウには思えない・・・。

ムロウ：奈々どうなんだ？正直に答えてくれ。

閲覧数字の方に目を向けてみるといつの間にか閲覧者は7人にも増えていた。
たぶんいつものメンバーがここを覗いているのだろう。それに関係ない人も展開が楽しみで見ているのだろう。

奈々：そうだよ。私の好きな人はくろあだよ。

そしてログのほうに目を戻すと衝撃的な発言が更新されていた。
この時僕は半端ないほど驚きが強かった。

ムロウ：やっぱりか・・・。
奈々：うん、だからごめんね。ムロウ・・・。
くろあ：えっ、ちょっと。ふたりとも・・・。

なにを自分が言えばわからなくて凄く戸惑っていた。

ムロウ：そうかそうか・・・。それじゃあ俺もここに居る意味はないな・・・。
くろあ：何言ってるんだよ、ムロウ！
管理人：ムロウさんが退室しました。

僕の話を聞かずにムロウはそそくさと退室していってしまった。
そして僕はまた奈々とふたりになってしまった。
それもムロウが来る前の空気とは全然違っていた。

奈々：ねぇくろあ今さっきのことなんだけど・・・。
くろあ：うん、何？

奈々：今さっき私が言ったことは本当のことだから。
くろあ：え？
奈々：私はくろあの事が好き。ずっと前から好きだったよ・・・
僕はパソコンの画面を見つめたまま固まってしまった。
まさか本当に僕のことが好きだったなんて。
しかもずっとって・・・。

奈々：えっと私が言いたいのはそれだけだから！！それじゃ！
くろあ：え、ちょっと待って！！
管理人：奈々さんが退室しました。

奈々までもが逃げていくように退室していってしまった。
そしてついに僕ひとりとなってしまった。

この後僕はただ呆然としているのだった・・・。

意外

あれからどれくらい経っただろうか・・・。

僕は奈々が退室してからもずっとひとりチャットに居た。
そしてずっとひとりで考えていた。

奈々に好きといわれたこと・・・。
それは素直に嬉しいことなのに僕も奈々のこと好きだったはずなのに・・・。
答えが出ないでいた。

なぜかというともうひとりの女の子「むらぁ」の事を考えているからだ。
あいつは親友だけれどもなぜか奈々に好きと言われた時からあいつのことを考えてしまっている。
もしかして、僕はあいつのこと本当に好きになったんじゃ・・・。

いや、それはないよなぁ・・・。
だってあの「むらぁ」だし。

僕はこんなことをずっと考えていた。
本当に僕はどれくらい考えていたんだろう・・・。

そして少しだけ落ち着いてきた頃、僕にとって衝撃的な事が起きた。
管理人：田村さんが入室しました。
なんだろう、こんな疲れている時に凄い懐かしい名前を見たな・・・。

田村：いいいいいいいいいいいいいいいいややややややややぁあぁぁぁっほほほおおおぉぉぉぉっ！！！
お、、、俺俺俺久しぶりのぉぉぉぉぉぉ、登場ーーーーーーーーーーーー！！！！！！！

一瞬またパソコンの画面を見つめたまま固まってしまったが僕は我に帰ってひとり納得した。
どうやら僕の知ってるアイツのようだった。
というかなんでこいつはこんな時に来るんだよ・・・。

田村：ひひひいひひささささしぶりだなぁぁぁぁぁぁぁ！くぅぅぅろぉぉぉあぁぁぁ！！
くろあ：僕のこと覚えてたのかよ・・・。というか落ち着けよ・・・。それにまだ荒らししてたのか、お前・・・？
田村：うむ、なら落ち着いて話をしようじゃないかぁぁっ！！

意外とすんなり落ち着いてくれた。微妙なところはまだあるけど・・・。

田村：それにしても侵害だなぁあぁ！俺がまだ荒らしを続けていると思ったのかぁぁぁ！？？？

くろあ：いや、明らかにそういう雰囲気が出てるし・・・。

田村：ふっ！そんな幼稚なことはやめたさぁぁっ！！！！

くろあ：そうなんだ・・・。それは良かったな。

田村：うむ。それよりくろあよ！！！今さっきはなんだ！！！

くろあ：今さっき？

田村：ムロウや奈々と喋っている時に決まっているだろろうろるおっおｔｋｊごあ！！

くろあ：お前そんな時から居たのかよ！？あれからだいぶ時間経ってるぞ！？

田村：そんなことはどうでもいいぃぃぃ！！俺が見込んだくろあはあんなチキン野郎じゃねぇぇぇえぞぞおぞぞおおおお！！！

くろあ：いや、勝手にお前に見込まれていても困るし・・・。

それにこいついつから見込んでいたんだよ。

田村：うるるっるるるさあささい！！！くろあなぜあの時少しでも強く発言しようとしなかったんだぁぁぁあ！！？

くろあ：ッ・・・！！

確かに僕はただ戸惑っていたのを理由にしているだけかもしれない。それにいつも僕はああいう雰囲気の時はなにもできないでいる・・・。

あの奈々との事件の時もそうだ。何も言えずに逃げ出してた。

今回も一緒じゃないのか・・・？あの時少しでも強く言っていたら

もしかしたらムロウだって止められてあの場の状況をマシにできていて問題も解決していたかもしれない。

田村：ふんっ・・・！少しは分かったようだなぁぁ。

結局僕は何もできなかったんだ・・・。

くろあ：あぁ。分かってるよ・・・。

田村：わかったんなら自分を恥じるがいいぃぃっっ！！！

くろあ：なぁ、田村。僕はこれから何をすればいい？

相手があの田村だということは分かっている。こんな奴だけど僕はなぜかこの時質問していた。

田村：それは自分で考えることだなぁあぁぁあ！！？？

やっぱり質問した相手を間違えたかな・・・。

田村：ただ今回の問題は貴様だけの問題ではないことはわかっているはずだぁぁぁ！！このアイコンチャット全体の問題だぁぁぁぁ！それだけは言っといてやろう・・・っっっ。

アイコンチャット全体の問題。確かにそうだ。

これは僕だけの問題ではない。

くろあ：そうだよな。はは、ありがとな田村wまさかお前に感謝するとはね・・・・。

田村：俺を崇めろろろろろぉぉぉ！！俺は神なのだぁぁぁ！！

相変わらず変な奴だけどこいつのおかげで少しはマシに考えること

ができたのは事実だった。

田村：それでははは俺はそろそろ行くぞ！！！俺はこの後の展開は天国で見守っていてやるよぉぉぉぉ！！

くろあ：いや別にお前死んでるわけじゃないだろ・・・。

田村：それではなっっ！！！！

管理人：田村さんが退室しました。

嵐のように田村は去っていった。

田村が居なくなった後は本当に静かだった。

この後僕は少しだけ考え事をしてからアイコンチャットを退室した

思想

あれからアイコンチャットでの問題をどうしたらいいか考えていたのだが僕はまだ答えが出ないでいた

そして僕は少しだけ心を落ち着けるために今日はアイコンチャットにはいかずにタウンに居た。
というよりアイコンチャットに行っても誰も居ない・・・。

タウンにはいつものメンバーが居た。
タウンは今のアイコンチャットとは違い楽しく会話をすることができた。
こうやって楽しく会話をするのが久しぶりなようにも感じた。

しばらくするとここでタウンに意外な人物が現れた。
現在の入室者のところに目を向けてみるとそこには「キキ」の名前があった。
キキといえば元気な子でそして僕が振った子でもある。
そして気づけば僕に一通のメールが届いていた。
それを開けてみるとメールの送り主はキキだった

「くろあ、久しぶりw元気にしてた?」

読んでみるとたったそれだけのことだった。
とりあえず僕はメールを返信することにした。

「本当に久しぶりだねw約2年ぶりになるのかな?僕は元気だった

よw相変わらずタウンもしてるしね」

そういえばもう2年も経つのかとも思いつつ僕は返信メールを送った。

送った後すぐにメールが帰ってきて僕は再び開けて読んでみた。

「2年かぁ、そんなに経つんだねwそれにしてもくろあが元気そうでなによりだよ。今日はくろあが居るうちにこれてよかったよw」

本当にタイミングがいいなと思いながら僕はキキとのメールを続けた。

「僕も久しぶりにキキと会えてよかったよwキキはタウンまた始めるの？」

「うん、久しぶりに始めようと思って再登録してみたw」

「そうかぁ。それじゃあまた一緒に話せるねw」

「うんwこれからもまたよろしくねw」

どうやらキキはタウンを再開するようだった。

だけど僕はキキに聞いてみたいこと・・・聞かないといけないことがあった。

「ねぇ、キキひとつ聞いていいかな？」

「ん、何？」

「キキが前タウン辞めちゃったのって僕のせいなのかな？」

「え、急にどうしたの・・・w」

「だって僕がキキに告白されて振った後から急に来なくなっちゃたじゃないか。だからあれってやっぱり僕のせいだよね？」

僕がキキを振った後キキは毎日アイコンチャットやタウンに来てい

たのに一切来なくなった。どう考えても僕が関わっているに違いない。

「何言ってるのw確かにくろあに振られたあの時凄いショックだったのは覚えてるけど別にそれとは関係していないよw私が来なかっただけだよw」
「でも！多少なりとも僕は君を傷つけちゃったんだよね！？」
「だから私は全然大丈夫だってwそれにこうやってタウンをまた始められたからいいじゃないw」

キキはどうやら全然気にしていないようだった。

「そうなのか・・・。だったら僕も気にしないけど・・・」
「うんうんwそれよりなんで私がくろあのこと好きになったか覚えてる？」

キキが僕を好きになったきっかけか・・・。
正直全然覚えていない・・・。そういうメールは来たの覚えているけどさすがに2年前のことは・・・。
メールも残ってないし・・・。

「ごめん、覚えてないよ」
「そうか～やっぱりねw私がねくろあを好きになった理由は優しいからだよwでもその優しいはただ優しいってわけじゃないんだよねw言い方難しいけどくろあはいつも私を楽しくさせてくれたのw」

僕がキキを楽しくしていた？
そうだったかな？
そんなことを考えていると続けてもう一通メールが来た。

「それに他の人もくろあのこと大好きなはずだよw」
「いや、それはないだろw」
さすがにキキが言っていることは冗談だろう・・・。
「そう思っているのはくろあだけだと思うよwはぁ・・・やっぱりライバルは多いなw」
「あの、ちょっと言ってる意味がわからないんだけど・・・」
キキの言ってる意味が僕には全然通じてこなかった。
「全くくろあは鈍いんだからw」
「いや、そう言われても・・・」
「でもね、くろあは自分を一回見直したほうがいいかもw」
「見直す？」
「うん。そうだよwそうしたら考えがまとまるかもねw」
「えっと、もしかしてキキってここ最近アイコンチャットで起きたこと知ってるの？」
「うんwだって過去ログ残ってるものw」
しまった・・・。あの時凄い戸惑ってたから過去ログ消すの忘れてた・・・。
あとで全てクリアしておかないとな。
「そうかwありがとう教えてくれてw」
「いえいえwだからくろあ色々と大変だけどがんばってねw」
「あぁじっくりと考えて自分を見直してみるよw」
「うんwそれに今回は私出る幕なさそうだな・・・」
「え、出る幕？」

「ううん。なんでもないwそれじゃあ今日は私落ちるねwまた明日から来るから相談したいこととかあったら頼ってねw」
「頼りにしてるよw」
「任せて！それじゃあねw」

そう言うとキキとのメールが終わりキキは退室していった。

それにしてもまたキキとこのようにメールができるようになるなんて思いもしなかったな。
やっぱり嬉しいことだ。

それにまさかキキにも今回のアイコンチャットの事件について言われるとはな。
キキに言われたとおり一回自分を見直してみよう・・・。

だけどとりあえず今はアイコンチャットの過去ログを消しにいこう。

信頼

アイコンチャットに過去ログを消しに久しぶりに僕はアイコンチャットに入室をした。
確かに過去ログは残っていて閲覧側からも覗き放題だった・・・。
それにしても過去ログがこれだけ残っているということはいつものメンバーもしばらくはここに来ていないということがわかる。

早速は僕は過去ログを消すために全てクリアをしていた。
過去ログは一応消せることができるのだがそれは自分が発言したところだけだ。
そのため奈々やムロウが喋っていたところだけは残ってしまう・・・。

どうやら皆も消すことを忘れているのだろう。
あの時は本当に色々とやばかったからな。

とりあえず僕は自分のところだけはクリアすることができて誰もいないチャット部屋で落ち着いていた
だが僕が落ち着いているところにまたしても僕を驚かせる入室者がきた。

管理人：とりでさんが入室しました。

僕はこの名前が見た時驚きが半端なくてまたパソコンの画面を見たまま固まってしまった。
最近こんなことが多いような気がするが・・・。

とりで：ひっさしぶり～くろあw

どうやら僕が知っているあのとりでのようだった。

くろあ：え、ちょ、ちょっとなんでここにとりでが！？
とりで：なんでって言われてもここチャットだし誰が来てもおかしくないだろw
くろあ：それはわかってるけど、でもとりで2年前に会ってそれ以来全く来なかったじゃん！
とりで：あ～正直言うとあの春休み終わってからは自分からチャット行かなくなったんだ。なんかやっててチャット合わないかもって思ってなw

そうだったのか。とりでにはチャットが合わなかったのか・・・。

とりで：でも楽しくなかったってわけじゃないよwくろあや他の人たちと喋ってる時とかも普通に楽しかったしw
くろあ：そう言ってもらえるとこっちも嬉しいよw
とりで：それとチャットは来なくなったけどさこのサイトの掲示板に結構居るんだよねw基本そっちに居るからチャットには来なくなったのもあるけどねwあとたま～にチャット閲覧してるときもあるよw
くろあ：へぇ、そうなのか・・・。

じゃあもしかしたらとりではこの前のアイコンチャットで起こったこと知ってるのかも

くろあ：とりでってまさかこの前アイコンチャットで起きたこと知ってる？

とりで：ははw知ってるさアレだろ？丁度閲覧してたからなw

やっぱりとりではここであったことを知っていた。

くろあ：閲覧してたのかw

とりで：なんか申し訳ないなw

くろあ：いや、いいんだけど・・・。

とりで：それにしてもまさか奈々がくろあのことをなぁ・・・。

くろあ：僕もびっくりだよ・・・。

本当に奈々が僕のことを好きだったなんて今でも信じられない。

とりで：それでくろあどうするの？

くろあ：どうするのって？

とりで：奈々に返事だよw告白されたなら返事は返さないといけないだろw

返事か・・・。そうだよな返さないといけないんだよな・・・。

とりで：もしかして迷ってんの？

くろあ：うん・・・。正直ね・・・。

とりで：そうかぁ。。でもなんで迷ってるんだ？

くろあ：それは言えないけど・・・、でも凄く迷うことなんだよ・・・。

さすがにむらぁのことを考えていて返事に困ってるとは言えない

とりで：まぁ大切なことだからな・・・。時間をかけて考えるがいいよwでも時間のかけすぎには注意だよw

くろあ：あぁそうするよ。。

とりで：まぁくろあは駄目でもなんとかするってのがくろあらしいんだけどねw

くろあ：え、どういうことだw

とりで：だってくろあはどんな事件でもなんとかしてきたじゃんw

2年前に誰かに告白されたときもそうだったし奈々との騒動の時も大丈夫だったじゃないかwきっと今回もなんとかなるさw

くろあ：ちょっと待てよ、とりでなんでそんなことまで知ってるんだよ！？

とりで：だって閲覧してたしw

とりでは2年も閲覧してたのか・・・。しかも結構な確率で・・・。入室してくれたらよかったのにと思ってしまった。

とりで：だからくろあ、今回もがんばって！君ならできる気がする！

くろあ：そうはしたいんだけど・・・。できるかな？

とりで：うん！友達の俺が言ってるから間違いないさ！

そういえばとりでと初めて会ったときは不思議とこいつとすぐに仲良くなれたんだよな。

くろあ：ありがとうwなんかとりでに言われるとできる気がしてきたよw

とりで：いやいやwさて、なんとかくろあを励ますことができたし俺はそろそろ落ちるよw

くろあ：とりではこれからはここに来たりは・・・？

とりで：どうかなw俺はチャットより掲示板が合ってるからねw
もこの騒動がおさまった後なら来てもいいかなw
くろあ：あぁじゃあ必ず終わらせてみせるよ！だからその時には・・・

とりで：うん！約束だ！任せたよ、くろあw
くろあ：わかってるよw
とりで：それじゃあねw
管理人：くろあさんが退室しました。

今度はとりでに励まされた。
そしてとりでと約束をした。
必ずこのアイコンチャットでの騒動を終わらせるということを。

こんな騒動絶対に終わらせなきゃな！

仲間

まだあまり考えはまとまってはないけど田村、キキ、とりでに励まされて少しずつだが自分がなにをすればいいのかが見えてきた。

だけどやっぱりなぜ奈々が僕のことを好きになったのかがわからないでいた。

そして今日も僕はアイコンチャットには行かずにタウンに居た。タウンに行くといつもよりも人数が多く久しぶりに人物も居た。

くろあ：マリさんとろすけさん久しぶりですねw
マリ：お久しぶりですw
ろすけ：皆さんお久しぶりです。

そこにはマリさんにろすけさんが居た。本当に久しぶりだ。

タモリ：それにしても今日は人が多いなw
めぐ：そうですねw
キキ：活気があるからいいじゃないw
咲月：確かにねw

よく考えたらこんなに人が居るのは久しぶりだ。
でも昔のタウンの人の少なさよりはマシだった。

くろあ：タウンにきて結構経つな～。。
タモリ：そうだなwもう2年半ぐらい経つんだぜw
くろあ：早いもんだねw

めぐ：あの時は人が少なかったですからね～・・・
ろすけ：今じゃ考えられないですね。
ファイナルアサシン：そういえば結構前にタウンが使えなくなった時は焦ったよなw
マリ：そんなことありましたねwあれはびっくりしちゃいましたよ～。。
はちみつ：あの時は危なかったね～。でもほんと直ってよかったw
くろあ：そうだね・・・w
あのタウンが使えなくなった時、一生使えなくなるんじゃないかと思ってたからな・・・。
あるふぁ：あの時はすいませんでした！！

皆であの時の事を話していると懐かしい名前というよりタウンの管理人のあるふぁさんが入室してかた

くろあ：あるふぁさんw
タモリ：凄い久しぶりですねww
めぐ：お久しぶりですw
いちご：初めまして、管理人さん！
はちみつ：初めましてですw
あるふぁ：私を知っている方はお久しぶりです。初めて見るという方は初めましてw管理人のあるふぁですw皆さんがあの時のことをちょうど話していたので入室してきちゃいましたw本当にあのときはすいませんでした。。
ろすけ：いえいえwあるふぁさんのせいじゃないですから誤らなくても大丈夫ですよw
ファイナルアサシン：だなwそれにちゃんと直してもらったしw

くろあ：逆に感謝しないといけないぐらいですねw

あれだけのことをしてもらったんだから本当にあるふぁさんに感謝しないとな。
僕たちはなにもできなかったわけだし・・・。

あるふぁ：そう言ってもらえると助かりますwそれより皆さんいつもタウンをお使いいただいてありがとうございますw
キキ：こちらこそ使わせてもらってありがとうですよw
タモリ：タウンは俺達の居場所ですしw
りょっち：タウン最高～w
あるふぁ：まさかここまでタウンを愛してもらえるなんて管理人の私は思ってもみませんでしたwそれにサイト全体も活気あふれるようになって嬉しい限りですw
くろあ：確かにサイトも凄くアクセス数増えてますよねw
タモリ：いい事だなw
あるふぁ：はいwというわけでこれからもタウンもといこのサイトのことよろしくお願いしますw
ファイナルアサシン：任せてくださいw
ろすけ：よろしくお願いしますね～

あるふぁさんはそう言うと退室をしていった。

めぐ：いきなりですけど私皆と出会えてよかったですw
りょっち：いきなりだねw
めぐ：いや～あるふぁさんがタウンのこととかまとめて言ってくれてたから私も言おうかなと思いまして
いちご：でも確かにそうだねw私もここで皆と出会えてよかったよw
ろすけ：ほんとですねw
マリ：私は来る数が減ってきてるけど皆と話すのは好きですよw

タモリ：俺はこの先もずっとここに居たいと思ってるぐらいだからなw
ファイナルアサシン：ここまではまったサイトはなかなかないぞw
はちみつ：私もwそれにパソコン自体全然しなかったものw
咲月：ネットでまさか友達ができると思ってなかったしねw
キキ：私もまたタウンはじめて良かったですw

皆がタウンへの思いをひとりひとり言っていた。
タウンがなければこんな出会いは絶対になかっただろう。

くろあ：僕も皆に出会えてよかった。それとタウンを始めてよかったよw

心から僕はそう思っていた。

めぐ：それじゃあ皆思っていることは同じということですねw
タモリ：そのようだなw
はちみつ：それじゃあこれからも皆よろしくお願いしますねw
キキ：よろしくですw
咲月：うん、よろしくね皆w
ファイナルアサシン：俺達は別れの時が来るまでずっと一緒だぜw
マリ：そうですね！約束ですw
ろすけ：皆さんよろしくですw
いちご：これからもずっとよろしくw
りょっち：よろしくね～

タウンでは様々な事があった。
そのひとつひとつが僕にとっては良い思い出となっている。

くろあ：あぁ、皆これからもよろしくね！

タウンは僕の最高の居場所。

そしてもうひとつの最高の居場所・・・アイコンチャット。
絶対にあの場所を失うわけにはいかない。

オフ会

今日も相変わらず暑かった。
気づけば夏休みが始まり１５日ほど経とうとしていた。
なんとかアイコンチャットをいつものように皆が楽しく喋れるチャット場所に戻したいという気持ちはあるのだけれどなかなか何をすればいいのかが思いつかないで居た。

そんな時ベッドで寝ていると携帯電話が鳴り出した。
どうやら電話のようだ。
僕は携帯電話を開くとりんごの名前が表示されていた。

「もしもし」
「お～やっと出たね、くろあ」
「あぁ。それより久しぶりだね」
「そうだね～。アイコンチャットで話して以来だったっけ？」
「そういえばそうだね。でもどうしたんだよ珍しく電話でなんて？」
基本りんごとは学校で会うので緊急の時意外はあまり電話とかはしない。
それにチャットがあるので携帯で連絡することはなかった。
「ん～くろあもわかってると思うけど今のアイコンチャット行きづらいじゃない？それで電話したわけだよ」
確かに今のアイコンチャットは行きづらい・・・。いつものメンバ

ーが全然アイコンチャットに現れないくらいだからな・・・。
それにその原因に僕も深く関わってるし。

「まぁそうだね・・・。で、なんで電話してきたの？」
「んー直球に言うけど、オフ会するよ！！」
「え、オフ会・・・？」

オフ会。だいぶ前にもチャットでオフ会の話題は出た。皆でいつかは集まろうという感じで。
でもまさかまたここでオフ会の話が出てくるとは。しかもこのタイミングで・・・。

「そうだよ、オフ会！皆で集まるんだよ！夏休みだから皆暇してるだろうしね」
「ちょ、ちょっと待てよ。なんでこんなときにオフ会するんだよ！？」
「ん～やっぱり今だから？」
「おかしいだろ！今だからって、おかしすぎるよ！それにお前今アイコンチャットで起きてること知ってるだろ？」
「知ってるよ。だから皆に仲直りみたいな感じをしてもらおうと思ってオフ会開こうと思ったの」

なんだろうりんごが言ってることはなにかずれている気がする・・・。

「でも、もしやるとしても誰も来ないと思うけど・・・。」
「大丈夫！私が必ず誘い出してみせるから！」

この自信は一体どこから来るんだろう・・・。

「それで、くろあはもちろんオフ会参加するよね！？」

どうやらりんごはオフ会開く気まんまんらしい。
僕はオフ会に参加するか凄く迷っていた。この状況の中オフ会に行ってどうすればいいのか・・・。
何を話したらいいのだろうかなど・・・。

「参加するよね！？」

考えている間りんごはずっと僕に問いかけていた。

でも確かにアイコンチャットはこのままじゃいけない・・・。
田村やキキ、とりでに励まされたのを無駄にもしたくない。

だったら一歩を踏み出さないと行けないかもしれない。

「わかった。参加するよ・・・」
「よーしよく言ったくろあ！」
「でも、いつオフ会するんだ？しかも場所とかは・・・」
「う～んじゃあ8月12日の13時からなんてどうかな？」

8月12日といえばちょうど一週間後だ。特に僕はその日予定は入ってなかった。

「僕はいいんだけど、皆の予定聞かないとだめだろ？」
「大丈夫だよ！絶対皆暇してるし～。場所は私が決めるからまたメールでもするよ。あ、それと他の皆には私がメールしておくから」

「あぁ悪いね」
「あ、でもくろあは絶対にむらぁちゃんだけは誘ってね！」
「あ～うん。分かったよ・・・。でもあいつ来るかな？」
「大丈夫！大丈夫！」

ほんとこいつの自信はどこから来ているんだろうか？

「というわけだからメールよろしくね！」
「わかったよ」
「頼んだからね～」

そういうわけで僕がむらぁへとメールをすることになった。
りんごとの電話を終わらせたあと僕は早速むらぁへとメールをすることにした。
むらぁはアイコンチャットにはどういうわけなのか来ないのでメールでの会話が多かった。

「久しぶり。ちょっと話したいんだけどいいかな？」

まずは簡単にメールを送った。
そして１０分ほどするとむらぁからメールがかえってきた。

「どうしたのどうしたの！全然いいよ！くろあからメールって珍しいじゃんw」

むらぁとメールをする時は基本むらぁからメールを送ってくる。
確かに僕からメールすることはあまりないかも・・・。

「うん。いきなりだけどアイコンチャットのメンバーでオフ会開くことになったんだけどむらぁもどうかなって・・・」

「おぉ、オフ会！もちろん行くよｗ」

予想外にむらぁはあっさりとＯＫの返事を出した。

「え、そんなにあっさりいいのか？」

「だって面白そうじゃんｗオフ会なんて初めてだし、それにくろあの顔見れるんだったら行くに決まってるじゃないｗ」

またこいつは冗談でこんなことを・・・。

「そうか・・・。あ、それと開催日時は８月１２日の１３時からしいよ」

「８月１２日の１３時・・・。全然大丈夫！」

「そ、そうか・・・。まだ場所は決まってないから決まったらまたメールするよ」

「了解！それにしても楽しみだな～」

僕も確かに楽しみなのだが、例の事件のことで凄い心配でもある・・・。

「そうだね。それじゃあまたメールするよ」

「うん、わかったｗそれじゃあね！」

こうしてむらぁとのメールも終わった。

今思うとこうやってむらぁと長々とメールするのは久しぶりだったかもしれない。

それよりも他の皆は本当に来るのだろうか・・・。

正直不安である。それにりんごのあの自身はどこからわいてきていたのだろうか？

とりあえず後はりんごのメールを待つしかない。

こうしてりんご主催のオフ会は開催されることとなった。
オフ会が開催される予告があってからその3日後に再びりんごからメールがあった。
オフ会が開かれる場所は、皆それぞれ住んでる場所が違うので皆が住んでいる場所の平均して一番近い場所で開かれることとなった。
ちなみに参加メンバーはいつものメンバー全員となった。
まさかりんごが本当に全員を誘うとは・・・。
あいつはどうやって皆を誘ったのだろうか。

そしてついにオフ会が開かれる日となった。
僕は緊張しながらもオフ会が開かれる会場の前へと来ていた。
「くろあ何してるの？早く会場入るよ」
「ちょっと、待てよお前緊張とかしてないのかよ」
しかもなにも緊張していなさそうなりんごと共に来ていた。
僕たちは朝待ち合わせをして新幹線などを使ってここまでやってきたのだった。
「だって今さらでしょ？」
「確かに今さらだけどさぁ・・・。でもさぁ・・・」
正直僕は参加すると言ったことを後悔していた。まさかここまで緊張するとは思わなかったからだ。
「さっ、ぐだぐだ言ってる暇あったらさっさと行くよ！」
「お、おぃ引っ張るなよ！」
りんごは僕を無理やりに引っ張っていく感じで会場へと進んでいった。
僕たちは会場に入るとまずは受付に行って名前を言い確認されたら受付の人に部屋を案内された。
その部屋の前まで案内されると襖が閉まっており中からは人の気配がした。

「さてと、入るよ」
「あ、あぁ・・・」
僕が返事をするとりんごは勢いよく襖を開けた。
「こーんにちはー！りんごでーす！」
部屋の中には数えると１０人ほど男女が居て部屋の中に入ってきた僕達に視線が一気に集まった。
りんごは元気に中に居る人たちに挨拶をした。
そして僕はそのりんごの後ろから少し前に出て行き挨拶をした
「ど、どうも。くろあです」
僕たちが挨拶をするとひとりの男性が近づいてきた。
「やぁ、ふたりがくろあにりんごか！」
その男性は僕と同じくらいの身長でいかにも優しそうな顔をしていた。
「そうだけど、君は・・・？」
「俺だよ、てる！」
「えーキミがあのてるなの！？」
どうやらこの男性の正体はてるのようだった。
「ふたりともなんか初めて会う気はしないな！」
「そりゃ毎日チャットしてたからねぇ・・・」

「あはは、それもそうだね」
てるは僕が想像していた通りの人物だった。
というよりてるがアイコンチャットで使ってるアイコンそのまんまのような・・・。

「ねぇ、そんなところで話してないでこっちに来て座ったら！」
僕達が話していると後ろから声がかかった。
「そうだな。りんごにくろあ早く座れよ。お前達が最後だぞ！」
「はーい」
僕とりんごはそれぞれ開いている席を見つけ座った。
ちなみに僕とりんごは結構離れているところに座った。

「あ、くろあ・・・」
僕が座ると横から小さな声が聞こえてきた
横を見てみるとそこには女性が座っていた。外見は僕と同い年ぐらいでぱっちりとした大きな目が印象的でなんていうか美人な人である。
「君は・・・？」
「私、奈々だよ」
「えっ・・・！？」
まさか僕の横に座っている女性が奈々とは思わなかった。

というよりこんなに早く喋ることになるとは・・・。

「あはは、びっくりした？それにしてもくろあってりんごちゃんが言ってたとおり可愛い系なんだね！」

「可愛い系って・・・」

なんだろう、アイコンチャットであんなことがあったというのに奈々は意外と普通だった。

だけど、僕が周りを見てみると微妙な空気が漂っている感じもした。中には喋ってない人たちもいるし・・・。やっぱり奈々だけが特別なのかな？

「どうしたのくろあ？」

「え、いや、なんでもないよ。ただ奈々とこんなに早く喋れるとは思わなかったからびっくりしてるだけだよ」

「ふーん、そっかぁ・・・」

そんな感じで奈々と会話をしていたが少し沈黙してしまった。

やはり奈々は表面だけでは明るくしているだけかもしれない・・・。

「さてと、皆も揃ったことだしそろそろ始めるとするか！」

僕がテーブルにあった水を飲んでいると一人男性が立ち上がって喋りだした

「まずはやっぱり自己紹介だな！ちなみに俺は疾風です！よろしくー」

どうやら男性の正体は疾風のようだった。

それにしても僕より1歳年下というのにあそこまで積極的にできるなんて凄いな・・・。

「それじゃあ俺は自己紹介終わったし、本日オフ会主催者のりんごに自己紹介してもらおうか」

そう言うと疾風はその場に座り次はりんごが自己紹介の番となった

「今更だけど私がりんごです。皆集まってくれてありがとう！今日は楽しもうね！」

さすがりんごだ。緊張などしないですらすらと自己紹介を終わらせた。

そしてここからどんどんと自己紹介がまわっていくのだった。

「てるです。今日は楽しい一日にしていきたいのでよろしくですお願いします！」

てるも何も問題なく自己紹介をしていた。皆緊張していないのかな？

「マジックだ。まさか今日アイコンチャットのメンバー全員が揃うとは思ってもみなかったぞ。とりあえず今日はよろしくな！」

慎重がすらっと高くてしかもイケメンとも言っていい顔立ちの男性はマジックだった。

まさかあそこまでマジックが男前だったなんて・・・。

「もこです。少し緊張していますがその内慣れてくるので気にしないでください」

僕ともこは同い年のはずだけどなぜかもこがずっと年下のように見えた。
というかもこの両隣はりんごと女性がひとり座ってるのだけれどきらとは一緒に座らなかったのかな？

「ムロウだ。よろしく・・・」
「きらで～す。よろしくな・・・」

ムロウときらが連続で短い自己紹介を終わらせた。
というよりふたりとも覇気がなさすぎる・・・。
ムロウはわかるけど、きらはもことなにかあったのだろうか？

ふたりの自己紹介の後は次は女性がひとり立った。
見た感じは結構おしゃれでそれもあり少しだけ大人びた感じがした。
もしかして彼女は・・・。

「むらぁで～す！最近アイコンチャットには行けてなかったけどオフ会に来れてよかったです。今日はおもいっきり楽しく過ごしたいので皆よろしくね！」

やっぱりむらぁだった。しかも僕が予想していた通りの人間像だった。

そしてむらぁが自己紹介が終わり席に座ろうとしたときふとむらぁと目が合ってむらぁは笑っていた。僕はなんとなく恥ずかしくなりサッと目をそらしてしまった。

次に奈々の自己紹介の番が回ってきた。

「奈々です！いい思い出作っていきたいので盛り上がっていきましょー！」

元気に奈々は挨拶をしたがやっぱりどこか無理をしている感じがでていた。
それに奈々のことをずっとムロウは見つめていた

奈々の挨拶が終わりついに僕の番がやってきた

「初めましてっていうのはおかしいかな？え～っとくろあです。今日一日よろしくお願いします」

緊張しながらもなんとか自己紹介をすることができた・・・。

「さて、皆の自己紹介も終わったことだし乾杯といきましょう！」
司会みたいな感じでグラスを持ってりんごが喋り始めた。
りんごが言ったように僕たちはその場にあるグラスを持った。

「それでは皆さんご一緒に乾杯ーー！！」
「「「乾杯ーー！！」」」

こうして微妙な空気の中ながらもオフ会は始まった。
食事などをしている時にまわりを見てみるときらとムロウはふたり

で喋っていた。一体なにを話しているんだろう?今さっきも思ったがやっぱりきらともこはなにかあったんだろうな。
その他の人たちは楽しく食事をしながら会話をしていた。特にりんごは一番盛り上がっていた。

「おーいくろあ楽しくやってるかー?」
「あぁうん。てるこそどうだい?」
「俺も楽しいさ。まさかこんなに皆が集まるとはな」
確かによく皆の都合があったもんだ。というよりもりんごになんて言われて誘われたのだろう?

「奈々も楽しんでるか?」
てるは僕の隣に座っている奈々に話しかけた。
「え、あ・・・私も楽しんでるよ!それに食事もおいしいしね!」
「そうかそうか。今日はまだ長いしもっと盛り上がっていこうぜ!」
「うん!」
「それじゃあ俺はムロウときらのところでも行ってこようかな」
どうやらてるはムロウときらのことを気遣っているらしい。
やっぱりてるはいい奴だな・・・。

それより今さっきからずっと僕は誰か来るたびに少し話して食事をするという繰り返しをしているのだが隣の奈々のことを気にしてしまう。
奈々も誰かが来たら楽しく喋って食事に戻るの繰り返しなのだがや

っぱりいつもと違った。

僕はそんなことを思いながらも少し気分転換をするべく一旦部屋から出ることにした。

「あれ、くろあどこか行くの？」

「あぁちょっとトイレ」

奈々にそう言うと僕は部屋から出て行った。

やっぱり部屋から出ると全然空気が違った。少し僕は会場の中を歩いてみることにした。

そして少し歩いていると反対側から歩いてくるもこを見つけた。

「くろあ何してるの？」

「いや、トイレに行こうと思ってね」

「そっか」

そういえば今ここには僕ともこだけだしちょっときらのことを聞いてみるのもいいかもしれない・・・。

僕は意を決してもこに聞いてみることにした

「ねぇもこ、きらのことなんだけど・・・」

「なに？」

なんだろう今さっき喋ってた時より声のトーンが落ちたような・・・。

「見てる限りきらともこ今日まだ喋ってないような気がしたんだけどどうしたのかなって思ってさ・・」
「そのことね・・・。ちょっときらとアイコンチャットで喧嘩してね」

やっぱりもこときらは喧嘩をしていたようだ。

「だいたいきらはデリカシーないんだよ！それにムロウも！」
「え、ムロウも？」
「そう！あの二人ほんとにどうかしてるよ！！あぁ思い出したくない・・・」

こうやって怒るもこも珍しいな。というよりムロウまで関係してるとは思わなかった。

「そういうことだからちょっと話してないわけなんだよ」
「そうか・・・。もこ大変なんだな。。」
「そういうくろあも今大変でしょ？」
「やっぱりもこも知ってたか・・・」
「当たり前だよ。でもまさか奈々ちゃんがくろあのことをね～・・・」
「あはは・・・」
「ところで奈々に返事はしたの？」
「まだだけど・・・」
「そうだろうね～。。やっぱりこういう大切なことは悩むよね」

とりでにも同じようなことを言われたが本当に僕は返事に悩んでしまっていた。

「だけどお互いがんばろうくろあ」
「うん、そうだな。ありがとうもこ」
僕はもこにお礼を言ってまた適当にホテル内を歩き出した。

ホテルを歩いているとちょうどエントランスの方に出て休憩するためのいすがあったのでそこに座った。
そしてまた僕はまた再び奈々について考えていた。
だが考えても考えても奈々にどう返事をすればいいのかがわからなかった。

「あーくろあ発見！」

ひとりで色々と考えているとむらぁがこっちに歩いてきた。

「こんなところに居るなんて・・・。結構探したんだよ！」
「ごめん。ちょっと緊張してて疲れちゃってね気分転換に・・・。それよりどうしたの？」
「くろあと話したいから探してたの！」

むらぁが僕を・・・。なんか嬉しいな。

「そうか。そういえばオフ会に来てから全然喋れてなかったね」
「そうだよ。喋ろうと思ったら部屋には居ないし・・・」
「ごめんごめん」
「まぁもういいけどね。それより隣座るよ」

そう言うとむらぁは僕の隣に座った。

なんだろう相手はむらぁだというのに緊張する・・・。

「あはは、くろあもしかして緊張してる？」

「ちょっとだけだよ。何回も話してきたことあるって言ってもそれはチャットだけだしやっぱりリアルで会うと緊張するよ」

「へぇ。まぁそれを言うと私も結構緊張してるんだけどね」

「むらぁが？それはありえないだろ」

「ちょっと、なによ～。私が緊張していたらおかしいっていうの？」

「いや、そういうわけじゃ・・・」

「むー・・・」

むらぁはじろじろと僕を睨んでいた。

「そ、それよりも今日の料理はおいしかったね・・・」

「ちょっと話そらされた気がする・・・」

僕はひきつった顔でなんとか笑ってごまかした。

「でもおいしかったね。オフ会を開いてくれたりんごちゃんには感謝だね」

確かにあいつには感謝するべきかもしれないな。

でも出費のほうがだいぶ痛いんだけど・・・。

新幹線に会場代、それに今日はここに泊まっていくから宿泊代も・・・。

「ねぇくろあ？」

「ん、何？」

「くろあは奈々ちゃんのことどう思ってるの？」

むらぁは今さっきの笑ってた顔と違い真剣な顔で聞いてきた。

「そう言われても・・・。友達だろ？」

「そうじゃなくてー。異性としてどうなの？」

「ちょっと待てよ、なんでそんなこと急に聞いて来るんだよ！」

「もこちゃんから聞いたよ。今アイコンチャットで起こってること」

もこに聞いたのか・・・。あんまりこいつには心配とかかけたくなかったんだけどな。

「どうなの、くろあ？」

「よくわからないんだよ・・・。皆にも励ましてもらったりアドバイスもらったりしてるけど自分がどうしたらいいのかそれに僕が奈々のことを本当はどう思っているのかが・・・」

それにむらぁの顔を見たら余計に悩んでしまう。

否定し続けていたけれどもしかしたら本当に僕はむらぁのこと・・・

「くろあも悩むことあるんだねー」

「なんだよ、それ！僕だって真剣に悩むことだってあるさ！というよりお前にだけは言われたくないよ！」

人が真剣に悩んでるというのにこいつは・・・

「あはは！やっぱりくろあは悩んでる顔よりそっちの慌ててる顔とかの方がいいよ！」

「え？」

「せっかくの可愛い顔が台無しだよ」

「可愛いとかじゃなくて・・・。ていうか何言ってるんだよ！」

少し僕は照れてしまいむらぁから目をそらした。
「全くくろあは照れ屋さんなんだから～」
「真剣に僕は悩んでたんだよ・・・。むらぁが急に変なこと言うから・・・」
「ごめんごめん。拗ねないで～」
別に僕は拗ねているわけではないのだけど・・・。
「くろあ。奈々ちゃんのことちゃんと考えてあげてね」
むらぁは笑っていたと思ったらまたしても真剣な表情へと変わった。
「私はくろあと奈々ちゃんの友達としてふたりを応援してるの」
「むらぁ・・・」
「それに親友を助けるのは当たり前のことでしょ」
なんだろう、むらぁはそんな事を言っているのだけどどこかその声は寂しそうな気がした。。
そしてむらぁは立ち上がりこっちを向いた。
「先に部屋に戻ってるね。がんばってね、くろあ！」
むらぁはそう言うと部屋へと戻っていった。
だけど最後に見せたむらぁの笑顔はどこかぎこちない笑顔だった・・・。

しばらくして僕も部屋へ戻ると、明らかに部屋から出る前と空気が違っていた。
部屋を出る前はきらは寂しそうにしていたのに帰ってきたら部屋ではきらともこが普通に喋っていた。
僕は早速きらともこにの所に言ってどうなるのか聞いてみた？

「あれ、きらともこって喧嘩してたんじゃ・・・？」
「おぅ、くろあ！お前何言ってんだ？俺様がもこたんと喧嘩？ありえねぇだろ？」
「そうなの、もこ？」
「私が部屋に戻ってきたらね、きらが私のところに来て泣きついて謝ってきたのよ。しかも皆の前で」
「あぁ、なるほど」
「さすがにここまでやられるとね・・・。皆の前で恥ずかしかったし。だから今回だけは許してあげたってわけ」
「おぉ、もこたん愛してるぜー」
「ちょっときら。うざいわよ！」

きらはもこにずっとべたべたとしていた。
まぁ何とか仲直りができてよかったな。

それときらの横に座っているムロウは相変わらずのようだ。
疾風やりんご達などと喋っているには喋れているのだがやっぱりいつものムロウの雰囲気ではない。

僕は自分の席に戻った。
どうやら奈々は今むらぁやマジック達と会話をしているようだ。
丁度よかったので僕は少し食事をしながら改めて色々と考えることにした。

奈々は僕にとって本当に大切な人だ。
いつも喋っていると楽しいし僕が悩んでいる時なども相談にのってもらったりしたこともあった。それに前の奈々との事件の時以来から凄く距離が縮まった気がした。
そして奈々の告白・・・。奈々が僕に好意を持ってくれていたことは素直に嬉しいし僕だって奈々のことが好きだった・・・。

けれど僕にはもう一人大切な人がいる。
むらぁ。初めてチャットでできた友達でそして今では親友になっている。
もし最初チャットで彼女と会わなかったら僕はチャットを続けていなかっただろう。
むらぁがチャットの全てを教えてくれそしてなにより楽しさを教えてくれた。
前からだけどむらぁは忙しくてチャットには来れて居ない状態が続いていたけど僕が本当に奈々との事件で精神的にもやばい時にはわざわざタウンまで来て助けてくれた。
なによりあいつと喋っている時が一番何も考えずに自然で居られた。

けれどもこうやってふたりのことを考えてみるともしかしたら僕はもう答えが出ているのかもしれない・・・。
キキが言っていたとおり自分を見直してみるということ。
僕は気づいていなかっただけかもしれないんだな。
このふたりとの関係を壊したくないってことを理由にして・・・。

「おーい、くろあ。お前なに一人でボーっとしてるんだ？」
気づけば隣にてるが来て僕に声を掛けていた。
僕はあまりに考え込んでいて呆けていたようだ。
「あぁごめん。ちょっと考え事していてね」
僕はグラスに残っていたジュースを一気に飲み干した。
「それより。僕行くよ」
「行くってどこにだ？」
てるは不思議そうに僕の顔を見た。
「奈々のところに決まってるだろ」
そう言うと僕は立ち上がって奈々のところまで向かった。
「奈々のところって、お前まさか・・・！」
後ろからてるの声が聞こえてきたがたぶんてるは気づいたのだろう。

奈々はむらぁやマジック達とまだ喋っていたが僕はおかまいなしで奈々に声をかけた。

「奈々ちょっと今いいかな？」

「え、くろあ？別に大丈夫だよ」

正直どきどきしたがなんとか奈々を誘い出すことができた。
むらぁやマジックは何も言わなかったがたぶん僕が今からすることをわかっていたのだろう。
部屋から出て行くときにむらぁと目があったが僕は気にせず部屋からを出た。

歩いている時は奈々とは一切会話はなかった。
奈々のほうも僕の様子に気づいていたのだろう。

そして僕は今さっき来ていたエントランスで立ち止まり奈々のほうへ振り返った。

「急に呼び出してごめんね」

「全然大丈夫だよ。私もくろあと喋りたかったし」

奈々は笑って答えてくれた。

「あぁそれならいいんだけど・・・」

またしても少し沈黙の時間が流れた。
だけどこの機会を逃したらチャンスはもうないだろう

「あのさ、前アイコンチャットであったことなんだけど」
「うん・・・」
「改めて聞くけど本当なの？」

ドキドキしながらもなんとか奈々に聞くことができた。

「本当だよ。私はくろあの事が好き」
「そうか・・・。でもなんで僕のことを・・。僕なんかよりムロウや疾風だっているじゃないか？」
「ううん。私はくろあのことが好きなの。ムロウや疾風は関係ないよ。私はいつも一緒に居てくれて一緒に居て楽しくてそして何より優しいくろあのことが好きになったんだから」

はいつも一緒に居てくれて一緒に居て楽しくてそして何より優しいか・・・。
僕自身はそんなことないと思うけどな。。

「えっと、なんかありがとう」
「あはは、なんでくろあがお礼を言うの」
「そ、そうだな・・・」

やっぱりこうやって奈々に好意を寄せられていると本当に嬉しい。
だけど、それでも僕は・・・。

「くろあ、返事くれる？」

奈々は真剣な顔で僕を見つめてきた。
僕はその顔を見ると僕が考えている全ての思いを奈々に伝えた。
「僕は奈々のことが好きだよ。それはあの出会った頃からだったかもしれない」
奈々と出会ってもう3年は経つ。あの頃から僕のチャットでの日々は本当に楽しいものへとなっていた。
友達ができて、皆とくだらない話も全てが楽しいものだった。
それは奈々が中心となって居てくれてたからだ。
そして僕は奈々のことが好きになっていた。
2人きりで喋っている時、奈々と起きた事件を一緒に越えてこれた時は凄く嬉しかった。
いつの間にか僕と奈々との距離は縮まっていた。

だけど・・・

「だけど僕は奈々とは恋人という関係にはなれない・・・」
「えっ・・・」
これが僕の出した答え。
一番この答えに悩んだけれど全てを奈々に伝えることができた。
「くろあはやっぱりむらぁちゃんの事が好きなの?」
奈々は真剣な顔をしたまま僕に聞いてきた。

「正直さ、むらぁのことを好きだって認めたくなかったんだ。ただの友達でそれにあのむらぁだしとずっと思ってた」

そうやって思っていた。けど思っていたのに僕は・・・

「けどあいつとの思い出を考えていくと僕はあいつのこと好きだったってわかったんだ。確かにあいつとの思い出は奈々との思い出に比べると少ないかもしれない。けれどあいつとの思い出は僕にとって凄く大きなものでかけがえのないものなんだ」

「そうなんだ・・・」

「だから、ごめん。奈々・・・」

奈々にそう言うと奈々は顔を下に向けてしまった。

もしかしたら受け入れてもらえなかったのかもしれない・・・

「あはは」

「え？」

何故か奈々は下を向いたまま笑い出してしまった。

今さっきの会話で笑える所なんてあっただろうか。

「知ってたよ。くろあがむらぁちゃんのこと好きだっていうの」

「知ってたって。。でもだいぶ前アイコンチャットでむらぁのこと好きだって言ったのは冗談みたいなものだったんだよ？」

「違うよ。今日くろあと会ってからもうわかったんだ」

「今日で？」

「たぶん、くろあは気づいてないと思うけど、今日くろあの事見てたらねくろあったらむらぁちゃんのことばっかり目で追ってたんだよ。それ見たらくろあはむらぁちゃんのことやっぱり好きなんだな

～って思ったの」

僕目で追ってたかな？確かにむらぁとは何回か目が合ってたけど。

「だからなんか私としてはやっぱりって感じなの」

「そうか・・・」

「ねぇくろあ」

「ん、何？」

「今までくろあのこと好きでいさせてくれてありがとう」

「なに言ってるんだよ・・・。僕だって君の事好きだったよ。だから・・・」

こっちこそ奈々には感謝しなきゃならないのに・・・。

それに奈々にはいっぱい迷惑かけたのに・・・。。

「駄目だよ、くろあ。くろあはむらぁちゃんにその言葉言わないといけないんだからね」

「あぁ・・・わかってる」

「それじゃ、くろあがんばれ！！」

僕は奈々の言葉を聞いた時奈々への思いをやっと断ち切ることができたと思う。

彼女に応援される。それは僕にとって最高の応援だ。

だから僕はむらぁに思いを告げなければならない。

「ありがとう、奈々。僕行ってくるよ！」

「うん！」

そう言うと僕はむらぁが居る部屋へと戻っていった。

急いで部屋に戻ったがそこにむらぁは居なかった。

「りんご、むらぁ知らないか！？」

「え、むらぁちゃん？確か気分転換してくるって言って結構前に部屋から出てったと思うけど・・・」

結構前っていうことは僕が奈々と部屋から出て行くちょっと後ぐらいなのかな。

「ありがとう。探してみるよ」

僕はむらぁを探すためにまた部屋を出ようとした。

「ちょっと待てよ、くろあ」

出ようとしている時に後ろから声がかかった。

後ろを振り返るとどうやら呼び止めたのはムロウだった。

「どうしたんだよ、ムロウ」

「お前、奈々とはどうなったんだよ？」

ムロウは僕が奈々に返事をしていることを知っていたようだ。

たぶん奈々と部屋から出て行くときにわかったんだろう。

「フったよ」
「な！？お前何考えてるんだよ！」
そう言うとムロウは僕に詰め寄ってきた
それと同時に他の皆も驚いたようにこっちを見てきた
「これが僕の答えだから、正しいことをしたまでだよ」
「ッ！お前奈々がどれだけお前のこと好きだったのか知ってるのか！？」
「知ってるよ。全て奈々から聞いたからね」
「だったら！！」
「僕はむらぁのことが好きなんだよ！今度は冗談じゃなく本気で！」
僕は気づけば大声でそう言っていた。
それに驚いたようにムロウは少し後ろへと退いた。
「今からむらぁに気持ち伝えに行ってくるよ」
「お前・・・」
「だから、ごめん。色々と迷惑かけたね。奈々やムロウそれに皆にも」
僕は最後にそれだけ言うと部屋から出て行った。
僕はひたすらむらぁを探すために会場内を走り回った。

だが様々な場所を探したがむらぁは居なかった。
僕は受付に行って聞いてみたがむらぁらしき人はここでは見てないらしい。
たぶん外には出て行ってないのだろう・・・。

僕は再びエントランスにも行ったがやっぱり居なかった。
一体どこにいったんだろうか・・・。

僕はエントランスで考えているとふと会場を案内する案内板に目がいった。
それを見るとどうやらこの会場は屋上にも行けるらしい。
僕はそのことを知ると走って屋上まで行った。

屋上へのドアを開けるとそこにはむらぁがひとり居た。
彼女のいつものチャットでのイメージはお気楽で悪戯っぽいという感じなのだがこの時のむらぁの後姿はどこか寂しく見えた。

「むらぁ」

僕はそんなむらぁに声をかけた。むらぁはその声に気づいてこっちに振り返った。

「あれ、どうしたのくろあ?」
「いや、今度は僕がお前と話そうと思ってね」

「でもくろあ奈々ちゃんとの話は？」
「終わったよ。全部ね」
「そうなんだ。おめでとう、くろあ！」
むらぁはぎこちない笑顔で僕のことを祝ってきた。
「何言ってるんだよ、むらぁ？」
「何ってくろあと奈々ちゃん付き合うことになったんでしょ？」
「違うよ。僕は奈々のことフってきた」
僕がそう言うとむらぁは今さっきのぎこちない笑顔から驚いた顔へと変わった。
「え、え！？何で！どうしてフったの！？」
「どうしてって・・・。それは色々理由があるんだよ・・・」
「理由ってなによ！くろあだって奈々ちゃんのこと好きじゃなかったの！？」
「落ち着けって。僕はその理由を伝えるためにむらぁと話にここに来たんだから」
「どういうこと？」
少しだけむらぁは落ち着いてくれた。
僕は落ち着いたむらぁを見ると僕が思っている全てのことをむらぁに伝えることにした。
「奈々のこと好きだったよ。本当に、昔から」
「だったら奈々ちゃんのこと・・・」
「でもね、僕にはそれ以上に好きな人が居たんだ。最初はそいつのこと好きだなんて全然思わなかったのに今回のことがあってよく考えてみると僕はそいつのこと好きだったんだ・・・」

「それって・・・？」
僕はむらぁに一番言いたかったことを言うためにむらぁの目をしっかり見てむらぁに伝えた。
「僕はむらぁのことが好きだ。よかったら僕と付き合ってほしい」
「えっ！？」
言えた。やっとむらぁに。後は返事をもらうだけだ・・・。
「くろあ、本気なの？」
「あぁ、本気だよ。僕は君のことが好きだ」
僕がそう言うとむらぁは下を向いて何も喋らなくなってしまった。
もしかしたら駄目なのかもしれない。
「駄目なら駄目って言ってくれていいんだよ。僕気にしないから」
「駄目なんかじゃないよ！」
むらぁは顔を再び上げたがどこかその顔は悲しそうな顔になっていた。
「駄目じゃないよ。駄目なわけないじゃない・・・。私だってくろあのこと好きだもん」
「むらぁ・・・」
「でも、私がくろあと付き合うと奈々ちゃんのこと裏切っちゃうことになっちゃうの・・・。メールでも奈々ちゃんのこと応援してたのに・・・」
奈々とむらぁはメールで連絡をとっていたのか。

「だから、くろあ私・・・」

「ちょっと待って！！」

むらぁが僕に何か言おうとした瞬間後ろのドアのほうから声が聞こえた。
僕とむらぁが声が聞こえたほうに顔を向けるとそこには奈々がいた。

「奈々っ！なんでここに！？」
「くろあとむらぁちゃんのことが気になったから探してたの・・・。それにしてむらぁちゃんやっぱりそんなこと考えていたんだ・・・」

どうやら奈々は僕達の話の内容を聞いていたようだった

「だって、私がくろあと付き合ったら奈々ちゃんのこと裏切っちゃうことになるんだよ・・・。私そんなの嫌だよ」
「むらぁちゃん私そんなこと気にしないよ」
「どうして？」
「私むらぁちゃんがくろあのこと好きなこと知ってたよ」
「え、え！？なんで知ってたの！？」

僕は何故かふたりの会話に口を出すことができないでいた。

「むらぁちゃんアイコンチャットでもくろあとばっかり仲良くして

たしそれにメールしてる時だってくろあのことばっかり話してたじゃない。誰だってわかるよ」
「そうだったっけ？」
「そうだよー。それに私はむらぁちゃんのことライバルだって思ってたし」
「そんな私は・・・」
「だから気にしないでむらぁちゃん。自分の気持ちに素直になってよ」
「奈々ちゃん・・・」
奈々はむらぁとの会話が終わると再びドアの方へとむかい屋上から出て行った。
そしてまた僕とむらぁのふたりだけになった。
「奈々、辛いっていうのにわざわざ僕たちのところまで来てくれたんだな」
「うん、いい友達もったよ」
僕は奈々が僕のことを嫌いになってくれてないだけで嬉しかった。
「くろあ、返事のことなんだけど」
「あ、うん」
あやうく僕は本題のところを忘れてしまうところだった。
「私もね、くろあと一緒になりたい・・・。くろあの彼女になりたい！」
「あ・・・」
むらぁはそう言うと僕に抱きついてきた。

「よかった。君に断られることが怖かったんだ・・・」
「ごめんね、くろあ。でも、私はずっと前からくろあのこと好きだったんだよ」

むらぁを抱きしめているとむらぁから甘い匂いがした。
女の子を初めて抱きしめるけど皆こうなのかな・・・。

「そうだったのか。それは気づかなかったな」
「もう・・・。タウンでもメールで書いてたじゃない」

そういえばそんなメールがあったな。
でも僕はあれは冗談だと思っていた・・・。

「全く、くろあはにぶちんなんだから・・・」
「あはは、ごめんごめん」
「まぁ、くろあをゲットしたからもういいけどね」
「僕もなんだか今まで深く考えていたことがどうでもよくなったよ」

抱き合ったまま僕達は会話をしていた。
抱きしめている時はドキドキしていたが、どこか安心できるとこもあった。

「くろあ・・・」
「ん？」

むらぁは僕の名前を呼ぶとだんだんとむらぁの顔というより唇が僕へと近づいてきた。
僕の頭は色々と処理できないでいた。
だけど、これだけはわかる。あの恋人同士でやる「キス」だ。

しかし、ちょっとこれは早くないだろうか。まだ恋人という関係になって30分も経ってない・・・。
いや、でもここでいかないと男じゃない！
僕は決心してむらぁとの唇の距離を縮めていった。

むらぁとの顔はやはり緊張しているのか赤かった。たぶん僕も真っ赤だろうな。

そしてむらぁとの距離が数センチメートルのところになったとき僕も目を閉じた。

だがむらぁとのキスをする直前突然携帯が鳴り出した。

「うわっ！！ご、ごめん！」

僕は慌ててむらぁから離れて携帯を見た。
携帯を見るとりんごから電話のようだ。

「も、もしもし・・・」
「あー！出るの遅いよ！！いったい何処居るの！？」
「いや、ちょっと屋上に・・・」
「屋上ー！？どうせ、むらぁちゃんと一緒に居るんでしょ？早く部屋に戻ってきなよ。こっちはふたりを待ってるんだよ！」

なんで、りんごたちが待ってる必要があるのだろう？

「わかった、すぐ戻るよ」

りんごに返事をすると僕は携帯を切った。

「あはは、りんごちゃんから？」

「そうだよ、全くあいつは・・・」

あいつほんとにタイミングが悪すぎる・・・。なんでこんな大事な時に。

「なんか皆が待ってるらしいからそろそろ部屋に戻ろうか？」

変な感じになってしまったので僕はむらぁを急かすように言った。

「う、うん。そうだね・・・。あ、くろあ！」

「何？」

「続きはまた今度ね！？」

むらぁはそう言うと先に階段を降りて行った。

続きはまた今度って・・・。ちょっとは期待していいのだろうか？

僕はそんなことを考えながら部屋に戻るのだった。

「「「おめでとーー！！」」」

部屋に戻ると何故か皆が祝ってきた。

「えっと、これ何？」

「何って、むらぁちゃんと付き合うことになったんでしょ？だから祝ってあげてるんじゃない」

りんごはそう言うとむらぁを引っ張ってきて僕の横に並ばせた。

「いや～お似合いの二人だな。チャットでは俺様ともこたんの次に出来たカップルだな」

「きら、私付き合うって言ったつもりないんだけど・・・。それよりおめでとうふたりとも」

「う～ん、相変わらずもこたんはツンデレだぜ☆」

きらともこはまた痴話喧嘩をし始めた。やっぱりこの2人はこの方がいいよな・・・。

「くろあ、おめでとう君ならやると思ってたよ」

「くろあにむらぁおめでとうな。お前らは喧嘩しないようにな」

てるに疾風は心から祝福してくれているようだ。相変わらずこの二人はいい奴だ。

「おめでとう。二人のこれからの展開に期待させてもらうぞ」

マジックにも色々世話になったな。それにしてもこれからの展開に期待されてもな・・・。

「くろあ・・・」

「ムロウ、その～今さっきのことなんだけど」

奈々に告白されてそして奈々をフった後もそうだけどムロウにも迷惑をかけた。

それについては誤っておかないといけない。

「お前、漢だな」

「え？」

「お前の行動にはびっくりさせられるよ。それによく決断したな。むらぁと幸せにな」

「あ、ありがとう・・・」

ムロウに謝る前になぜかムロウとのごたごたは解決できたようだ。

何にしても解決できてよかった。

「くろあにむらぁちゃんおめでとうね！まさかふたりがくっついちゃうなんてね」

「あはは、ありがとう。りんごちゃん。でもりんごちゃんがオフ会開いてくれたからくろあと一緒になることができたんだよ？だからありがとう」

「いえいえ。むらぁちゃんくろあに何かされたら私に言ってちょうだい！私がくろあを成敗してあげるから！」

「おぃ、りんごそれだけは勘弁してくれ。しかも何かされたらって僕が何かするみたいじゃないか」

りんごはいい奴か悪い奴かの区別がしにくい奴だ。

でも確かにこいつのおかげで僕とむらぁは一緒になれたのだから感謝しないといけないかもしれないな。

「くろあ、むらぁちゃんおめでとう」

「奈々ちゃんありがとう。それとごめんね」

「まだ言ってるのむらぁちゃん。私は全然大丈夫だから！ふたりが幸せになってくれたらそれでいいの」

「奈々ちゃん・・・。うん、私達幸せになってみせるね」

なんだかふたりの会話を聞く限り僕達が結婚するみたいな会話だな・・・。

「ねぇ、くろあ。ちゃんとむらぁちゃんを幸せにしてあげてね」

「わかってるよ。絶対に幸せにしてみせる。それに奈々との約束だから守ってみせるよ」

「うん！あ、だけどもしむらぁちゃんに愛想つかされたって時は私が・・・」

「ちょっと奈々ちゃん！！」

「嘘だよ。嘘！」

一体奈々は何を言おうとしていたんだろうか？

「さーてと、最後にくろあに何か一言言ってもらおうじゃねぇか！」

「え？」

ムロウがいきなり僕の背中を叩きそんな事を言い始めた

「がんばれーくろあ！」

「何か良いこと言えよー！」

周りからもなぜか色々と言われてるし、ここはビシッと言うべきかもしれない。
僕は深呼吸をすると皆の前に立った。

「皆、僕とむらぁのこと祝ってくれて本当にありがとう。まさか今日こんな形で僕達が恋人という関係になるとは思ってもなかったよ。それにむらぁと付き合えるようになったのは僕だけの力じゃない。ここにいるアイコンチャットのメンバー、タウンのメンバー、その他に僕を励ましてくれたキキ、とりで、田村が手伝ってくれたから僕はむらぁと付き合えるようになったんだ」

皆は最後の田村の名前を聞いた時びっくりしたような表情をしていた。
まぁあの荒らしが僕を励ましたなんて嘘のように思えるだろう

「だから皆に感謝してる」
「くろあ・・・」

隣に居るむらぁは僕の手をキュッと握ってきた。
むらぁと繋いだ手は温かかった。

「今までも色々と迷惑かけてきたけどこれからもチャットで皆には迷惑をかけることがあると思う。それでもこれからもチャットでもリアルでも仲良くしてほしい」

「当たり前でしょ、くろあ。私達はずっと友達だよ」
「なにがあっても俺達は友達だ」

奈々を始め皆が返事をくれた。
そしてむらぁを見ると彼女はとても幸せそうな顔をしていた。

「ありがとう。皆これからもよろしく」

改めて僕は皆に頭を下げた。
隣にいるむらぁも同様に頭を下げていた。
こうしていると彼女というよりなんだか保護者のような・・・。

「よっしゃ！全て終わったことだし残りの時間はめいいっぱい楽しむぞ！！」

こうして僕達はオフ会の残りの時間を有意義に楽しく過ごした

そして楽しい時間は過ぎていくのが早いもので終わりの時間になっていた。

「あー今日は楽しかったねー！」

僕達チャットメンバーは会場から出て今は外に出ていた。

「ちなみに今日中に家帰る人ー」

りんごがそう言うと、奈々、疾風、もこ、きらが手をあげた。

「俺はもこたんを送るという使命がるのでな」

「来なくていいよ、きら」

もこは急ぎの用があるらしいがきらはただもこを送りたいらしい。

「私は部活があるんだよね～」

「俺も・・・」

奈々と疾風は部活らしい。

「それじゃあ皆一旦ここで解散だね～」

「おぅそうだな。それじゃあ皆今日はお疲れ！次もまたオフ会絶対やろうぜ！！」

今日1日司会だったりんごと途中から司会になったムロウが閉会てきな感じで終わりを告げていた。

このふたりは本当に1日ご苦労様だな。

「じゃあね、皆。またチャットで会いましょう」

「あばよー！俺様が居ないからって寂しくするなよー」

「お疲れさま、今日は楽しかったよ」

きらともこ、疾風はここで僕達と別れた。
それを見送ると奈々が何故か僕の所へとやってき小声で喋り始めた

「くろあ、くろあ」
「どうしたの？」
「むらぁちゃんとこの後も楽しんでね！」
「なっ！！」
後って一体・・・。それより何を言ってるんだ・・・？

「それじゃあねー皆！！」
それだけを言うと奈々は先に行っている3人の所へと走っていった。

「くろあ、奈々ちゃん何て言ってたの？」
「い、いや大したことじゃないよ」
「えー！ちょっと何話してたのよー！」

むらぁは僕と奈々が皆に内緒で話していたことが気になるようだ・・・。

「えっと、あ！それより、りんご今日はお前どうするんだ！お前も明日帰るんだよな！？」

何とか僕は話をそらした。うまくそらしたのだがその間むらぁはずっと横で睨んでいた

「私も今日は帰らないよ。それにこの後てると遊びに行くんだよー！」
「え、そうなのか？でも、お前オフ会来る前に僕にショッピング付き合ってとか言ってなかったっけ？」

「えー、だって彼女さんが居るのに私が誘っちゃ駄目でしょ？」
りんごはむらぁの方を見た。たぶんこいつは気を利かせているつもりなのだろう。
それにてると一緒というのなら安心してこいつを任せられるな。

「てる、りんごの頼んだよ」
「あぁ、でもりんご一日中遊びまくるって言ってるのだが・・・」
「それは、ご愁傷様・・・」

この後りんごとてるは僕達と別れてふたりで歩いていった。
てる、大丈夫だろうか・・・？

「ムロウとマジックはどうするの？」
「俺はマジックと1日飲み明かすつもりだぜ！」
「飲むって未成年だろ・・・」
「フッ、冗談に決まってるだろ。ジュースだよジュース」

なんかムロウが言うと冗談に聞こえない・・・。

「というわけでお前らも楽しめよ！」
ムロウは僕の肩を叩きながら笑っていた。

「それじゃあな、くろあ、むらぁ」
「また会おうぜー」
ムロウとマジック、本当に飲むつもりじゃないだろうな・・・。
僕は二人に手を振って見送った。

そしてついに僕とむらぁだけとなった。

「えーっとむらぁはこの後予定は？」
「私もどこかで泊まっていく予定だよ」
「なるほど・・・」
「あーでも、一人じゃ寂しいから誰か居てくれたらいいんだけどね〜」

そう言うとむらぁは僕の方をチラッと見てきた
たぶん、何か期待しているのだろう・・・

「じゃあ、一緒にどこかで遊んでいく？」
「ほんとー！？いくいく！」

むらぁは子供のようにはしゃぎだした。

「さっすが私の彼氏さんだね！」
「あ、そういえば僕達付き合ってるんだったね」
「そうだよー！それより早くいこうよ！」
「お、おぃ引っ張るなよ！」

むらぁは僕を強引に引っ張って進みだした。
ところで一体どこ行くんだろう・・・

気づけば僕とむらぁは街中へと来ていた。
初めてくる場所なのでここがどこかが一切わからなかった。

「あのさぁ、僕達どこ行ってるんだ？」
「う～ん、とりあえず街中をぶらぶらしてる」
「ぶらぶら・・・。一応行く所ぐらいは決めとこう・・・ってむらぁ？」

ついさっきまで隣にいたむらぁが居なくなっていた。
まさか、迷子！？

「くろあ～」

迷子と思った瞬間少し離れたところからむらぁの声が聞こえてきた
僕はむらぁのところへ行くとどうやら洋服店の前に置かれているガラスケースの中の服を見ていたようだ

「むらぁ少し離れるならちゃっと言ってくれないと・・・」
「ねぇねぇ、くろあこの服可愛くない！？」

むらぁは気に入った服を指差して僕に教えてくれた。
その服は結構フリフリで派手な感じの服だった。
少しマニアックな服かもしれないがむらぁなら似合う気もしなかった・・・。

「確かに、むらぁなら似合うと思うけど」
「わーっ！くろあが褒めてくれた！じゃあ買っちゃおうかな♪」

どうやら僕に褒められたことが本当に嬉しかったらしくむらぁは店

に入ってこの服を買いにいった
それにしても服を買うのはいいのだがこの服僕の3か月分の小遣いぐらいの値段だぞ・・・。
もしかしてむらぁって結構お嬢様なのかな？
そんなことを考えているとむらぁがニコニコしながら店から出てきた
「私がこの服着るときを楽しみにしててね♪」
そう言うと再びむらぁは歩き始めた。
まぁ、確かにあの服を着たむらぁを見るのは悪くないな。

「くろあカラオケでも行く？このまま何もしないよりはいいでしょ」
「そうだな。もう夜になるしな」
腕時計を見てみるといつの間にか18時半になっていた。
結構オフ会してる時間が長かったからな。

「よし、行こうか」
「うん！丁度そこにあるし、入ろう」

僕達はすぐそこにあった小さなカラオケ店へと入って行った

「はぁ、疲れた・・・」
「こ～ら、今から歌うんだからテンション上げていこうよ！」
「わかってるけど・・・。それにしてもむらぁは元気だね」
「そんなの当たり前でしょ。だってくろあと一緒にいるんだから！」

むらぁは平然とそんなことを言った。ほんとこいつは人をドキッとさせる台詞を平然と言えるな・・・。

「それじゃあ歌うよー！」

この後僕達はしばらく歌っていった。
僕は疲れていたので歌うのは少し控えていた。だがむらぁは疲れていないのか元気に歌っていた。

1時間ほどするとむらぁも少しは疲れたのか一旦歌うのを中断して休憩し始めた。

「ふ～、やっぱりカラオケはストレス解消になるね～」
「へぇ、むらぁにもストレスってあるんだね」
「当たり前でしょ。私みたいなお年頃の乙女には色々とあるんだよ。くろあにはないのストレスとかって？」
「ストレスか・・・。別に今は特にないかな」

ストレスみたいなものはあったんだけど今日で全てスッキリしたからな・・・。

「ふーん、そっかぁ」

むらぁは歌いすぎて喉がかわいたのかテーブルにあったジュースを飲み始めた

「ちょっとむらぁそれ僕が飲んでたジュースだって！」

「え～いいじゃない。ちょっとだけだよ」

そう言いながらだいぶむらぁは飲み干していた

「あのさ、僕が言いたいのはそういうことじゃないんだけど・・・」

「ん？あっ、そっか～これ間接キスだね！アハハそういうことかー！」

僕はこんなに恥ずかしそうに言いにくくしていたのにむらぁはあっさりと間接キスという言葉をだしてきた。こいつに「羞恥心」という言葉はないのだろうか？

「でも相手がくろあだし別にいいか！私達恋人同士だしね♪」

「いや、確かにそうだけど・・・」

「まぁそんなことより今日のオフ会楽しかったね～」

「そうだね。ほんとに楽しかったよ。今度またオフ会する時が楽しみだね」

「だよね。今度はもっと人増やしてやりたいね」

「あぁ、とりでにキキとかも呼んでみるか・・・」

今回の騒動で二人には助けられたし。それと田村にも。

でも、あいつをオフ会に呼んだらなんか凄いことになりそうだ・・・。

「それにしても、まさかくろあとこういう関係になるとは思ってもみなかったな～・・・」

「それは僕もだよ。3年前はこんなになるとは思ってもなかったよ」

「3年かぁ、もうそんなに経つんだね・・・」

3年前チャットで初めて出会ったのがむらぁだ。そこから友達、親

友そして今恋人と関係が変わってきた

「あの時は、りあら、リッド、むらぁ、僕っていう組合わせだったよね」

「そうだね。りあらにリッドなにしてるかなぁ？」

いつの間にか居なくなっていたふたり。あの二人はどうしているだろう。

さすがにチャットで会う事はもうないだろうな・・・

「あ、ごめんちょっとトイレ行ってくるよ」

「りょうか～い、じゃあ私なにか注文しておくね」

用を済ませ部屋に帰っていると僕は見知った顔を見かけた。

「あれ、てる！？」

てるはこっちに向かって歩いてきていた。

「ん、くろあ何でここに居るんだ？」

「いや、むらぁとカラオケを・・・・。もしかしてるもりんごと？」

「うん。りんごが凄い歌っててさ・・・」

「お互い苦労してるね・・・」

自分の連れているパートナーのことを思うと僕達は一緒に苦笑いをした。

「なぁ、くろあ。りんごってどんな人がタイプだと思う？」

「え、りんごのタイプ？」

まさか、ここでてるがこんなことを聞いてくるとは思わなかった。

「いや～よくわかんないけどさ、とりあえず一緒に居て楽しいやつとかじゃないかな？」

「そうなのか？」

「確か、結構前そんな感じで言ってたような。ていうか、てるまさか本当にりんごのこと・・・？」

「まぁな・・・。今日一緒に居て改めてそう感じた」

てるもアイコンチャットでりんごの事好きとか言ってたがまさか本当だったとは。

てっきり皆に追い詰められて僕と同じで適当に答えたと思ったんだけどな。

「でも、てるならりんごの事任せられるよ」

「はは、そうかな・・・」

「あれでもあいついいところあるからさ、りんごのこと頼んだよ、てる」

「あぁ、任せてくれ！」

そう言うと僕達は自分の部屋へと戻っていった。

りんごがてるに迷惑かけないといいんだけど・・・。

部屋に戻るとむらぁが注文した食べ物や飲み物がきていた。
「ちょっと～くろあ遅いよ！何してたのさ！？」
「ごめんごめん、色々とね・・・」
この後もむらぁは僕が何していたのかが気になるのかぐだぐだ言っていたがなんとか宥めて僕達は簡単に食事を済ませながら残りの時間は歌った。

「うーん、楽しかったぁ！」
僕達はカラオケ店から出て外に居た。
時計を見ると既に9時になっていた。
「そろそろ、寝る所探さないとな・・・」
「それもそうだね～」
「むらぁはどうするの？どこか予約とってるの？」
「ううん。全然！くろあはどうするの？」
「僕はどこか近くにあるネットカフェでも行ってそこで過ごすことにするよ」
ホテルだと料金も高いし、ネットカフェだと安くつく。
金のない僕だとネットカフェがぴったりだ。
「ん～じゃあ私もネットカフェにしようかな」

どうやらむらぁもネットカフェにしたらしい。もしかして僕に合わせてくれたのかな？

「それじゃあネットカフェ探そうか」

ネットカフェを探しに行こうとすると後ろからむらぁが手を繋いできた

「ちょ、ちょっと・・・」

「え～、いいじゃない私たち恋人同士なんだし」

「いや、嬉しいんだけどまだこれはちょっと早いような・・・」

「もぅくろあったら照れちゃって♪でも、私だって結構緊張してるんだよ？」

意外だった。まさかむらぁから緊張という言葉が出るなんて・・・

「あ、あれネットカフェだよね」

手を繋いで歩いているとネットカフェらしき建物があった。

「そうだね。それじゃあ入ろうか」

ネットカフェに入ると僕たちは今日ここで寝泊まるので朝までで、
座椅子部屋が空いていたのでそこに決めた。
座椅子部屋に来るとそこには1畳ほどスペースがあり、テーブルの
上にパソコンがあり座椅子がおかれてあった。

「っていうかなんでここにむらぁもいるんだよ！？」

何故か1畳という狭いスペースにむらぁまで部屋に入ってきていた

「別にいいでしょ～恋人なんだし」
「い、いや確かに恋人同士だけどさすがにまだ早いって！ていうか
今さっきからその口実ばかっりじゃん！」
「え～、それにお金勿体無いでしょ。明日帰るのにだってお金だい
ぶかかっちゃうし」
「それはそうだけど・・・」
「ということで私も今日はここで寝るね！」
「ちょっと待てよ！お前、僕が変な気でも起こしたらどうするんだ
よ・・・」
「ん～、でもくろあだし別にいいよ～」

どうやらむらぁになにを言っても無駄なようだ・・・

「ほら、1畳って言っても意外と二人でも寝れるじゃない」
「あー、もうわかったよ。それじゃあむらぁは先に寝てなよ。僕は
まだ眠たくないしインターネットでもしてるから」

それにむらぁが横で寝てたら緊張して一睡もできそうにないし
色々と考えながらも僕はパソコンを起動した。

「インターネットするんだったらアイコンチャット行こうよ！」
「別に今日はチャットしなくていいだろ？今日オフ会行ったんだし」
「だって～2人でチャットをするなんて、こんな貴重な体験なかなかできないよ？」

まぁ確かにチャットを1つのパソコンでするなんて珍しいことだよな。

「はぁ、しょうがないな。じゃあチャットでもいくか」
「わーい、やったー！」
そう言うと僕たちはアイコンチャットの場所へと行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0396q/

あの日の思い出

2011年10月13日01時52分発行